巻の文字名相に執着して之を讀誦する者を謂りたる詞なり。

鳴の聲なるか。何をもしるべきか如来の正法輪なるや。何をもしるべきか如来の正法輪なるや。何をもしるべきか。無間の業をうくべし。然しこれを正法輪といはゝ、何をもしるべきか如来の正法輪なるやゝ。又僧に問ふ、門外何の聲ぞ。僧いはく、雨滴の聲。清めんや。衆生顛倒して已に迷ふて物を逐ふ。僧いはく、和尚作麼生。清めんや。泊どおのれにまどはざらましを。僧いはく、泊どおのれにまどはざらましや。意旨如何。清いふ、出身は猶はやすかるべく脱体の道はかたかるべし。鏡清は明眼の人、何に依ておのれに迷ふまどはんや。もし鏡清も未だ悟らずして、泊どおのれはまどはざらましや、脱体の道はかたかるべしと云ふまどはさゝ無間の業をうくべし。かくの如くの道理にあらず、出身はやすかるべし、脱体の道はかたかるべしと云ふ、この意又如何。又雨滴の聲といはゝ、おのれにまどふ顛倒の衆生なり。嘆て自己をなさんとすれば、これ雨滴の聲なり、如何か的を辨せん。たゞまどふの句を辨じ得たりといふも、たゞ是れ少分の看經の眼ある人なり。未だ脱体の道を得すれば、数外別傳の旨において、夢にも曾て知るべからず。況や看經の眼だもなかちん人、数萬卷の經をよむとも、滴水消し難し、十方の信施は如何かせん。古人の曰く、看經は須らく看經の眼を具して始めて得べしと云へり。信施は、在家も出家も、乃至畜

類までものがれざるものなり。天地、國王、師長、父母の恩、誰かこれをうけざる、たゞ能く四恩を報じ、三有をたすけんと欲せば、根機の利鈍をいはず、直下に照見せよ、即今の見聞の主これ何ものぞ。問、法華經の長者の譬喩のごとさんは、衆生みづからあやまりて、心の外に佛を求め法を求むるを、長者の子の外にあそびいで、家をわすれ父をはなれて、他人に衣食を請ふに喩へたり。又普門品には、たゞひとへに觀音の力を念せば、解脱を得べしと說かれたり。一切の災難にあはん時も、彼の觀音の力を念せば、火坑も變して池と成るべしと見えたり。然れども觀音を信ずる人の家もやけたることもあり、結句觀音堂もやけたることあり。又觀音を念ずる人も災難にあふこともあり。かやうのこと思ひ見るに、世尊も悪く妄語を說かれたり。然らば諸經にいづれの經にも、この經を受持讀誦、解說書寫せん者、皆成佛すべしと說き、又いづれの菩薩、いづれの佛においても、一々に此の佛菩薩この經呪よりうへなしと說き玉へり。これによりていづれを信ずる人も、皆僧慢をおこして、我が信ずることは眞實なり、自餘は皆劣れりといふ。是れを以て見る時は、佛の天をすかして、皆僧慢をおこさせて、地獄におとさんとせらるゝか、衆生のあしく心得たるか、決定の義如何。答、如來は是れ眞語者、實語者、如語者、不誑語者、不異語者、

者なり。世尊の所說一偈一句もあやまるべからず、たゞ衆生の妄智を以て眞說を見る故に、千差萬別あり、目を指ゝして月を見れば、一月の二つに見もるか如し。もし自性を明らめて見る時は、一切の語言みな自己に歸す、千波萬波もと一水なるか如し。經にいはく、十方佛土の中には、たゞ一乘の法のみありて、二もなく、また三もなし、方便の說そのをくと。一乘とは一心なり、心外に佛を求め法を求むる者は、みな家をわすれ長者の子なり、自性の妙法を悟る時を、迷子の家に歸るに喩へたり。諸人、家に歸らんと欲せば、たゞ自性を悟るべし、心性は諸佛の本源、諸經の題目なり、或る時は是れを妙法といひ、或る時は圓覺といひ、或る時は陀羅尼門といひ、或る時は國土といひ、或る時は世界といひ、或る時は淨土といひ、或る時は華嚴重々の法界といひ、或る時は如來藏といひ、或る時は須彌東王佛といひ、或る時は香積如來といひ、或る時は阿彌陀といひ、或る時は藥師といひ、乃至普賢、文殊、觀音、地藏と名けて說くところ、皆たゞ一心をさすことばなり、名は萬差なりといへども、法体二にあらず、この故に經に曰く、修多羅の旨は月をさす指の如し、もし月をみをはらは、さすところ畢竟して月にあらずと知らん、心を見て性を悟る、悟は教外別傳にして、名相語言の上にあらず。この故に月をみをはれは、さすところ畢竟じて

〔華嚴經〕 華嚴經に二十種華藏世界の事を說けり。

月にあらずと知るとす。もし一切の佛祖の說話、みな尊を指す語なりと知らずんば、名相語言に貪著して、彼は彼を是とし、これは彼を誇じ、互に論議をなし、昏惑燈をおこすは、藥かへつて毒となりて、地獄の業をつくべし。喩へば三月の手家を賺すが如し。この月のいはれを說く人、いづれの處の月を說く時も、たゞ此の一月眞實なりと說けは、聞く人あやまりて、たゞ我が家の月をこそ眞實なりと說かれたれ、他處の月は實にあらずと論する如し。抑も十方世界の中に、何れの國土にか別の月あるべき、たとひ百億の須彌、百億の日月といふも、本來兩箇にあらず。佛の說く所の法も、又かくの如し。諸人の一心の外に別の佛もなく別の法もなき故に、その機にしたがひ、その時に應じて衆生の心法を說く時、阿彌陀と名けて說く時は、阿彌陀の外に佛もなく法もなしと說き、妙法と名けて說く時は、妙法の外に法なしと說き、觀音と名けて說く時は、一切皆觀音也と說き、心と名けて說く時は、心の外に法なしと說き、一切の言說、皆之を以て知るべし、見ずや、いふことを、阿羅漢に三毒ありとは說くとも、如來に二種の語ありとはいはじ。阿羅漢とは、八萬四千の煩惱をつくしたるものなり、もし猶ほ阿羅漢には煩惱ありとも、如來に二種の語あるべからず、もし二法ありといはゞ、如來を誇するものなり。しかもかくの

如く本法には二法なしといへども、衆生の業識の輕重によりて、根機に利鈍あり、法を悟るに頓漸あり、迷より悟に至るに淺深あり、その淺深によりその德も高下あり。この故に經に曰く、一切の賢聖は、皆無爲の法を以て、而かも差別ありと。然るを未だ悟るところなくして、たゞその名相をもちあつかふ人、自ら尊と稱して法なし、誰か宗か貴く何の宗か賤しきといふて、おさへて一になさんとするとも、万法一源の自心を悟らずんは、一になさんと擬する一念、即ちわかれて二となる、たとへば氷も本是れ水なりとはいへども、とけざる程はかたく、さめざる程はあつくして、水の如くにはつかはれざるが如し。又問し茶香をかげども、くさきものを喫したるひとは、わが口の氣にさへられて、その茶香の眞實の香をかき得ざるに似たり。何の宗にて悟あれ、一法を心中におかん人、道にかなふこと夢にもあるべからず、一翳眼にあれは、空華亂墜す。この故に經にいはく、法なほ捨つべし、何を況や非法をやと。法は内覺なり、非法は名相文字言句等の有相の類なり。たゞ内外において住著する所あらは、皆を私なり。經に曰く、住する處なくして、その心を生すべしと。もし人われは是れ佛なりといはゝ、佛に住すいわれは是れ衆生なりといはゝ衆生に住す。乃至禪宗も念佛者も、或は禪宗の中に一法に著せは、皆是住するところ

なり。全体住するところなき時、如何なるか是れその心、急に眼を着けて見よ、たゞ茶香の香を聞く知らんと欲せは、まづ自ら口をきよめて一味一香をのこさゞるべし。佛法を悟らんと欲せは、佛法に著する底の心念を放下して、佛いまだ出世せず、一法いまだおこらず、我いまだ生せざりし前、心とも性とも名くべき物なかりし時の本來の面目を直に己れにかへすべし。たゞその本源に精彩をつくるを名けて念彼觀音力とす。かくの如く語の外に自ら徹悟せは、觀音即儞、儞即阿彌陀なり。この時始めて法に二法なし、一切平等なりといはゝ、即ち是れ相應すべし。もしたゞ見性悟道の分なくして、情識を以ていはゝ、諸宗各別なりと云ふもあやまりなり、法に二法なしといふもあやまりなり。佛在世の時ひとりの菩薩あり、聞思より修して三摩地に入るが故に、觀世音と號す。一切の音聲を聞くにあたりて、その聞く心を觀じて自性を悟る人なり、世尊これを三十五圓通の中に第一なりと印可す。この菩薩慈悲心甚だ深く、應用あまねくして、機に隨ふて說法して、能く衆生を教化す。てゝを以て世尊この菩薩を喩として、衆生の自性の妙用の無邊なることをいはゝ、喩もおよぶべからず、いづれの菩薩かこれにひとしきことを得ん。自心處々にあきらかに應現して、眼

〔聞思〕 經論或に善知識に從て法を聽聞するを聞と云ひ、その所聞の法義を思惟するを思と云ひ、已に法を聞きその義を思惟し、これに隨て修習するを修と云ふ、三慧地は三昧と同し。

〔鹿野園〕 釋尊成

に應じては色を見、耳に應じては聲を聞き、鼻にありては香をかぎ、口にありては談論し、手にありては執捉し、足にありては運走す。諸佛衆生平等に彼の恩力をうけたり。一切の萬法も彼によりて建立す。日月の光明のあまねきも、猶は間斷あり、心性は晝て晝夜の隔なし、これを悟れは解脱す、これに迷ふを災難とす。法財を損じ功德を滅することこの迷情によらずといふことなし。八萬四千の煩惱は、意識を以て根本とす。意識は諸相に貪著して、地獄の業を增長す。この故に意識は火地なり。もし人見性すれば、情識意想の忘する時、諸の無明の業を轉じて解脱の大海となす。この故に經に曰く、大火坑におしおとさるゝとも、かの觀音の力を念せは、火坑變して池とならんと。一切の心中の妄情は、自性を觀すれは、即時にみな消滅す。この故に一切の災難にあはん時も、かの觀音の力を念せは、即ち解脱すべしと說く。もしこの自己の觀音を信せずして心の外に求めは、その人即ち家をわするゝ長者の子也。指を執して月となさは、いかでか佛意にかなはんや。世尊一代時教を說く、教によりて各我か信する處の名相を執して、淺深高下を論量す。佛いまた出世せず、いまだ一言を說かざりし已前、何をか大乘とし、何をか小乘とせん。世尊末後にいはく、はじめ鹿野苑より娑羅雙樹のはざまに涅槃の時にいたるまで、その三中間

道の後、初めて法を說き給ひたる地なり。

〔跋提河〕 釋尊入滅地附近の河名なり。

〔西天の二十八祖〕摩訶迦葉より菩提達磨に至る、之を印度相承の二十八祖とす。

〔唐土の六祖〕菩提達磨より大鑑禪

に於いて、一字も解かずと。世尊一代時教をは、一字不說の語を以て一鎚に擊碎す、是れ病に應して藥を與へて、病平愈して後、遂に藥をのぞくに似たり。しかもかくの如くなりといへども、この一字不說の語をは、何の宗とかいはんや、是れ破するか、是れ成するか、これ說か、これ無說か、委細參詳せよ。この中に向つて淺深高下を論せは、昨夜の殘夢の跡を認めて、寸尺をとるか如し、幸に末後の一句あり、世尊いはく、我に正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙之法門、教外別傳あり、摩訶大迦葉に付囑すと。しかも彼の妙心は、人々の本源なり。那箇か是れ諸人の妙心、急に眼をつけて看よ。

問云、世尊一字不說の句を以て、前の所說の語言名相をは一鎚に擊碎して後、百萬の大衆の中にして拈華瞬目す。衆中に是れ何の宗旨といふことを知らず、たゝ迦葉一人これを承當して、即ち破顏微笑す。世尊の曰く、我に正法眼藏、涅槃妙心あり、摩訶大迦葉に付囑す。迦葉もまたこの正法を阿難に付す。しかしてよりのち、西天の二十八祖、唐土の六祖よりこのかた、直に今にいたるまで、皆迦葉付囑の一法を傳へ來るやいなや。答云、然り。問曰、もし然らは師資相承の時、みな師は拈華瞬目し、弟子は破顏微笑すさへに、何としてか古今の祖師の付法の語同しからざるや。答云、是れを以て知るべし、その事

は語言名相の上にあらざることを。問云、すでに我に正法眼蔵、涅槃妙心あり、迦葉に付すといふ、これ語言名相にあらずや。答云、すでに是れ妙心を付す、何ぞ語言名相ならんや。譬たゝ狂狗の人に打れて塊を逐ふが如し、魚兎を得て筌蹄を忘ずるもの始めて得べし。問、佛祖は皆名相語言の外に心を傳ふといはゝ、心の二字も語言なり。語言をはなれては、何れの處にか心を求めん。師即ち上座を以て問ふ。僧應諾す。師のいはく、是れ什麼。問云。心法は人々具足して、諸佛衆生の差別なきは、迦葉も本來具足すべし、何に因てか世尊の付囑するといふや。答、付囑とは、はじめて一法の人に與ふるなしゝ、たゝ世尊の直示に依て、迦葉の見性徹悟する所の我にひとしきを證明せらるゝ悟なり。もし先德の證明によらずんは、未だ得ざるを得たりといひ、未だ證せざるを證したりといふ者ありて、求法の人を惑亂せば、正法やうやく破滅せん。こゝを以て前佛は後佛を識し、先達は後學を判して、なほざりに人をもるさず、來風ふかく辯して、眞正の見解を證據す、これを名けて付囑とす。語を承けて須らく宗を會すべし、私に規矩を立ゝる事勿れといふは、是れがためなり。問、見性せざらんほどは、たとひ多劫をへて有爲の法を行ずるとも、成佛することを得べからず。然りといへども、僧衣を着て一生をはたはた者は、三

（上座）禪門に上座、座元、力生等の稱號あり、上座はその數三に位せり、法臘二十夏より四十夏に至るを上座と稱することを律に見ゆ。

（語を承けて云々）石頭大師の參同契に「承」言須會宗、勿自立規矩」とあり。

惡道にはおつべからずといふ人あり。この說實なりや否や。答、もし僧衣を着て內心相應しなば、戒律たゝしくして、小罪をもをかさずんは、輪廻を免かれずといふとも、地獄、餓鬼、畜生、修羅等の四惡趣にはおつべからず。もし少しも身口意において罪あらば、何によつてかまぬかれん。[illegible]問、殺盜婬妄等の四重禁戒を犯す者、四惡趣におつることは疑はず。飲酒は四重のほかなり。佛祖何に依りてか、あながちに深く之を戒めらるゝや。答、唯この飲酒にかけて一切の諸戒をやぶるが故なり。故に經に曰く、是れ酒は起罪の因緣なりと。もしこの深き意を知らば、飲酒にすぎたる大罪なきことを疑ふべからず。問、大罪を以て大苦をうけんことは疑はず。小罪を以て地獄におちたる僧あらば、ねがはくはその證據を聞かん。師即ち僧護經并に自撰錄等を引て是れを答ふ、舍衛國中に五百の商人あり、商業のために大海に入らんとす、旅行の間の救主のために、僧護比丘を世尊に申し請ひて、共にゆきてすでにかへらんとす。爾時僧護比丘、中路の夜宿の處において、伴を失ひてひとり歩む、路いまだ遠からざるに、椎の聲を聞く、聲を尋ねて寺に向ふ、一人にあふて即ち問ふてはく、何の因緣のゆゑに椎の聲をなすや。その人答へていふ、溫室に浴に入る。僧護念

（椎）衆僧に報告をなすときに聲ち鳴らして注意を

興ふる器なり。

〔殿儀〕儀式殿堂なるを云ふ。

していはく、われ遠くよりきたれり、僧浴につくべし。乃ち僧坊に入りて諸人等の容を見るに、衆僧に似たり。ともに温室に入りて見るに、諸の浴具、浴衣、瓦瓶、瓦器、浴室てことごとく皆火に燃る。その時僧護比丘、諸の比丘のともに温室に入るを見るに、入りをはれは火に燃えて、筋肉消盡して、骨燋炷の如し。僧護驚怖して諸の比丘に問ふ、汝これ何人ぞ。比丘答へていはく、閻浮提の人、性難信なりたゆえに、汝、佛所にいたりて、即ち佛に問ふべし。乃ち驚き怖れて、寺をすて、馳走して路にすゝむに、未だ遠からざるにまた一寺にあふ、その寺殿博殊能にして精好なり、また椎聲を聞く、また比丘を見て即ち問ふていはく、何の因緣の故に捷椎の聲をなす。比丘答へていふ、衆僧飯を食す。自ら思惟す、我今遠くより來て甚だ飢乏をなす、また復た食すべし、僧坊に入りをはりて僧の和集するを見おはり、食器、敷具みな悉く火に燃え、人および房舍悉くみな火に燃えて、さきの如くにして異ならず。僧護問ふていはく、汝これ何人ぞ、その人答ふることは更にさきに異ならず。僧護驚怖して、更にはやく捨去て、路にすゝむこと未だ遠からざるに、また更に一寺にあふ、その寺殿儀なること、更にさきに異ならず、すゝんで僧坊に入りて、また諸の比丘を見るに、火床に坐して、互に爪搔じて、肉盡き筋いでゝ、五體骨骸また燋炷の

〔迦葉佛〕釋迦出世以前の佛なり。

〔五德〕怖寃、乞士、淨戒、淨命、破惡これを比丘の五德となす。

如し。僧護比丘かくの如くしなゝの呵責の相を見る。僧護比丘すでに還て佛所に詣じさきに見る所の地獄の因緣を問ひ奉る。佛、僧護に告ぐ、汝が見るところの比丘浴室は、比丘にあらず、また浴室にあらず、これ地獄の罪人なり、迦葉佛の時の出家の比丘なり。戒律によらず、おのれが愚情にしたがひて、僧の浴具および諸の器物を以て隨意に用ゐ、持律の比丘つねに軌則を教へれども、その教にしたがはず、迦葉佛の涅槃より以來、地獄の苦をうけて、今に到りてやまず。佛、僧護に告ぐ、汝はじめ寺と見るは、これ僧寺にあらず、また比丘にあらず、これ地獄の人なり、迦葉佛の時の出家の人なり。五德を成せずして、四方の僧物を捷稚をうたずして、衆默して共に用ゐ、この因緣を以て火床の苦をうけ、今に到るまてやまず。汝が第三の寺を見るは、また僧寺にあらず、また比丘にあらず是れ地獄の人なり、迦葉佛の時の出家の人なり。懈怠の比丘多人共住す、ともに相語りていはく、我等今はひとりの持律の比丘を請じて、ともに法事をなして如法なることを得べし、即時にひとりの淨行の比丘をもとめて、ともに住して食宿す。その淨行の比丘また更に同行の比丘をもとむ、時に淨行の人轉々して、火を以て寺を燒きて諸の比丘を滅せしむ。その因緣を

〔衆僧の田〕 衆僧供養の料に供する田地なり。

〔白衣〕 俗に俗人と云はんが如し。

以て、手に鐵槌を握て互に撞滅せしむ。迦葉佛涅槃よりこのかた大苦惱をうけて、今に到る迄でやまず。或は衆僧の田中におのれが私のために種えて、僧直をなくはす、時に撞槌の比丘、戒に依て呵責す、汝今如何が僧直を酬はざる。この人その時王勢をたのむに依て教誨をうけずして、諸の比丘に答ふ、我は是れ汝が奴ならんや、汝もし力あらば、何ぞ自ら種えざる。この因緣を以て地獄の苦をうく。或は白衣の人、僧の田に在りて種えて、僧直を酬はず。この因緣を以て地獄の中におちて、大肉地となりて諸の苦惱をうく。或は寺に在りて常住なり、諸の檀越ありて、酥瓶を奉送して、現前の衆僧を供養し、人々にわかつべしとす。この事にあたる人、客僧のあるを見て、かくしとめて後におきて、客僧去りをはりて後に即ちわかつ。この因緣を以て、地獄の中に入り大肉瓶となりて、火にやけて苦をうく。或は僧のために水をつかさどる僧の、水をつかふことを少しくしてかへすことおほくすぎたり、遠てはかることはるべきに、即ちその水を足して、餘るものを給はざる、此の因緣を以て地獄の中に入りて、獨立て唱へて水をと言つて、その大苦をうく。或は佛僧の淨地にありて、涕唾して地をけがす。この因緣を以て地獄の中に入りて、刀を以ておのれが鼻を刖りて、火にやけて苦をうく。或は沙彌として、衆僧のために石蜜をわかつに

〔唄〕 委さには梵唄と云ふ讃歎と翻す、偈頌を唱ひて佛陀聖賢の德を讃歎することなり。

〔毗尼〕 梵語、此

當りて、斫て分數となす、斧劍の上において少しく著きたる石蜜を沙彌嗽瑞す。この因緣を以て舌を斫て苦をうく。或は寺中の上座として、ほしいままに食分をうく。或は一人二人の食分を得、特律の比丘、如法に上座の法かくの如くなるべからずと教授す。時に老比丘、律師に答へて曰く、汝知る所なし、聲駱駝の如しい、我は衆中において身上座となりて咒願說法、或る時は唄をなす、勞を計りて得べし、汝等何か故ぞ、つねに瞋りて我を責むるや。この因緣を以て地獄に入りて、駱駝の身をうけ火にやけて號叫す。或は王勢の力を恃んで聖德の如くにて四輩の弟子讃歎す。時にかの比丘默然として歎し、施好繩床および諸のほき飲食を聖心をなしてうく。この因緣を以て地獄の中に入りて、肉繩床となりて火にやけて苦をうく。或は僧の果菜園に當てよき華果あれば、おのれが私の用となし、或は白衣に與ふ。この因緣を以て地獄に入りて、大華樹となり火にやけて苦をうく。汝二沙彌を見るは、實の沙彌にあらず、迦葉佛の時是れ出家する沙彌也、ともに一被褥の中に相抱いて眠臥す。この因緣を以て、地獄の中に入り火にやけて、被褥の中に相抱いて苦をうけ、今に到るまでやまず。爾時世尊かさねて僧護に告げていはく、地獄の中に出家のものは多く白衣はすくなし、故如何とならば、出家の衆おほく禁戒を犯して毗尼もをかはす、互に歎き

に善治と云ふ、能く貪瞋痴等の惑を治むるの義又調伏と云ふ、能く身口意の三業を調練して過非を制伏するの義なり。

しひたけて、私に僧物を用ゐ、或は飲食をわかつに、よく平等ならざるゆゑなり。我今かさねて汝に告く、まさに持戒をつとめて頂戴率行すべし。復た僧護に告げていはく、さきの罪人の如きんは、先世に出家して、僧物を犯すか故に大地獄におち。又未來世の中において、諸の白衣ありて衆僧の物をとらんものは、罪さきにおいて説く出家の人にて犯したるとも百千萬倍にしてきはめつくすべからず。我また汝に語らん、もし一比丘、毗尼に順ふて、僧の伽藍にありて如法に道を行し、時に依て椎を鳴らさん。もしこの人を施せば、福を得ること猶ほ多くして、説くともつくすべからず。如何に況や四方の僧衆を供養せんをやと云々。師のいはく、僧護比丘の見る所の地獄の因緣五十六段なり。佛のいはく、みな是れ迦葉佛の時の出家の人なり、迦葉佛涅槃してよりてのかた、地獄に入りて大苦をうけ今に到るまでやまず云々。今略して十三段の大綱を擧く、自餘はこれを以て知るべし、さきの問話の僧のいはく、まことに知りぬ、小罪をもふかく怕るべきことを。又いはく、因の經の所説の如きんは、かの地獄の中に在家は少く出家は多きこと。つらつらこれを鑑するに、たゞ僧体にして寺にありといへども、破戒無道にして、大僧と利養を同じくして、我等も同じ僧なりと思ひなしていまだ淨業の僧をあなづり、或は誹謗したるものなり。そ

れかし實にこの二類なり、當來世の地獄の業、如何かして是れをまぬかれん、願はくはその方便を聞かん。師の曰く、たゞ直に見性透徹して、生死のながれを截斷するより外に別に方便なし。この經の偈に曰く、惡を行すれは地獄を感し、善を造れば天の樂を受く、若し能く空定を修せは、漏盡きて涅槃を證せん。又僧ありて出て云はく、某甲既に空定を得たり。師の曰く、汝道へ空定いかんが得たる。僧の云はく、坐中常に紛飛の念收りつきて、内外ひとしく晴天のごとし。師の曰く、是れ空定にあらず、たゞ是れ學道の人の人々おこす最初の空見なり。この見の人もし眞正の善知識にあはざれば、因果を撥無して、地獄に入ること箭の如し。空定といつは、見性通達して、色、受、想、行、識等の五陰みな悉く空却し、一切の煩惱つき、知見忘れ、照絶し、必行所滅し、應用蹤跡なくして、衆魔もをかすべきたよりなく、佛眼見れども見えざる穩密全眞の境界これなり。僧問、出家は縱ひ道心なくして、眞正の空定を修し得るまではあらずとも、かたちにはづるがもゑに、一向になさゞるはあるべからず。たとひ破戒なりといふとも、實犯のものは稀なるべし。もし又たまゝ實にをかすものも在家にはひとしかるべからず。然るを彼の地獄の中に在家は少く出家は多きは、何の道理

〔漏〕煩惱のこと なり。

〔五陰〕詳解は眼眼の假名法語に見ゆ。

【業障】障は障蔽の義、衆生は貪、瞋、痴等の煩惱の爲めに諸の善法を行ふ能はずして身、口、意に於て惡業を造り正道を障蔽す是れを業障と名く。

【化寺】幻出したる寺院といふことなり。

ぞや。答、僧護比丘の佛前に於てあるべき所の地獄の因緣はいみじ是れわづかの小罪ゆゑ、のの威すべき所の小地獄なり、又そのかずも唯た五十六段あり、僧護比丘だく是れ多きを略して少きを述るものなり。もし在家等の中の乃至十惡五逆の者のおつる無間阿鼻大地獄の因緣をいはんと欲せば、人の心中の業障の不可思議なる故に感ずる所の地獄の苦患も、又手が言のおよぶ所にあらず。たとひ說くとも、又誰か是れを信じおよぼさんや、智者はいはざるに愚者を知り、愚人は還て我を笑はん。自錄にいはく、宋の江陵の四層寺の僧竺蓋、燒肉を食じて餓鬼地獄に生す。宋の僧法豊といふもの、僧の食を減じて死して餓鬼となる。周の益州の宗寺の僧惠景、僧の財寶をぬすみて牛となる。禪師即ち僧の小來をとかて、死して後衆僧の奴となる。隋の相州の僧道明、常住の柴を二束かりて湯をわかし其足を洗ふ、わずれて柴をかへさず、死して後足燃やさるる事二年ありて後厠房の僧主猪といふものゝ目を化寺を見る。道明ふたゝびありて猪に語りていはく、願はくは柴百束を買ふて常住の僧にかへしも、並に法華經一部を書寫せば、我が此の苦をまぬかれん。猪、道明の言の如くに是れを辨じて後、彼の化寺の在家を見るに、かくれて見えず。この錄大帖三冊あり、この内五事を取てこれを書す。因果必然なり。もしかくの如くの大事あることを

知らずんば、善人何に因てか法のために身命財を捨てんや。たとひ知識に値遇し、長坐じて晝夜すとも、生死を恐るる意實ならずんば、五穀を斷ちたる者の耕作に進まず、病苦なき人の鍼灸に堪えざるが如くはじて、道行虛假にして底に徹る工夫あるべからず。たゞ邪解をたゞまじくし、邪見を增長して地獄に入りて苦を受けん。もし向上の願に當得し、正法眼をひらかんと欲せば、たゞ初發心の時より、始終地獄を恐るゝ心、鑪にとはりて切ならば、戒根はたくしなく、用心端直なる故に、人情忘しやすくして、活潑の道を頓悟せん。最もこれを思へ。

問、凡宗を學し、心を洞明する底の人なほ還て咎ありやいなや。答、九尾の野狐は多く窟を選び、金毛の獅子は身を翻べずことを解す。

問、正見邪見とは其の差別如何。答、見解の邪正は學者の胸中にありて、言句にあらず。直にその人に相逢はずんば、如何が是れを辨せん。問、若し然らば人の鍛錬にあはずして、山居して修行する人、あやまり多かるべし。然れども近代明眼の人の鍛錬にあはず、證明を受はずして、初發心のとき山居して遂に山を出でざる人、老の後衆の繁雜にして善知識と稱せらるゝ、是れ邪なるや否やぞ。答、凡そ衆の群集すること世尊の座前にひ

〔四祖〕 達磨より四世の祖、大醫道信禪師を云ふ。

〔倦怠〕 懶惰といふ程の義なり。

としるはなし。是れを以て是れを云はゞ、衆の多少は只た道德の淺深によるべし。然りと雖も法に於いて邪正あり、人の根機に上下あり、おの〳〵分に隨ふて其の一類の者を信ずるが故に、衆の多少に依りて得道の眞僞は定めがたし。若し未だ眞正の見解を得ざる人、衆を集めて禮を受け、小見解を以て說法せば、師は是れ魔王、弟子は是れ魔民となりて共に惡果を受くべし。この故に正見の師にあはずして、正法を悟らんこと萬が一も稀れなるべし。牛頭いまだ悟らざりしさき、虎狼も心をかたふけ、百鳥華をふくみ、白雲蓋に覆ふて甚だ奇特なり。四祖かじでに到りて相逢ふて一摶すれば、即ち多年の野狐の窠窟、瓦の如くにくだけて忽然として了悟して、方に始めて以前の非を知る。この故に曰く、百鳥華をふくむも一場の懶惰と。この老漢若し四祖にまみえずんば、終に了悟せずして、奇特の相に貪著して、魔界に入りて苦を受けん。是を以て不知不覺にして獨住無伴といへり。又馬祖未だ徹悟せざりしとき、山居して長坐不臥なり。南嶽の懷讓禪師かしこに到りて、菩の前に於いて瓦を磨いで鏡となさんと云ふを以て、馬祖の玄旨を知らずして獨り閑坐して成佛せんとするを笑ひ、是れを示して根に說破するにちなんで、即ち開悟す。南嶽若し到つて是れを接せずんば、馬祖閑坐して徒に光陰をおくるべし。古より今に到るまでいま

だ悟らざるさきは作家にあはずして、獨り山林に居して佛祖の慧命を繼ぐことなし。縱令ひ往千萬の衆を集むるといへども、源深からざれば流長せず。この故に志ある人は父母師長を捨て、萬里を遠ざけず、飢寒を事とせず、善知識を求めて往詣す。相見の所に於いて或は衆日に悟證の分ありて、互に機を投じて證明を受けて即ち去るもあり。或は善知識の一言の下に始めて旨を領する人もあり。或は些少も信仰あれば、即ち柱杖子を拗折じて志を愛に留めて、或は事務を宰りて勞苦を辭せず、或は木食草衣し、或は一日の飯を求めて喫して、命懸絲の如し。罵詈譏謗すれども恥とせず、生死の大事を以て念として、情識を枯渴し、人我を忘れ、解會に誇らず、勤苦修行して食に味を忘じ、行くに步を忘じて、只た實參を期して本望として言句を貯へず、大事を了畢せんことを限りとして、三十年四十年を定めず、頭は白く齒は黃になれども退屈を生せず、直に淵源に徹證するに至りて善知識の十分の證明を受けて後も、尊貴を帶せず出頭を存せずして、或は辭じ去つて跡を深山にかくし、名を幽谷に埋めて、野菜の根を養ふて禪神を養ふて喫して、精神を養ふて名利を求めず、或は猶ほ師の左右を離れず給仕を爲して、遂に獨立安閑を求めず、道般の實頭の漢一人として透徹せずと云ふことなし。皆佛祖の慧命を繼いで、辭すれども止むことを得ずして世間に推

〔一夏〕諸方の衆僧一處に集り九十日間制規を守りて辨道修行する結制安居を云ひ、一結制安居の期を一夏と云。夏期の結制安居を雨安居と云ひ、冬期のを雪安居と云ふ。

〔下語著語〕俱に自己の見識を以て評唱の語句を下すこと。

出だされて、宗燈を冥途にかゝげ、種草を萬世に栽ゑ。是れ豈に眞實佛恩を報ずる者にあらずや。咄哉、今時の學者機淺く志疎にして、眞實生死の大事を以て念とせず、知識に偏參するといへども、底を盡して邊徹せんことを欲せず、只た結緣と號して知識の邪正を知らず、只た名を算へて東西南北に走りて、多數の人に相看したるを規模とす。縱令我れに僧効ある所に留りて夏を送れども、只た一夏の間は夏了の行脚の具足をいとなみ、或は衆て冬安居の住所を思量し、冬安居の間は明くる春の行脚を思惟し、日をかゞへて九十日の過ぐるをおそしとす。或は血脈を受持して頸に掛けたるを所得とし、或は舍利を持しその具足を調へて、秘じて以て三人五人頭をあつめて、舍利塔を開きて互に是れを見て、希望の心を退くし勝劣を論ず。或は身臂指をたいて自ら惱亂すれば、その一巷の衆皆是れに勞せられて造作して行道を疎かにす。或は門徒を立て、俗姓を執し、藝能を執し、名字を執し、或は仁義道をすて果す、これに依て綿密の工夫なくして、情識知解を以て、慈心に佛法を商量し、說禪問答にかたんことを求むれども、自ら見性の力なくして、古人の奇言妙句を集め、秘じて以て他人に見せしめずして、是を以て頌を作り歌をよみ、下語著語を好み、語をたくみて同參の人を伏せんと擬す。全体これ外道なり。或は道般の摸樣をよみ

嫌ふて、ただ二則の公案を守るより外には秘事なしと云ふて、人の參禪するを見ては、耳を塞ぎて退く、這般の人、善知識の會下にありといへども、遂に所解を演ぶることなければ、鍛錬をうくることなし、釘を拔き楔をぬかるゝ分なければ、たゞ一機一境に滯在して、遂に窠窟を出でず、ただ少分の有相の戒を堅く守りて、をかさゞるを足りぬとし、遂に世の常の戒体の外に數をそへて、絹綿をたち、五穀をたつて鹽酢を喫せず、これを以て佛法と稱して、人家の男女を誑誘す、或は初發心の時は、戒律たゞしくして、坐禪をたしなみ、工夫をなす人、心念暫くをさまりて、身裡洞然として空寂なる時、我すでに本來の面目を明らめたり、這裡には我なく人なく、佛もなく法もなし、何れの戒体とかいはんと云つて因果を撥無し、信施をおそれず、五辛を喫し、酒を飲みて、酔狂の氣紛々として、佛祖をのゝしり、諸方の良善を抑下し、古今を批判し、高聲多言にして、戲笑を好み、遊山翫水を好み、終日に歌を詠し詩を吟し、花春風流を愛し、人に相逢ふては見乞推取を致し、勝樣に拘らず、僧俗をゑらばず、時節を憚らず、說禪を好み、問答に勝ちたるを以て活計とす、人の是れつちの邪魔の見解を坐斷して、深く非を知りてかたく信施を怖れ、戒律異々如法にして、口を閉ち、意馬体し、心猿忠して、孜々矻々として、工夫綿密にし

〔久參〕 久しく知識に參禪したる者といふ義。

〔膏肓の病〕 病の深く入りたるをいふなり。

〔勘辯〕 探索といふほどの義なり。

〔無事甲の中云〜〕 甲は閣と音通、閣は堂後の小室なり無事無爲といへる寂寞に陷るを云ふ。

〔無事の見云〜〕 自己の無事無爲の見識を以て一切の公案話頭を解釋するを云ふ。

〔三衣〕 五條衣、

て、面壁端坐するを見ては、つばきをはきかけ、指をさして笑つて、これ鈍漢なり、禪和子にあらずと云ふ、是れ底の空腹高心の類、みづから我は是れ久參なりと云つて、後生をひきて皆ごの邪路に入れしむ。善知識これを惑れんで鍛錬を加ふれば、事をわけ事を拍つて喝をなし咄を下す。善知識これを把住して折挫せんとすれば、袖を拂つて躍りいで、呼べども頭をめぐらさず、誠に是れ膏肓の病、醫するにたえず。己れが邪見を本として、諸方にめぐつて、及ひがたき人を勘辯して、憍慢を增長す、豁達の空は因果を撥ふ、滂々茫々をとして殃禍を招く者これなり。初發心の人、これつちの邪見の蔕と努め〳〵同行することなかれ。或は通身昭々靈々として、水中の月影の如くにして、然かも明々歷々としたるをとめて本源の自性とす、これ無明の根本なり。或は諸法皆空寂なり、何の道をか修じ、何の法をか悟らん、たゞ茶にあへば茶を喫し、飯にあへば飯を喫すと云ふて、深く無事甲の中に落在して、古人の話頭を見ては、たゞ一等におのれが無事の見に引入れて、みな無義味を以て道理として、山は是れ山、水は是れ水と云ふを極則として、夢にも未だ佛性の妙なることを知らず。或は實に未だ見性せずして、人の佛性は見解覺知の主なりと云ふを聞きて、人に渠を問はれては、手をあげ足を動かしていはく、たゞこれ是れ。或は全体しらざるを以て無心の道とし。或は色身は夢幻空華の如し、心性は不生不滅にして常住なりと思ひ。或は身心ともに幻なり、四大分散の後は、皆空に歸して物なしと存じ。或は一切の色空、畢竟して法身の体なりと知る處の疑なきを悟とし。或はわづかに口をひらきて言句に渡るところあるは皆あやまりなり。我が實悟の處は知昔を絶すと云ふて、幽玄の機を存し、精魂を弄して、明眼の人も我が見處をば見知ることなしと云つて、自ら點頭して笛をうそぶく類もあり。或は胸中悠々綏々として思ふところなくして、心すみ渡りて面白きを無心の道とする人もあり。或は奇特殊勝の相を好みて、人に超えたる作略を愛し、道樂を求め、或は自ら道心なくして、名聞の氣を以て、善知識の印可を望みて、もるさゝれば、恨をのべ謗をいたし。或は一切皆因果なり。佛道をさとらざるも宿習なり。われ道に緣なくして、今生に悟ることあるべからずと云ふて、舊業をつくさんと欲して、種々の捨身の行を修し、靈佛靈社に巡詣して、そこばく數の經咒を誦し、珠數をくり、禮數百拜して道心を祈ると號する人もあり。是れ皆ことに以て最下の機なり、これらは皆生死を恐れ、道を求むる人の未だ正見にいたらざる時の心病なり。然りといへども、更に生死を恐れず、道を求めざる人には比すべからず。又二種の國賊あり、放下のものと號して、三衣一鉢をすて

七條衣、大衣これなり、五條を中著衣、七條を上衣、大衣を衆集時衣と名く。

〔夜叉〕 梵語、此に暴惡と云ふ、惡鬼の類なり。

で、身に衣を着ずして、或はゑぼしを着、或は狗猫兎鹿の皮を着て、舞をなし歌をうたひて正法を謗し、人家の男女を誑誘して世を渡る類もあり。もし人これをそしれば、布袋、寒山、拾得等の散聖、或は楮頭蜆子等をひきて我がたぐひと云ふて、更に非を改めず、似たることは時ち似たり、是なることは未だ是ならざるもの是なり。見すや、善勸發心の文に云ふ、猪頭和尚これを喫する時にあたりて、後に青面の夜叉ありて接し去る云々。もしこれつらのものに近づかん人は、在家も出家も正法の緣を失つて、邪魔の眷屬となるべし。増何に況や其の身をやゝ。縱ひ以前にあぐる底の種々の邪見を皆一人じて持したらん人も、善知識に遇ふて密に一念非を知つて、邪心を休歇して直下に自性を見徹せば、本源の無心の道を体得し、迦葉付囑の正法眼藏涅槃妙心を承當して、他のために病に應じて藥を施さんこと、殊に以てあまねかるべし。病多くして藥の性を諳する故なり。もし又遂に非を改めずして、一生を空しく過さん人、閻老子の鐵棒をいつれの時にかまぬかれん。且く道へ此の衆中に前にあぐる底の邪見の窟宅を脫出する底の人ありや。もし能く脫出じ得たらんものは、佛祖の關を通得すべし。抑も世尊の拈華瞬目これ何の道理ぞ、迦葉破顏微笑すれば、世尊の云はく、我に正法眼藏涅槃妙心あり、摩訶大迦葉に付囑す。且く道へ、諸人の分上において、什麼を喚んでか正法眼藏とし、什麼をさしてか涅槃妙心とせん。もし來た會せずんば、われ佛法においてうたがひなしと云ふことをやめて、能く歩を退けて、おのれについて見徹せよ。那箇か是れ諸人の正法眼藏涅槃妙心。或は一切の諸相滑盡し、必裡洞然明白にして、内外のへだてなく、圓融無際にして、盡十方界、一顆の明珠の如くにして、一點の瑕翳なし。この境界の現前するとき、手を拍つて大笑して、我今大悟したりと思へり。これ見性にあらず、たゞ是れ法性の現する時節なり。臨濟の曰く、法性の身、法性の土、明に知りぬ、是れ光影なることを。光影を弄する底の人を識取するこれ諸佛の本源なり。もしかくの如くの見解を實とせば、魚目を認めて眞珠とするものなり。もしこの境界の現せん時は、直下に見窮せよ、この見をなす底これ什麼物ぞと。縱ひ智眼開發して、色空ともに照破して、胸中澄々落々として滯礙なきも、猶は未だ解脫の深坑を出ざることあり。縱ひ理性に透徹して、佛祖の機緣公案、一々に融通して、一を問へは十を答へ、十を問へは百を答へて、石火電光は猶はおそきに似たるも、たゞ是れ伶俐の漢也。無心の道をば、夢にも未だ知るべからず。古人の曰く、直に秋潭の月の影、靜夜の鐘の聲の扣擊に隨つて虧ることなく、波瀾に入れて散せざるに似たるも、猶は是れ生死岸頭の事

〔盡十方界〕 玄沙宗一大師示し人曰、盡十方世界、是一顆明珠。

〔黄梅〕五祖大滿弘忍禪師、黄梅山に住し、門下に七百人の僧ありたり。
〔虚行者〕六祖大鑑慧能禪師の姓を虚と云ふ、行者は出家を求めて未だ衣鉢を得ず寺中に在りて給士の役を執り居る者を云ふ、六祖の黄梅山に在りしき此の役を執りし故に虚行者と呼ひたり。

と。又云ふ、黄梅七百の高僧は、皆佛法を會する底の人、是れに依て衣鉢を得ず、たゞ虚行者のみ佛法を會せず、たゞ道を會す、これに依て衣鉢を得たりと。僧問ふ、いぶかし佛法と道と相去ること多少ぞ。南泉のいはく、眼裡に沙をつくることを得ず、耳裡に水をつくることを得ずと、所以に眞實の道人は、佛見法見を忘し、向上機關を存せず、直に魔外ひそかにうかゞふに路なく、佛眼見れども見得ざる底の田地に到つて始めて休す。巖頭の云はく、物を却くるを上道し、物を逐ふを下とすと。生死の流を超え、法に於て大自在を得んと要せば、外に諸相をはなれ、内に知見をとゞめず、直に進て命根を坐斷する事、自ら首を斷するが如くに、おのれに還て看取し、底をつくして徹證せよ。光陰をしむべし、時人を待たず。縱ひかくの如くの道理を知ること分明にして、玄辯をきはむるとも、未だ徹悟の證明をうけざらん人は、正見の善知識の邊をはなれば、意解に滯りて大事を了畢すべからず。既に未だ大法を了畢せずして、たゞ有相の殊勝奇特ありて、人をあつむる底の衆の縁は、たゞこれ魔力なり。百丈の衆旨をひくと云ふは是れなり。問、佛祖の言教を見ること、生寃家の如くにして始めて得べしとゞめる、意旨如何。答、道は人々の本分なり、自ら徹悟して、悟證の跡をのこさゞるを省要とす。もし本分の事を云はゞ、覺の十字

猶ほこれ平地の波瀾なり、況や言教をや。糟糠に執着して、實を得ざるものは、遂に種子を斷絶す。諸人の自己の佛性天眞にして、宗を超え格をこえて、三世の諸佛も說著せず、一代藏經も詮註しおよぼさず、全機同を絶して、石火もおよぶことなく、雷光も通ずることなし。應用無方にして、東涌西沒、南涌北沒、晴天に雷轟き、海底に焰生す。渠は是れ見聞覺知、擧手動足の主人公なり。佛祖より蠢動含靈におよぶまで、誰か彼の恩力をうけざる。諸人還て自ら渠を知るや、うたがひ十分なる時は、悟十分なり。志眞實なる時は、必ずしも疑を求めざれども、通身疑團となり、工夫を求めざれども、十二時中、雜用心の處なし。やめんと欲せざれども、萬事ともにやみ、すてんと擬せざれども、看經看教、一切の諸行、自然にやみ、得失是非ととゝとく泯絶して、大病をうけて命をはらんとするものゝ、寃親を分別する心なきが如くにして、行くに歩を忘れ、食するに味を覺えず、坐中に坐を忘じ、身を忘れて不臥なり。かくのごとく疑團一片にならば、久しからずして必ず大悟すべし。もしこの時節に或は邪師に逢ひ、或は自ら佛祖の奇言妙句を見て、知解を生じ、うたがひ安りにやみぬれば、岸に臨んでしりぞくものゝ如し、猶ほ餓死をもとむるものゝ如し、一粒の米をも喫するはゞは、命根を斷せざるが如くにして、徹悟の分なし。その

〔客塵煩惱〕 外塵の境を了せずして生ずる妄想を云ふ。

〔端的〕 本是れ支

故に佛祖の言敎を見ること、生寃家の如くにして始めて得べしといへり。然るを或は言敎に依て解を生し、或は意識機境の上に智を生じて、辯懸河に似たる者あり。是れ即ち魔家の眷族外道の種姓なり、これ地獄の業を增長するものなり、賊にあはれむべしとす。かくの如く說話するも、淨地に屎尿を放つが如し。無量劫よりこのかた、生死海のうちに浮沈することゝ、たゞ是れ外より染習する底の文字語言名目等の客塵煩惱に、自己天眞の正法眼藏を蔽却せられて、獨脫の分なき故なり、これ衆生の大病なり。この故に佛祖やむことを得ずして、且く機に隨ふて說破し、釘をぬき楔をぬく底の言句さだまれる處なし。況んや是れ病に應ずる藥、不淨を拭ふ故紙なり。もしこれを執して、毫髮ばかりも胸中におかば、故紙かさねて不淨となり、藥還て病となるが如し、何のさはまりかあらん。金屑貴しといへども、眼におちては翳となる。古人の曰く、この事を保任すること、盡毒の鄰を過くるものゝ、水一滴にうるはしざるが如くにして始めて得べし。故にもし實悟を要せば、平生執する底の所行所作、道理義理、知見解會、畢竟して底をつくして放下して、父母未生前のごとくにして、はかに諸相をはなれ、內寂にしづまず、空に滯らず、直下に看取せよ、即今倆がかくの如くに聞く底のもの端的これ何ぞ。臨濟和尙の曰く、四大の色身、法を聞くことを解せず、脾胃肝膽、法を聞くことを解せず、虛空、法を說き法を聞くことを解せず、何か說法聽法を解するぞと、たゞ懸崖に手を放つて、直にかくの如くに見窮すべし。問、某甲聞く、諸代の祖師、直に人心を指して見性成佛せしむと。又聞く、自己を見ること寃家の如しといふことを。此の意如何。答、自己に眞妄なり、識神を妄とし佛性を眞とす。眞性を悟るときは、輪轉生死の根源を截斷し、本有の衆德現成して、ものを接し生を利す、これを見性成佛とす。生死の根源と云ふは識神なり、初心の學者、誤つて昭々靈々等の無明の根本を見て、佛性を明らめたりとす。古人の曰く、學道の人の眞を知らざることは、たゞ從前の識神をとゞまるかためなり。無量劫來の生死の本、痴人は喚んで本來の人とすと。この識神は、これ大賊の主長、十惡の根本、著相知解の窠窟なり。もし未だ這箇を打破せずんば、たとひ玄妙奇言を說くとも、みな是れ野狐の精魅なり、遂に流轉をぬがるべからず。このもろに這箇を打破すること、一大事の因緣なり。無始曠劫よりこのかた、六趣に輪廻し、展轉して大苦をうくること、たゞ這箇を坐斷せざるかもろなり。劍樹刃山も這箇より生し、鑊湯爐炭も這箇より出て、鬼王獄卒も他處より來らず、披毛戴角も別人にあらず、頭をあらため面をかへて、こゝに死しかしこに生じて、因をなし果を結

那の俗語、端は正なり的は實なりと註する字なるか、古語に「那箇是端的底觀音」「端的是好」等に據れば「ホンニ又はホンノ」とふほどの義なり。

〔六趣〕 天、人、修、畜、餓、地の六道のことなり。

〔披毛戴角〕 畜生の形狀なり。

〔業識〕善惡の作業を起すの神識といふ義にて即ち根本無明の惑なり。

する諸の受報好醜、みな這箇によらずといふことなし。這箇かつて形相なしといへども、緣にあふ時は、火の薪に因て焰を生ずるが如し。緣やめは寂湛なり、動するときは、雲霧のおこるが如し。をさまる時は、青雲に似たり。清濁ことなりといへども、たゝこれ一根なり、後學誤つてにごる時は、これをのぞかんと擬し、清める時は、これをわいす。縱へば酒を禁ずる人の、濁酒をおそれて清酒を愛するがごとし。昭々靈々空々寂々、洞然明白たる底の淨潔の境界に認著するもの、我すでに佛性を悟得して、通身丁々として毫髮ばかりも滯礙なしとおもへり。たとへば醉狂のものの心いさみ、氣高然として自ら我今本心にして、身中に酒氣なし、何のわやまりかあらんといふがごとし。醉狂の時は、善をなし惡をなす、一切のふるまひ悉く酒氣にして本心にあらず。學道の人未だ識神を打破せざれば、一切の諸行諸說、皆この業識のなすところにして、道と相應せず、利鈍、知不知、思量不思量、有欲無欲、機關理致、尊貴卑劣、乃至神變奇特をほどこし、慈をおこし悲をおこすも、畢竟して識神なり。寒の時は、普天普地寒し、熱の時は、普天普地熱す。正なる時は、一切みな正なり、邪なる時は、一切みな邪なり。識神を坐斷し、無心の道を体得するときは、逆行順行、語默動靜、全体わたくしなくして、皆正法輪の轉するところなり。法もと

邪正なし、邪正はたゝ識神を打破するとにあり。酒氣能くのぞきぬれば、醉狂忽ちにやみ、身心平穩なり。病氣能く平癒しぬれば、坐臥經行、自由自在にして、他の力をからず。この故にたゝ歩をしりぞけて、おのれについて自性を見窮し、精魂を坐破して、始めて解脫を得べし。もしたゝ精明湛不レ搖をとめて悟とせば、魚目をとめて眞珠とし、賊をとめて子となすが如し。這箇は是れ悟をへたつる鐵壁、法財を損する寃賊なり。この故に自己を見ること、生寃家の如くにして始めて得べしといへり。問、今日始めて知りぬ、莫多年賊をとめて子となすことを。たとひこの非を知るといふとも、實に自ら識神を打破せずんは、解脫の期あるべからず、何の方便を以てかこれを降せん。答、別に方便なし、たゝ自己方寸のうちにおいて、一切の相をはなれて、無相の窟に入らされば、脫体現成す。無門の開和尙いはく、規に循ひ矩を守るは、無繩自縛。縱横無礙なるは、外道魔軍。心を存して澄寂なるは、默照の邪禪、意を恣にして緣を忘するは解脫の深坑。愴々として味からざるは、鎖を帶び枷を擔ふ。善を思ひ惡を思ふは、地獄天堂。佛見法見は、二鐵圍山。念起即覺は、精魂を弄する漢。兀然として定を習ふは、鬼家の活計。進むときは理に迷ひ、退くときは宗に乖く。進まず退かざれば、氣ある死人。且く道へ、畢竟して

〔根本〕 根本煩惱すなはち無明惑これなり。

〔枯木岩前〕 無心

如何が履踐せんと云々。直下に此の如くに參得せば、大事を了畢せん、若し猶ほ理路に滯り、祖關を透りすぎすんば、自ら永劫に沈淪をうくべし。この故に古人は勇猛の志をおこして、十二年、三十四年、三十四年、乃至一生涯、脇を席につけず、寢食を忘れて、單々に工夫をなし、時々に精彩をつけて、自性を見窮し、精魂を照破す。一切の業障は、識神を以て根本とし、謂はゆる識神は、佛性を以て根本とす。臨濟和尚の曰く、外に凡聖をとらず、內根本に住せず、見徹して疑惑せずと。たゝ能く緣にあひ境に對する所四威儀動靜のうちに自ら見照して、機にあたつて心機をころすこと、狹路に敵に逢ふが如し、猶ほ火を消さんとするものゝ、灰のあたゝかなるところに直に水をそゝくが如くなるべし。纖毫もころしのこせば、是れ生死の路頭なり。內にむかひ外に向ひて、ころし盡くして始めて少分の相應あるべし。一切の諸相は皆幻化なりと知りて、取捨の心をやめ、一切の諸見は皆妄想なりと知りて、心中において佛來らば佛を殺し、祖來らば祖を殺し、衆生來らば衆生を殺し、世界現せは世界を打破し、虛空現すれば虛空を打破する時、盡十方たゝ是れ一箇の金剛の正体なりと會得するも、猶ほ法塵に落在す。凡位を越えるものは、還て聖解にす墮、兩頭を坐斷して、枯木岩前に滯らず、明月江を踏斷し、暗昏々地を透過し、格外の機玄を

空見の處を云ふ。

〔泥牛、木人〕 俱に是れ機外の活作用を云ふ。

得たりと存するも、猶ほ伎倆を忘せざることあり。佛味祖味を忘じて、全体じるところなきも、死火寒灰のうちに滯在して、宗未た妙ならず。直に透脫して、自在自由なることを得んと要するや、我今かくの如くに說けば、諸人かくの如くに聞く、たゞ此の說法聽法底のもの、急に自ら看取せよ、那箇かこれ即今聞く底のもの。もし又例して心と會し性と會し、佛と會し道と會し、理と名け事と名け、佛祖不傳と名け、不思議奇特と名け、玄と名け妙と名け、色と名け空と名け、有無、非有、非無、非々有、非々無と解し、空劫以前と會し、若しくは公案の會をなし、若しくは無心の會をなし、或は無事の會をなさば、未た義路の內をいでざる頗倒の衆生なり。或は拳をあげ指をたて、拍をなし默をなし、意を以て意に投し、機を以て機を呈せは、たゝ是れ精魂を弄する漢、依草附木の精靈なり。全体不與座の時、聽法底のもの、畢竟して如何。道得ざるも三十棒、道得たるも三十棒。いかんが不犯を通せん。咄。 問、識神は實にこれ冤家の如し、自ら佛性を見る時、又如何。答、又是れ生冤家の如し、喪身失命するか故に。 進んで曰く、意旨如何。 答、泥牛鼻頭に逆水に入る、木人懷中に蓮火を弄す。 問、和尚これよりさきには、佛祖の本意たゝ直に人心を指して見性成佛せしむるより外に餘事なしと云んで、今又心と說かず、性と說かず

〔楞嚴會上〕釋尊楞嚴經を說き給ひし時二十五人の菩薩みな開悟の因緣を陳ふ、圓通は開悟と同意なり。

た、聽法底のもの看取せよといふ。この意如何。　答、直に是れ見性の眞の要訣なり。　問、この聽法底の一句は、これ和尙の自ら方便をおこすや。又佛祖の所說によるや。　答、是れ自ら方便をおこすにもあらず、又佛祖の所說によるにもあらず、直に是れ諸人の本有の圓通、佛祖の解脫の妙門なり。　問、古へいへることあり語典にわたらざるは、智者の所談にあらずと。もし實に佛祖の所說に依るにあらずんば、誰かあまくこれを信せんや。　答、道もとことばなし。この故に佛祖の所說によるにあらず、直にこれ諸人の本有なりといへども、ことばを以て道を顯はす、いかでか是れ佛祖の典にそむかんや。　問、恁麼ならば、即ちいづれの經典かこれに契通するや。　答、楞嚴會上に諸の聖衆の修するところの得入の門、すべて三十五圓通なり。今謂はゆる聽法底の一門は、觀世音菩薩の圓通なり。文殊師利菩薩、世尊の命をうけて、これを讚歎して第一なりとす。こゝにおいて文殊、阿難に語つていはく、汝微塵の佛の一切の秘密の門を聞けども、欲漏まづ除かされば、聞を蓄へて過誤となす、聞を以て佛々を持せんより、何ぞ自ら聞を聞せざると云々。　問、佛祖は皆機に隨ふて人に示めす事、病に應じて藥を與ふるが如し。和尙近日何としてか根機をあらはす、たゞ此の聽法底を看取せよといふや。　答、たゞこの聽法底は、諸佛衆生の

總持門なり、こゝについて見窮せば、機の大小を論せず、皆解脫を得べし。このゆゑに經に曰く、大衆及び阿難、汝が聞の機を旋して、却て聞の自性を聞せよ。性無上道を成せり、圓通の實かくの如し、これは是れ微塵の佛の一路涅槃門なり。過去の諸の如來も、斯門より既に成就す、現在の諸の菩薩も、今おの〳〵入りて圓明なり。未來の修學の人も、當にかくのごとくの法によるべし、我も亦このうちより證せり、たゞに觀世音のみにあらず。又云ふ、涅槃の心を成就する事は、觀世音を最とす。自餘の諸の方便は、皆是れ佛の威神を以て、事に即して塵勞を捨てしむるなり、これ長く修學淺深同說の法にあらずと。又無門の開和尙のの上堂に曰く、臨濟和尙、衆に示めして云ふ、四大の色身、說法聽法を解せず。脾胃肝膽、說法聽法を解せず。虛空、說法聽法を解せずと。臨濟和尙恁麼に說話するは、大に飯を嚼みて嬰兒を餧ふに似たり。しかもかくの如くなりといへども、且く道へ、これ誰か說法聽法を解する。こゝにおいて薦得せば、參學の事畢ぬと云々。豈に是れを佛祖の典にわたらずといはんや。たゞこの聽法底は諸聖の圓通の中の第一なり、愚人迷倒にして信しおよぼさゝるを如何かせん。　問、かくの如くならば、即ち是れ敎外別傳の宗旨にあらず、禪和子、這箇を用ゐてなにかせん。　答、諸人今恁麼の說を聞きて、恁麼

の問をいたす底のもの、かれは是れ佛敎か祖敎か。僧即ち低頭して休し去る。　問、諸方みな病に應して藥を與ふ。和尙は諸人にたゝ此の一藥をほどこす。こは是れ人をして窠窟におとすにあらずや。　答、病に應ずる藥は千差萬別也。人をころす惡毒は、機の淺深をえらはず。もし能く直に喫し得て、喪身失命せば、誰か窠窟に落在せん。　問、一切の響を聞く時は、聞く底のものを見窮すべし。もし一音なからん時にあたつては如何。　答、聞かざるものは、これ何ぞ。　問、此聽法底のもの、某疑なし。　答、儞如何が會する、僧良久す。　師咄して曰く、鬼窟のうちに向ふて活計をなすこと勿れ。　問、この聽法底のもの、佛祖も會すべからず。　答、佛祖は姑らく措く、儞又如何。　僧のいふ、我もまた知らず。　師の曰く、佛祖何としてか知らざる底の道理ある。　僧言なし。　別人問ふて曰く、この聽法底のもの、目前に分明なり。　答、臨濟の三不解におちずして、儞道へ、何を喚んでか目前の聽法底のものとせん。　渠れ又言なし。　問、近代の善知識或は直に自性を見よと示めし、或は話頭を見よと示めさる。何れか是なるや。　答、意句もと二づにあらず。千句萬句たゝ自性の一句なるもゑに、自性は話頭の根本なり。本を得て末を要ぶべとなし。この故に初心の學者ゞゞ直に自性を見窮せば、一切の公案、自然に透得すべし。もし自心を明らめ得たりと存するとも、古人の話頭をとはり得ずんば、自己未だ徹悟せずと知るべし。かるが故に古人の曰く、未得底の人は、句に參せんより意に參せんに如かじ。已得底の人は、意に參するより句に參するに如かずと。　僧のいふ、然らば則ち某等今初心の學者なり、話頭を見るは誤るべしや。　師の曰く、儞今いづれの話頭をか見る。　僧いふ、父母未生前、本年の面目。　師曰く、すでに是れ本來の面目、これ儞が本源の自性にあらずや。儞自らあやまりて他人の言句となす。　又僧問、某初心の學者なり、即心即佛の話を與へらるゝは、是れ善知識の誤なりや。　答、既に是れ即心即佛。これ古人の公案を與ふるにあらず、直に儞が即今の自心を指す。主家のあやまるにあらず、儞自ら己れに迷ふて言句となす。この故に百丈の曰く、一切語言宛轉して、皆自己に歸すと。もし實にかくの如く徹悟せば、豈に只た佛祖の奇言妙句のみ自己ならんや。萬象森羅、畢竟して自己にあらざるものなし。　問、然らば則ち自心を明らめんと要せば、萬象森羅を見るべしや。　答、然らず。生死大事のために自心を明らめんと欲して、志の熟する時、自然に色を見て心を明らめ、物に附して道を悟ることあり。然るを始めよりたゝ萬象森羅を見て自己を明らめんと欲せば、度を失ふて、必す邪路に入るべし。たゝ自心を明らめんと要

せば、直に一切の聲を聞く底の本源を見窮して、心路絶し命根斷する處、これ自己安身立命の時節なり。古人の曰く、根に歸ればむねを得、照に隨へば宗を失すと。又無門の開和尚のいはく、參禪は須らく祖師の關をとはるべし。妙悟は心路を窮めて絶せんことを要す。祖關をとはらざれは、心路絶せず、悉く是れ依草附木の精靈なり。　問、古人の曰く、活句の下に薦得すれば、永劫にも忘せず。死句の下に薦得すれば、自救不了、此意如何。　答、死句の下に薦得するも、機位をはなれず。活句の下に薦得すれば、心路絶するが故なり。　問、この聽法底の一句は、これ死句か、これ活句か。　師即ち上座とよぶ。　僧應諾す。　師の曰く、これ死するか活するか。　問、牛窓樞をすぐ、頭角四蹄は都て出で了て、尾巴なにとしてか過ぐることを得ざる。この一句のごときは、これ死句か、これ活句か。　答、玄ばらく諸人に問ふ、これ何の道理とか見る。おの〳〵自ら所解をのぶべし。　てふにおいて或は云はく、網をとはる金鱗なは水に滯る。　或は云はく、出身は猶ほやすかるべく、脫体の道はかたかるべし。　或はいはく此の水牯牛とは、自己清淨の法身なり。古今にわたり內外をかぬるかもゑに、尾巴すぐることを得すといへり。　或はいはく、たゞ是れ學者の悟りて未だ悟證のあとを忘せざるをいふ。　或はいはく、自己をあきらめたりといへども、從來の習氣のいまだ忘せざるをいふなりと。　師高聲に叱して曰く、不是々々、本是れ活句なりといへども、かくの如くに情解をなすときは死句となる。これ祖師の關にわらず、たゞ是れ譬喩の法門なり。這般の情解を以て活句を見ば、自家の眞宗、地を拂つて盡きん。十餘年の間に此の句について所解をのぶる者すこぶる多しといへども、一人も未だ愚僧か意にかなはず。　この時衆驚きていふ、某甲等が如きは、たゞかくの如し。請ふ和尚代つて一轉語を下せ。　師即ち代語して曰く、路に死蛇に逢ふて打殺すること勿れ。無底の籃子に盛り將ちて歸れ。　問、雪千山に覆ふ、孤峯何としてか白からざる。この句は是れ死句とやせん、これ活句とやせん。　答、汝等如何が會する。又おの〳〵所解をのべていはく、我は賓中主と見る。　我は千山の雪は這邊なり。孤峰の白からざるは、那邊向上の一路と見る。　我は眞心妄心と見る。　我は孤峯は正位、千山の雪は偏位なりと見る。　我はたゞ無義味と見る。　我はたゞ學者に疑團をおこし、工夫をなさせしめんがための方便の語と見ると云々。　師の曰く、又是れ惡く情妄の見なり。もしかくの如くならば、耕農耕夫も皆禪を會すべし、還て耻を知るや、未た陰界を出でざる人、祖師の活句を辨せば、還て死句となるべし、この答つゐにまぬかれがたし。師因に

〔自救不了〕自己自ら自己を救ひ得さることを云ふ。

〔尾巴〕只尾のこと。

〔賓主偏正〕 臨濟大師は四賓主を唱ひ、洞山大師は偏正五位を唱ひて宗乘を拈し學人を接す、四賓主とは主中賓、賓中主、賓中賓、主中主なり、偏正五位は正中偏、偏中正、正中來、偏中至、兼中到これなり。

一頌を作て曰く、千山萬嶽雪堆々。孤峯爲二什麼一不レ白。賓主偏正落二格量一。直參則鐵樹華拆。又衆に語つて曰く、六祖の云はく、風幡の動するにあらず、仁者の心の動するなり。天台の韶國師此語を辨していふ、若しくは風幡動せず、汝が心の妄に動する也といふ。もしくは風幡を撥はずして、風幡の處について通取せよといふ。若しくは色即是空といふ。若しくは風幡の動する處これ什麼といふ。若しくは物に附して心をあきらめて、物を認むることをもちひずといふ。若しくは風幡の動するに非す、須らく妙會すべしといふは、祖師の意旨とつゐに交渉なし。すでに種々の解會にあらずんは、如何か知悉すべき。もし眞見し去らは、何の法門か明らめざらんと云々。古も今も未た大法を明らめざる人は、皆かくの如くの情解をなして、活祖の語を汚却すること、是れを以て知るべし、縱ひ死句なりといふとも、活人これを拈弄せば、直に活句となるべし。死蛇なりといへども、弄することを解すれば、また活せしむといふは是れなり。見すや翠巖、慈明問ふ、如何なるか是れ佛法的々の大意。巖こたへていはく、雲の嶺上になるなければ、月の波心におつるあり。慈明抑下していはく、頭はしろく齒は黃になるまで、退箇の見解をなす。巖即ち得身より汗をながして茫然たり。明のいふ、汝、我に問へ、我、汝かために說かん。

巖問ふ、如何なるか是れ佛法的々の大意。こたへていはく、雲の嶺上になるなければ、月の波心におつるあり。翠巖言下に大悟す。翠巖の初めの見解のごときは、情雲を坐斷して、一念不生なれば、心月明徹して沙界に偏すと見る。たたこれ精魂を弄する底の情妄の知見を以て、佛法的々の大意に答ふるか故に、慈明に呵責せらる。慈明和尙の答話のごときは、衆流を截斷する底の活句なり、この故に人を活せしむ。しばらく諸人に問ふ、たゝこの一句のうちに何としてかかくのごとく死活のべたてあるや。慈明和尙の雲の嶺上になるなければ、月の波心におつるありといふがごときは、是れ何の道理ぞ。翠巖の未徹の時の見地におちずして、試に參詳して見よ、死句活句の差別は、初心の人に對しては、總て說示しがたしといへども、おほかた譬喩因緣にわたり、理性玄妙佛法邊の義味におつる語を死句とす。機位をはなれざるか故に、所以に古德のいはく、句中に句あるを死句とし、句中に句なきを活句とす。又いはく、機位をはなれざれは毒海に墮在す。語、群を驚かさゝれは流俗におちいると云々。およそ活句を死句となすことは、言句の咎にあらず、たゝその作者の見性の未徹なるによるべし。爰において非を知らば、一切を放下して己れについて看取せよ、言句を辨する底、畢竟して是れ什麼。問、言句に死活あり、一靈の眞性に還て

〔衆流〕 妄想煩惱を云ふ。

死活ありや否や。　答、和泥合水。　問、如何なるか是れ祖師の心印。　答、頑石眉毛生。　問、和尚の人のためにする底、微細なるときは、あまりに微細なるか故に、初心の學者も知見をおこし伎倆を生す。向上なる時は、あまりに向上なるか故に、久參の衲子も足を立る處なくして、還て退屈を生じつべしと云ふそしりあり。和尚何としてかこの答をまぬかれん。　答、寒の時は普天普地寒し、熱の時は普天普地熱す、天地何の咎かある。　曰く、天地と和尚と是れ同か是れ別か。　師の曰く、還て我を見るや否や。　僧擬議す。　師の曰く、瞎漢。　問、如何なるか是れ禪家の道。　答、東廊西廊。　問、僧趙州に問ふ、狗子に還て佛性ありやいなや。州のいはく、無。意旨如何。　答、富士山の一笑せんを待ちて汝に向つていはん。　問、如何なるか是れ和尚の道德。　曰く、昨日の雨、今日の風。　問、作家本分をまはらすといふ、意旨如何。　答、破鏡照功なし。　問、古人の曰く、一靈皮袋、皮袋一靈、是なりや否や。　答、是なり。　曰く、もし然らば、四大分散の後は、誰か成佛し、誰か沈淪せん。　又罪を恐れ戒体を持して何かせん。　答、この因果遊無の見相續せば、地獄に入ること矢の如し。僞夢を見るや。　曰く、昏睡すれば必ず夢あり。　答、何事をか見る。　曰く、すべて定まれる相なしといへども、たゝ多く

〔皮袋〕肉體といふほどの義なり。

はかねて身心に存することを見るなり。　答、死後の昇沈も又かくの如し。一切の心念をおこす事は、四大の色身によれり。畫の心念の善惡に依て、夜の夢も相隨つて現ず。今生の身口意の三業の輕重に依て、滅後の昇沈あり。かるが故に古人の曰く、業に依て身をうけ、身又業をつくると。こゝを以て知るべし、今生の身より來生の身を相續することを。もし能くこれを知らば、豈に一靈皮袋、皮袋一靈といふことをうたがはんや。　曰く、某はじめて知れり、身心不二なることを。然らば則ち見性成佛の義、枝葉なり。たゝこの色身において諸の惡行をやめ、諸の善根を修し、持戒清淨にして、不善の心念なくは、すなはち佛なるべしや。　答、一切の不善の心念は、迷情より生せり。もし直に見情通達せずして、不善の心をやめんと擬せば、睡眠を除かずして夢をやめんとするが如し。一切の諸業は、識情を以て根本とす。根本を截斷せば、枝葉何ぞ生せん。　曰く、然らば則ち見情通達して、識情を忘したらん人は、破戒不律をふるまふとも、罪なかるべしや。　答、もし通達の人ならば、豈に破戒の罪をつくる心あらんや。　曰く、もし實に無心を得たらん人は、直に空に歸してふたゝび生をうけざるべしや。　答、是れ外道二乘の斷見なり。もし然らば得道の人、何の利益かあらん。實に是れ狗野干にも劣るべし。　曰く、然らば得道

〔斷見〕諸法の本性は空寂なるも常僞にして不變なる

の人は、不生不滅を得て永く人を度し、そのきはまりなからんや。　答、是れはこれ外道の常見なり。佛說の不生不滅の義は、かくの如くならず。もしこの斷常の二見をはなれぬれば、生死にそまず、去住自由にして、意生化身し、緣に應じて衆生を度すること、所願力に隨ふて自在なり。　曰く、然らば佛祖も衆生も、同しく是れ一靈皮袋、皮袋一靈にして別に心性なくは起居動靜、見聞覺知、たゝこの色身の天然なるべし。見性をもちひて何かせん。　曰く、これは是れ自然外道の見解也。倘もし佛性を明らめずんは、幻身をとめて實として、性相一如の理に於ては、夢にも知らずして、一靈皮袋、皮袋一靈といはゝ、たゝ是れ世の常の有相執着の衆生なり。　曰く、佛性は天地にさきだち、諸佛衆生の根本なり。無邊の虛空に充足して、萬象森羅、たゝこの一法の印するところなり。この故に世尊初生の時、四方に周行すること七歩にして、一指は天をさし、一指は地をさして、天上天下、唯我獨尊といへり。我今この理をうたがはず、これ見性にあらずや。　答、又是れ實悟にあらず。たゝ是れ光影邊の見なり。見ずや、雲門のいはく、我もし見ましかば、一棒に打殺して、狗子に與へて喫せしめて、天下太平ならしめんと。　曰く、この見のあさきにはあらず。雲門たゝ世尊の唯我獨尊とのたまへる我相を嫌ふところなり。　答、倘は是れ推解の者なり。未た正法のむねを知らず、もし生れながらに實悟あらば、何に依てか出家の後に雪山に入りて一麻一麥を喫し、六年端坐して、蘆芽の膝をうがつまで身心を忘じて、臘八に初めて大悟するといはんや。　曰く、世尊の六年端坐は、衆生にしめす方便なり。　師の曰く、もし是れを方便といはゝ、方便といふも又方便となるべし。何のきはまりかあらん。　曰く、もしかくの如く一切の所見ことごとく不是ならば、何としてか是ならんや。　答、圓覺經に曰く、善男子その心には、乃至如來畢竟了知清淨の涅槃を證するも、皆これ我相なりと。　曰く、恁麼ならば、すなはち直に無心を得は、向上の宗猷なるべしや。　答、學道の人、無心を得て休するといへども、正眼見來らば、無心猶は是れ窠窟なり。　曰く、直に萬重の關を透つて、無心をすぐる時、如何。　答、五臺山上に雲、飯を蒸し、古佛堂前に狗、天に屎す。

師在二甲州鹽山一時。有二身邊隨侍僧一。將二此冊一出曰。近日應二僧尼道俗等之疑問一被二對示垂手之語。少々記集。今有二三冊一。禁不レ獲レ已而寫レ之去者漸多。如レ是妄展傳書二寫之一。故文字鳥焉作レ馬。理趣也隨參差。恐令二見人錯遇受一罪。所以擬レ開レ板。又以二

ことゝ知らず却て斷滅の見を起し此の邊死し已て復た再び生せずと妄計す、是を斷見と名く。

〔光影邊の見〕意識下の見解といふ義なり。

〔臘八〕十二月の八日を云ふ。

〔五臺山上〕洞山守初禪師の所。

假名字ニ書レ之。而欲レ敎ニ不レ識レ字蜑普見易。諸師安ニ首題名一。師云。非ニ是予本意一。這般和泥合水之野語。安著ニ什麽首題之名字一乎。雖ニ然與麽一。若要レ爲ニ兒孫一作ニ警策曲一。任命レ工鏤レ梓焉。因號ニ之鹽山和泥合水集一耳。

鹽山和泥合水集 終

月庵假名法語

解題

高僧傳に據るに、月庵禪師その法諱を宗光といひ、俗姓は大江氏にして、濃州の人なり。いはけなきとき、峯翁和尙に大圓寺に投し、祝髮して因て親方を尙ム。はじめは古先元および夢窓石の二大老に參し、峯翁和尙に大圓寺に投し、祝髮して因て親方を尙ム。はじめは古先元および夢窓石の二大老に參し、また南禪寺の竺仙和尙に依りき。いくばくもなく歸りて、また峯翁に從ふ、峯翁ふかく禪師の猛精を稱し、その蒲團を付して、儕まさに人天の眼目となるべしといひぬ。峯翁順世の後、いで、復庵、玉林、孤峯などに依り、ついで豫州の宗昌寺にもき大虫岑公に見も。大虫すなはち諸方叢詳の因緣を問ム、禪師一々擧呈するに、大虫聲を抗て罵りていはく、遮脫空殼語漢と。禪師その言下において大悟し、從前の珍秘身に和して放下す。大虫つゐに印記をさづく。これより紀勢の間にあそび、貞治丁未の秋、たま〳〵但州黑川にいたり、その山谷のしげり寂ひて物しづかなるをよろこび、錫をとゞめて庵をひすび、藤を牀とし、楮を衣とし、飢えては木の果を拾ひ、渴しては谿間の水を掬ひ、枯淡生涯、世と疎然たり。然るにいくばくもなく、雲のごとくあつまり、

剃をのぞき險をひらき、自ら叢剃をなす。これすなはち雲頂山大明寺なり。かくて康應元年三月二十二日の中夜にいたり、端坐して蛻去す。壽六十又四。臘五十。門人ら闍維して本山に塔じ正法といふ。のち朝廷、山名時熙(巨川居士)の奏によりて、特に敕して諡號を正續大祖禪師と賜ふ。

月庵法語は、禪師順世の後、門人ら、その道俗に與へられし假名書の垂示二十四則を拾ひあつめて、かくは名けたるものなり。この書異本數種あるよしなれども、坊間に見ることを稀れなり。今この書を收むるに當りて、重に正保三年開雕の舊本に依りて校訂を加へぬ。

假名法語

月庵禪師

示二宗如禪尼一

大道廓然(くわくねん)として、本より示めすへき事もなく又明らむへき物もなし、只た人一念みづから迷ふて、種々の業をつくり、六道に浮沉す。是の故に佛祖世に出て、是れを救ひ玉へり。衆生根機まちまちなれは、教法は一旦かはれども、肝要は只た直指のみなり、別に更に道理なし。利根上智の人は、頓に佛祖の位をこえて、一切の法に拘はらす。鈍機下劣の者は、聞けとも信せず、見れとも貴はす、只た目前の營みばかりにて後世の事を知らす。たまたま善知識のすゝめによりて、少しきも生死を恐るゝ心あれとも、又有相(うそう)の行に執著して、無上道に向はす、たとひ坐禪工夫する人も、或は妄念妄境を厭ひ、或は無心無念に住し又は有無に拘はらすと思ひ、又はもろもろの見を離れたると思ふて、眞實の心を起さす、空しく光陰を送る。俄に死に臨んで、病苦いたくせむる時、前後茫々として、平生の伎倆すべて用ひ得す、初めて驚怖して千萬後悔すれともかなはす。古人是れを渴に臨んで井を堀

〔當處〕 胴處または即座といふほどの意。

〔莫謾瓦子〕 如來一代藏經は月を標すの指、門を敲くの瓦なりとの古語あり。

るに譬へたり。夫れ人身受けかたく、佛法遇ひかたし。相構へて〳〵、大願力を起して、三寶にも深く新誓し、自らも痛くはげしめて、今生に早く明らむへし、來世を期する事なかれ。汝若し此の理を信じて、大事を遂けんと思はゝ、何とも知らざる處に、急急に眼をつけて、知らざる處にも止まらす、また知る處にも向はす、直に見、直ちにきはめよ。更に路もなく、心もなく心もおよばすと思ふて、退屈することなかれ。數外に覺ある事を信して、行住坐臥しはらくもさしおかす、急急に志をすゝめて、よくよく用心せは、必す女身を變せす、當處に解脱して、生々世々大安樂なるへし。うたがふ事なかれ。又一偈を示めす。

汝求二直指一。曲說如レ是。只要二門開一。莫レ認二瓦子一。

世間は無常也、一切住らず。たとへは夢幻泡影の有るに似て實なきが如し。世人は此の理を知らずして、實に我れありと思ふて、諸の貪欲執心深く、名聞利養甚し。只た今生の事ばかり思ふて、あけくれ妻子眷屬、衣食財寶の營みに心を盡くすばかりにて、時々に生死の到來し、念々に殺鬼の犯し責むる事を知らす。病難忽ちに至つて、報命終らんとする時

初めて驚き、後生たすからんことを思へとも、總てかひなし、只た茫々として死する而已なり。是の故に惡道に墮ちて、平生所作の業因來り報ひて種々の苦をうけ、身をやふり心を摧きて、劫を歴、生を重ぬれとも、浮ふこと難し、實にあはれむへき者也。此の理を知らすして、破戒無慚、邪見放逸の者を、人中の鬼畜と云ふ、是れを恐れ、是をなげきて、佛をあかめ、法を信し、僧を供養し、諸の善事をなして、世間暫時の相に着せず、偏に生々世々たすからんことを思ふ、是れを殊に智ある人と云ふ也。然りと雖も只た世間の善事を行するはかりにて、菩提心なきは、有相の痴福と成りて輪廻の業を免れす。うちに菩提心を起して、はかに善行を重さね修する、是れ内外相應の功德なり。抑も如何が菩提心を起すべきとならは、先づ世間の相は、もとより非相なりと信じて、見聞覺知に於て、有と思はすハ無と思はす、生と思はす、滅と思はす、諸の道理をなし、料揀分別を成すへからす。縱ひ妄念暫時起るとも、再ひつがすハ又顧みることなかれ。是の如くならは、諸の事に於て執着住着あるへからす、是れ先づ菩提に入る路なり。こゝに於て又茫々として何とも知らす、とりつく處なしと思ひて疑ひをなし、退屈する事なかれ、少きも取りつく處あるは、みな輪廻の業なり、何とも知らさるゝ即ち生死を出てゝ煩惱をはなるゝ處なり。只

た此の如く深く信して、何ともはかり難き處に直ちに眼をつけて、行住坐臥念々怠らず、志を勵め極めて看よ、必す覺る時節あるへし、是れを菩提心を起して、現身に成佛する人と云ふなり。縱ひ又今生にて覺ること遲しと云ふとも、此の信力強くんは、諸の惡業を轉して、永劫人身を失せす、願心を成就して、大安樂の地に至るべし、疑ふ事なかれ。

〔心法〕此處にては心性といふほどの義なり。

示二宗三禪閣一

大道方所なし、目前を離れす、心法形なし、物に即して即ち是なり。一念不生なれは、脫体顯露す。疑心纔に起れは、是非紛然たり。是非紛然たれは、六道現前す。疑心休歇すれは、永く離る、夫れ疑心起る事は信力弱きによる。信力強き時は、只た一念なり。一切一念なれは、諸の事に於て隔つる思なし。隔つる思なければ、目前萬境、一切菩提、更如何と有る事を覺えす、只た一片地のみなり、又何の疑か起らんや。然りと雖も信力猶ほ弱くして、疑心やゝ起らは、是れをやめんとすることなかれ、只た疑心の起る處につきて、立ち返りて看よ、そも此の疑心是れ何そと。かくの如く行住坐臥一切作用の時、忘るる事なく、怠る事なく、急々に眼をつけて、能く〳〵極めて看よ、必らす忽然として一笑の時節あるべし。重ねて一偈を示めす。

生死去來。棚頭傀儡。一線斷時。落々磊々。

示二宗清禪閣一

我が心本來清淨なる事、青天白日の一點の曇なきか如し。森羅萬象、一切の有情無情は、皆是れ此の光の轉變なり、すべて實体あることなし、是れを悟るを佛と云ひ、是れに迷ふを衆生と云ふなり。迷悟は妄心の分別なり、佛と衆生と更に別体なし。若し人是の如く當下に開悟すれは、一念の工夫を借らす、初心即ち正覺の佛なり、更に何ぞ坐禪修行をか勞せん。見聞覺知、行住坐臥、一切時中、着々活脫の三昧、現成受用の處なり。汝若し未た悟らすんは、只た此の如く直下に信受して、何とも知らさる處に向て念々志をすゝめて、我か心の根源如何と極めて看るへし、極め極めて如何ともせさる時、志を緩くする事なかれ、いよ〳〵知らすんは、いよ〳〵勵むへし。縱ひ又今生にて明らむる事なしと云ふとも、此の信力に依りて、來世定めて大解脫の處に到るへし、疑ふ事なかれ。

示二存上人一

道に向ふ事は誠を存するに過きたるはなし。誠存する時は、萬緣萬境皆即ち道にして、此の外別に道なし。存せさるときは、目に觸れて道を得す、勵もすれは妄念を除きて道を

明らむべしと思へり。此の故に是をとり非をすて、妄を厭ひ眞を求めて、日々夜々に心を苦しむるばかりにて、悟る事なし。只た今生空しきのみにあらす、千生萬劫惡趣に浮沈して、苦をうくる事やまず、實に憐むへき者なり。然かも誠と云ふ言をは聞けども、實に誠の理を知る人稀なり。夫れ誠と云ふは、二の心無きを云ふなり。二の心なしと云ふは、是は是にして是の道理なし。非は非にして非の道理なし、生は生にして生の道理なし。死は死にして死の道理なし。乃至一切の念、其の物に即して物に即する道理なし。只た直に見、直に聞きて、更に再ひ頭を回らさず、即ち汝か本來の面目現成の時節なり、是れを暫く二の心なしとは云ふなり、萬法を混して一にして二なしと云ふにはあらす。然りと雖も此の言を見て、道理を心得分きたるを至極とすへからす、實に誠を存する處に叶ふへし、誠を存する處に叶はんと思はゝ、只た志をすゝむるに如くはなし。志親切なるときは、誠を存する心も忘れはてゝ、通身只た是れ一片の生鐵の如し、是に至つて、又主住する事なかれ、いよ〳〵志を猛くはげましてすゝむへし。志極はまりて忽然として轉するとき、大地山河身に和して一時にひるかへる。初めて知るへし、三世の諸佛、歴代の祖師、天下の老和尚、一等に蒲棒を喫する分ある事を。且く道へ、誠を存するか、存せさるか、老搶甘なつて、

塊を逐ふ狂狗となる。汝試に辨して看よ。

示二信女慶明一

佛法と云ふは、別の事に非らす、只た我か心なり。我か心を善く持ては即ち佛の心なり、我か身を善く持ては即ち佛の法なり、我か心を惡しく持ては凡夫の心なり、我か身を惡しくふるまへは凡夫のわさなり。凡夫のわざと云ふは、目に好き色を看て欲を起し、耳に好き聲を聞き、鼻に好き香をかぎ、舌に好き味を嘗め、身、男女にふれて善き心を起す事なり。是の故に我れに隨へは愛執の心を深くし、我れに背けは怨敵の念强し。此身の化なる事は、夢幻泡影の如し。今日有りといへとも、明日までたのみ難し。縱ひ百年の齡を持つも只た昨日の夢の如し、加樣に化なる事を思ひ知らす、いつまても世にあるへき思ひを成して、妻子眷屬萬つのすきわひをのみ、明け暮れ營む程に心もつかれ、身も苦しく、よろづにつけて六ヶ敷事絶えす。又富める人は、いよ〳〵財寶をもち重ねんと思ふ程に、利錢費買萬の事を成して、不斷あき足らぬ思あり。貧しき者は、我か身一身をも助けかたけれは、妻子眷屬までも扶持しかたくして、とかくに明け暮れ案すれとも、案しいだしたる事なけれは、盜をもせはやと思へとも、夫れは又命を失ふ事なれは、怖しく思ひてせられす、乞

食なとも又一身の事はかりにてもなけれは、それも亦叶はす、なにともかともする方便なくして、明け暮れ嘆き悲むはかりなり。善きにつけても、悪しきにつけても、人間のわさは、苦多く楽少し。今の苦は即ち後の世の地獄、餓鬼、畜生、修羅、諸の悪道業と成りて我か身を焼き焦すはむら、又きりさく劒なるへし。總て〳〵他人の仕い出したる禍にはあらす、只た我か心道ひも身のふるまひも悪しきによりて、かゝる苦をうけて、生々世々悪道に浮き沈むなり。縱ひ又人間に生れて、位貴き人富めるものとなり、或は天上に生れて、萬の楽を受くれとも、是れも實の道心なくして、名利のために善根をなし、報ひなれは、一旦の楽はかりにて、死すれは又悪道に落つ、是れも始終楽しむへからす。是れみな善悪のかはりはあれとも、心悪しく持つによつて、直ちに佛法を覺らす、輪廻生死を免れさるものなり。抑も心を善く持ち、身を能くふるまふと云ふは、如何なる事ぞや。夫れ我か心は、我か身未た生れす、父母の縁なかりしさきに、明々了々として、隱れす昧ますす、迷はす障りなきものなり、上佛祖と同しく、下一切衆生乃至心なき草木までも、同体にして更に二つもなく、三つもなし、此の心は天然にして私なし、故に佛に於ても増すことなく、凡夫にありても減する事なし、諸の善悪に於ても隔てなく、僧俗にありても異なし。此の如

く直なる事をは知らす、佛をは貴く思ひ、衆生をは賤しく思ふによりて、我か心の直なる事をも辨へす、本より生死なきことをも知らす、朦々茫々としてあかし暮らすのみなり。是れ即ち生きなから闇き地獄に落ちたるものなり。此の闇きやみを離れて、頓て明なる佛の心に成らんと思はゝ、只た一切善悪是非の思を打捨て、我か身の未た生れざりしさきの心は、そも如何なる物そと、起居に忘れす、念々極めて見るへし。若し又一切の事に逢へは六々敷、紛らかさるゝ思ひあらは、閑かなる處に坐して、先つ香を焚き、佛を三度拜み、其ののち手を組み足を組みて坐すへし。手の組みやうは、先つ右の手をあをのけて下に置き、左の手をあをのけて上に重ねて、兩方の大指のかしらをさし合はすへし。足は左の足を右の足の上に重ぬへし。目はなからばかり明けて、口をはふさきて、舌を食ひ合せ、舌をは上の顎につけ、おく齒を能くくい詰め、背を直くに立て、心を强く持ちて、先きに示したる如く、我も未た生れぬさきの心は、如何なる物そと、念々に疑ひて極め極めて見るへし。加様に坐しても臥しても、萬の事を作す時も、忘れす用心するを工夫と云ふ。此の如く坐禪工夫して怠りなきを、心も身もよく持ちふるまふ人と云ふなり。加様に勤に闇かす極め見は、必す我か心の源を覺るへし。心の源を覺れは、本より佛もなく衆生もなく我

もなく人もなし、善惡是非、一切の煩はしき思、夢の覺むるかことく、何事も打ち破れて只た我もなし、前きの天然の私なき心ばかり顯はれて丁々分明なり。此の上に於て、又萬の思ひの浮べども、總て煩ひなし。縱へは鏡の上に諸の影のうつるかことく、水の中に月の光の明かに見もるか如し。是れ心にも非す、是れ色にも非す、是れ念にも非す、是れ境にも非す、畢竟して何にも非す、是れを眞心とも云ひ、正念とも云ひ、佛境界とも云ひ、常住法とも云ひ、本來の面目とも云ひ、教外別傳とも云ふ。千生万劫生滅するに似たりと云へとも、終に生滅にあつからす、處に隨つて去來自在一切障なし。是れを眞實の極樂世界、安養淨土、大寶藏、無爲の都と云ふなり。かゝる有り難き事を信じて又疑はす、先きに示めす如く坐禪工夫せは、たとひ今生にて悟ることなしと云ふとも、臨終の時正念住じて去るべし、更に惡道に落つへからす、速に身をかへて、貴き人に生れて少きより佛法修行して、頓かて悟る人となりて、一切の衆生を導き、人天の大導師となるべし、相携へて〳〵疑ふへからす。

示二妙光禪人一

先日十八首の高詠、意句絶妙にして、殊に心目を驚す、仍て法語一篇を說示せん事を承る。

山野老病相侵して晨夕平臥、身心昏蒙にして、只た痴兀に任すのみなり。法眞て知らす、語も亦た會せす、更に此の何をか說き、又如何示めさんや。然りと雖も只た此の知らす會せす、三世の諸佛も終に如何ともせす、歷代の祖師も氣をのみ聲をのむ、盡大地の人、更に何れの處に向つてか摸探せん。道裏に到りて、汝如何か測度し、如何か參取せん。山僧即今恁麼に道ふ、平生の肝膽底を盡くして傾け終れり、汝還つて會すや。若し又根思遲回にして、瞥地なる事能はすんは、只た此の不知不會の處につきて、十二時中、行住坐臥、茶裏飯裏、笑裏語裏、一切の所作所爲の時、大勇猛の志を起し、急急に眼をつけて、念念に是れ何ぞと極め見るべし。凡そ覺道の人、此の不知不會の處に於て、直下に透得する事能はす。或はすでに是れ不知不會、又此の何をか極め、何をか覺らんと思ふ人もあり。或は不知不會と思ひて、すゝみ得さる人もあり。或は是れを空切己前の事と思ひ。或は今時日用の心と思ひ。或は万法自性と思ひ。或は本來の面目と思ひ。或は即心即佛と思ひ。或は非心非佛と思ひ。或は不是心、不是佛、不是物と思ひ。或は山は是れ山、水は是れ水、柳は綠花は紅と思ひ。或は全体作用と思ひ。或は教外の玄機と思ひ。機に口を開けは訛り、念を動すれは背くと云ひ。或は人に一問せられて、棒を行し喝を下し近前叉手し、袖を拂つ

で去り、種々の伎倆をなすものあり。此の如く諸の異見邪解稱計すべからず、皆是れ天魔外道の心なり。多くは此の如くの邪路に落ちて、正道を知らず、只た今生三世のみにあちす、千生万劫、生死の海に浮沉して出つる事能はず、是れ誠に憐愍すべきものなり。是れ只た誠の志なきによりて、命を捨つる限に至ることを能はず、偏に妄念妄想を以て、佛法をあてがひ計るによりてなり。是の故に鈍根蒙昧の者は、いかに鞭策すれども驚く心なし。或は智恵なきによりて、少しき思ひ知りたる分齊の事を至極と思ひて、更に勵む心なし。又利根聰明の者は、實少く虚多きによりて、知らぬことを知れりと思ひ、明らめぬことを明らめたりと思ひて、種々無盡妄智を起し、至らす及はぬ處までも料揀分別して、佛法世法に於て聞き事なく不審なしと思へり。かゝる衆生は、千佛出生すとも方便あるへからす、如何濟度すべきや。是れ只た最初の志薄く、善知識に遇はぬによりて、邪正辨し分けす、我か心ばかりを本とするによれり。若し此の如き道理を思ひ分きて、端的の處を信取せは、更に何の如何若何をか論せん。路頭絶する處に重ねて歩をすゝめ、信力極まる時、いよ〳〵志を勵まして、精神を盡くし、肝膽をしたくして極々に見よ、必ちす無心中に忽然として身を翻す時節あるへし。此の時始めて知らん、山僧か不知不會と云へる語は、汝か眼を瞎却する惡

〔葛公〕古の仙人の名なり。

〔舍利弗〕梵語、此に鷺子と云ふ、釋尊十大弟子中の一人にて智慧第一と稱せられたり。

毒、汝か身を縛殺する繩索なることを。然りと雖も不レ因二樵子徑一。爭到二葛公家一。之れを思へ。

示二在家女人一

我か心本來是れ佛なり、千生萬劫、曾て迷へる事なし。迷へる事なければ、又悟るべき法もなし。既に迷悟なければ、天眞にして、本生死を離れたり。生死を離れたるか故に、來るも來る處なく、去るも去る處なく、住するも住する處なし。三世の心不可得なるか故に、一切諸法皆同しく解脱せり、何の無明の盡くすべきかある、何の煩惱の斷すべきかあらん。善惡なきか故に、地獄天堂もなし、邪正なきかもろに、佛界魔界もなし。必念生する處全く不生なり、心念滅する處全く不滅なり。是のもろに一切萬法、有情無情、畢竟空寂なり、此の如くの本來の法を知らすして、只た目前の相に於て、種々無盡の妄念を起して、生死なきに生死を見、迷悟なきに迷悟を分ち、生々世々、輪廻の業絶えす。是の故に法華經に、舍利弗當レ知、鈍根小智人着レ相、憍慢者不レ能レ信二是法一と云へり。是の故に龍女の成佛は、始めて佛と成るにはあらす、只た本來是れ佛なる理を顯はせり、實に男女の相あると思ふへからす。是の故に龍女變して男子と成ると云へり。又本より迷悟なきか故に、即ち南方無垢世界に往くと云へり。此の如く身心本來清淨なる事を直に信せは、縱ひ今生に悟る事なしと云ふ

〔乾屎橛〕橛は斷木なり、一段の直木を謂ふ、こは乾屎は糞の如きを云ふ、又橛は圓轉なり、屎を拭ふ所以なりといふ。

〔袈裟下に在りて〕袈裟を被る身に在りてといふ意にて、僧のことを云ふ。

ども、此の信力によりて、盡未來際惡道に落ちず、成佛する事疑ひあるべからず。

示二慶中大師

諸佛出世、祖師西來すべて別の事なし、只た人に本有の自性を直指する而已なり。如何なるか是れ本有の自性とならば、見聞覺知、語默動靜、乃至一切の作用、一切の境界、全く是なり。纔に念を起してうけかばんとすれば、即ち隔たる。是故に臨濟門に入れば、便はち喝し、德山門に入れば、便はち棒す、豈に擬議思量の及ぶ處ならんや。汝只た怠惰に看よ、此の外更に何事をか說かん。

又示

佛祖一段の大因緣、天に蓋ひ地に蓋ふて周遍せざる處なく、古に渡り今に渡つて斷絕の時なし、是れ有心無心の境界にあらず、豈に思量分別の及ぶ處ならんや。故に古來明眼の宗師、人の爲めにするに、機前に直截して擬議を入れず、電轉し星飛ぶが如し。僧問二雲門一如何是佛。門云、乾屎橛。又問、未レ起二一念一時還有レ過也無。門云、須彌山。僧門二趙州一、狗子還有二佛性一也無。州云、無。亦云、有。又僧問、如何是祖師西來意。云、庭前柏樹子。俱胝凡有二所問一、只豎二一指一。魯祖は僧の來るを見て壁に面して坐す。臨濟は便はち喝し、德山は便はち棒す。利根上智の人は、當下に身を翻へして舊路に行く、手を那邊に撒して全機活卓々地。中下の人、根機遲鈍にして、此の如くなる事能はず。是故に古人假りに方便を設けて暫らく坐禪工夫をすゝむるものなり。然れども坐禪工夫をなすと云へども、悟ること遲くして、動もすれば十年二十年を歷る人もあり。又一生の中に終に叶はずして空しく終はる人もあり。是れ皆正信なく實の志薄きによれり。洞山、僧に問ふ、世間甚麼物か最も苦なる。僧云はく、地獄最も苦なり。山云、地獄未だ是れ苦ならず。袈裟下に在りて佛法を明らめず、人身を失ふ、是れ大なる苦とすと云へり。先つ此の意を能く〳〵思ひ分くべし。夫れ在家の人は無量の罪業を作り、口業深くして、地獄餓鬼諸の惡道に落つと云へども、不思議なる佛法の緣に遇ふて浮び出で、又人身を受く事もあるべし。出家の人の無道心なるは、佛の衣鉢を盜み、僧比丘尼の袈を假するばかりにて、徒に信せず驚かず、善知識の勸めに逢へども、驚かず恐れず、只た己れが情を本として、思ふやうにふるまひ、懶惰懈怠にして、無慚放逸なれば、今生一世のみにあらず、纔ひ無量億劫を歷るとも、佛法の種なく、緣もなければ、道心の發ること總てあるべからず、永く人身を失ひて、惡趣に沈み果てなん事、是れ大なる苦にあらずや。佛も無緣の衆生を度し玉はれば、如何なる慈悲方便も叶ふべからず、誠に憐愍すべき者なり。

かくの如きの道理を思ひ知りて、大願願精進力を勵まして、正信を發し、まことの志をすゝめて、今生にて佛法を明らめんと思ふべし。抑も如何なるか正信とならは、只た一切の思量分別、諸の道理を離れたる處を、佛法に入る路頭と先づ信すべし。縱ひかやうに信すれども、又まことの志なければ、是れ悟ること難し。まことの志と云ふは、諸の道理なき時、如何なるか是れ教外別傳の處と、急に眼を着けて極め見るべし。かへすがへすも少しも怠らず、しばらくもおくことなく、行住坐臥一切の處、一切の時に於て、大なる慈歎のある人の如く、念々忘るへからす、古人是れを喩へて、父母一度にわかるるか如く、我か頭を截られんとするか如く思ふへしと云へり。かくの如く親切に用心せは、工夫純熟して、必す悟る時節あるへし、此の時始めて知るへし、金屑眼中翳。衣珠法上塵。巨靈猶不レ重。佛祖是何人。

〔金屑眼中翳〕黄金の屑は貴けれども、眼中に入りては翳となるといふことなり。

示了仁居士

生死事大、無常迅速、百年光陰一彈指の如し。此の身の化なる事は、風前の塵、草葉の露と同しく、又は電の影水の泡の如し、出息入息を待たす、今日明日を期し難し。道裏縱ひ榮華富貴意に任せて自在なりと云へとも、只た昨日の夢の如し、久しく保つへからす、今生の樂は必す後世の苦となる、一旦の樂に誇りて、永劫の苦を受くへからす。適ま受け難き人身を受け、遇ひ難き佛法に遇ふて、道心をも起さす、佛法をも悟らすんは、一度人身を失つて、永く泥犁に沈み果てんこと、悲まさるへけんや。故に古人の云はく、光陰如レ箭。時不レ待レ人。此身不二向レ今生度一。更向二何生一度二此身一と云へり。若し此の身を度せんと思はゝ、先つ生死の大事を明らむへし。夫れ生死の大事と云ふは、生すれとも來る處を知らさる、是れ生大なり。死すれとも去る處を知さる、是れ死大なり。故に生死事大と云へり。此の生死の落つる處を知らすんは、生々世々冥々たる暗裏に迷ひ、茫々たる苦海に沈みて、六道輪廻の苦やむへからす。加樣の事を先つ能く〳〵思ひ知りて、大願願を起し、勇猛の志をすゝめて、生死の根源如何と極め見るへし。生死の根源と云ふは、只た我か日夜に發る處の心念なり。抑も此の心念甚麼の處より起り、又何處にか去るとい、念々忘たらすい、急急に眼を着けて極め見るへし。只た坐禪の時のみにあらす、十二時中、一切の事をなさん時も、かくの如く志を忘れす、用心して見よ。工夫純熟せは、必す大に悟る時節あるへし。此の時初めて知らん、我か此の心念本より起る處もなく、去る處もなく、住する處もなきことを。生死亦復たかくの如し、生すれとももと來る處もなく、死すれとも實に去る處もなし、現在亦所住なし、三世の心不可得にして蹤跡なし。かくの如く分明に悟り得は、我

〔泥犁〕梵語、地獄のことなり。

か此の身業生にもあらす、佛にもあらす、生にもあらす、滅にもあらす、無始曠劫より畫未來際に至るまて、何の相もなく、何の道理もなし、之を一片々了々の田地と云ふ。此の無心境界に叶ひ得れは、一切の相を破らす、高の道理を嫌はす、緣に隨ひ物に應して、無量無邊の事を作用するなり、之を處に隨つて主となれは、立處皆眞、我れ法王となつて法に於て自在なりと云へり。生死の中に出入して、終に生死をうけす、苦樂の境に相應して、又是れ苦樂の實なし。此の如く大安樂大解脫の身となるへき事をも知らす、只た何ともなき事を思ひふるさひて、徒に月日を送り、空しくこの身を捨てん事、實に悔むへき者なり。相構へて如樣の事を能く思ひ知りて、我か心の師と成りて、我か心を本とせす、時々に我か身を誡め耻かしめて、用心綿密なるへし、後悔を殘す事勿れ。記取せよ、記取せよ。

示三宗眞居士

諸佛出世、祖師西來、かつて一法の人に與ふるなし、只た人々本有の自性を直指するのみなり。夫れ本有の自性と云ふは、教家に沙汰する處の理性義にあらす、直ちに是れ教外の宗旨、全体作用の處なり、更に擬議思量の及ふ處にあらす。是の故に古人僅に口を開いて如何と問はゝ、即ち喝し即ち棒し、或は推し出し、或は蹈み倒す。慈骨の慈悲老婆親切なり、何

〔當下〕直下、當處さいはんか如し。

の愚力か是れに及はんや。上根利智の人は、當下に身を翻へして、朕跡を留めす、顎を天外にめくらして、呵呵大笑するのみ、何の禪道佛法迷悟凡聖の見か有んや。大千沙界海中漚。万象森羅紅爐雪。中下根機はかくの如し。直下に頴脫することを能はす。是の故に古人止むを事を得す、枉けて方便をたれて、坐禪參學工夫用心をすゝむ。坐禪參學工夫用心、又是れ別の道理なし、只た直に見、直に行する處なり。初心の人は是れを知らす、坐禪工夫の樣を知識に參して、其の教への如く用心して、得法悟道すへき樣に思ひなして、動もすれは死の摸樣を尋ねて、如何なる公案にても、我れに示めし玉へと云ふ。近代此の風最も盛なり、若しかくの如くにして、佛法を明らめんと思はゝ、大に棒をあけて日を打たんとするに似たり、何れの日の何れの時か打ち當てん。又空中に梯を布て、天に上らんとするか如し、何れの刧にか昇り得へきや。愚痴なる人の佛法に入りて、空しく辛苦はかりして終に成することなきはかくの如し、實に憐れむへきものなり。汝先つ能く〳〵加樣の事を思ひ分きて、骨に遂り髓にとほる底の親切の志をはげまし、大誓願をおこして、十二時中行住坐臥、一切の事をなす處に於て、念々に怠らす、急急に眼をつけて、直に見、直に追んて、第三念を起さす、前後左右を顧みす、思量分別、諸の道理をなす事なかるへし。若

しかくの如く懇に用心せは、工夫純熟して、工夫の心みづから盡くる時、必す忽然として夢の覺むるか如くにして、大に悟る時節あるへし。疑ふ事なかれ。

答二信秀禪人一

坐禪工夫をなす時、只た昏散はかりにて、即心即佛にも成り得す。若し昏散もなき時、即心即佛とも本分の處とも云ふへしや。別に得法とて覺りを開く時節あるへしやと承る。夫れ昏散は本より嫌ふへきことにもあらす。昏の時は、全体只た是れ昏。散の時は、全体只た是れ散。一にあらす二にあらす、同なく又別なし。即ち是れを即心即佛とも、又現成本分の事とも、本來の面目とも、天眞自性とも云ふなり。迷ふ人は、只た此の直体を知らす、動もすれは分別を起して、昏散を嫌ひ、昏散なき處に向はんとす。此の心自ら己れか障礙を成すかもなに、古人是れを昏散二病と云ふなり。若し直心を覺らは、更に何の病かあらん。一丁一切了。一明一切明。必々不可得。念々大解脫。此の外更に生死去來の相を求むるに得す、一切の諸法本來寂滅なり。返へす〳〵昏散なき處を、即心即佛本分の處と思ふへからす。かくの如く思へは、二法となりて一心の道に迷ふ。若し此の心を生せは、みづから邪魔の見解をなして、永く黑闇の地獄に落つへし、恐るへし恐るへし。又別に得法とて悟を開く時節あるへきかの不審、是れ迷倒の妄見、正信の道を知らさるによる。只た一念解脫す、れは、即ち本來迷悟なし、心を以て心を求むること勿れ、衆生顚倒して、已れに迷ふて物を逐ふと云ふは是れなり。只た須らく昏散の二病に管せす、直ちに一切の分別を截斷して二度念をつかす、猛く精彩を着けて、死に至るまてかくの如く工夫をなすへし、必す佛祖の言教の外に遷脫の一路を得へし。縱ひ又今生にて悟る事遲くとも、かくの如く行せは、六道四生の苦をはなれて、必す清淨大解脫の寶所に至るへし、疑ふ事なかれ。

答二在家人一

凡そ坐禪工夫は、初めより何の道理をも心に懸けすして、只た佛法を明らめんと思ふ志を命にして用心すへし。極め來り極め去り、佛法を明らめんと思ふ心も、おのづから忘れは、て、只た身は身体はかりの立ち働くか如くなる時、悟らんと思ふ心もなきに、忽ちに夢の覺むるか如くなる時あるへし。此の時有無生滅の諸の道理に拘はらす、別に遷脫活路あり。初心の人は、加樣の事を知らす、尋常の心に替りて、或は無と思ひ、或は空と思ふ見の浮ぶを、誠の覺と思ふて、眞正の善知識にも逢はす、我か胸中早や明かなりと思ふて、慢心を起す故に、却て邪魔となりて、終には無間に落つる。加樣の惡見の者は、無道心な

る者よりも遙に劣れり。其の故は無道心なるものは、不思議の縁に逢ふて、初めより眞正の善知識にすゝめられて、佛法に入る路正しき事もあるへし。かくの如く惡見の者は、我か辛苦して覺を出したる者なり、善知識に教へられたるにもあらず、又人より傳へたるにもあらず、是れを敎外別傳と思ふて、人の云ふ事をも用ゐず、只た我か情識本とするに依りて惡道に落つるなり。古人是れを善因なりと云へども、却て惡果をまねくと云ふは是れなり。辛苦して正法をてそ明らめざれは、結句地獄に落ちんこと悲し、愼しまさるべけんや。先つ加樣の事を能く〳〵思ひ分きて、初めより道理をなさず、赤子の有とも無とも世法とも佛法とも知らざるが如く、何とも角とも心に擬はすして、只た道心ばかり眞實の覺そと思ふて、悟を待つ心有るへからす。左樣に思へは、悟を待つ心に隔てられて、速に悟る事能はす、只た身心をはなつて何ともならはなれ、又我か心に立ち飯りて、有と思ひ無と思ひ、又何者か我か主と思ふ萬の道理をなさず、十二時中、行住坐臥、總に用心せは、必す大願成就すへし。

[illegible] 示宗道居士 [illegible]

夫れ心迷へは佛即ち衆生となる、心悟れは衆生即ち佛となる。是の故に佛と衆生を全く別なし、只た是れ迷へると悟れるとの見異なるなり。迷悟の異見なければ、心にもあらず、佛にも非す、物にも非す。一切の道理を離れて、通身一條の生鐵の如し。出生入死只た是れ暫時緣に隨ふのみなり、去來なく蹤跡なく、所依なく所住なし。鏡の像に對するか如く谷の響を受くるに似たり。內に主宰なく外に境緣なし。地獄天堂、心に任せて遊戲し、若樂逆順、處に隨つて自在なり。何の生死の恐るべきかあり、何の禪道の求むへきかあらん。大千沙界海中漚、一切塵賢如二電掣一。這裏に至つて手を那邊千聖の外に撒し、步を今時塵勞の中に廻らして、道理なき處に於て道理を立し、是非なき中に於て是非を辨す、是れ世間迷倒の凡夫の實有の執見にあらす、只た無心の處に於て一切の事を成敗す、是れを世間出世間能事畢る底の大丈夫の漢と云ふ。佛祖終に他の落處を知らす、魔外爭てか測れか蹤跡を伺はん。汝若し恁麼に承當し去らは、曠劫の無明煩惱、一念の中に悉く消滅して、七通八達大解脫大安樂の人と成るへし。それなは未た然らすんは、暫らく步を退き、おのれにつきて我か此の心源如何と窮め見るへし、只た坐禪の時のみにあらす、十二時中、行住坐臥、見聞覺知、着衣喫飯、乃至一切の事をなす處に於て、急急に眼をつけて直に見、直に窮めよ、工夫純熟せは、必す大に透脫する時節あるへし、疑ふへからす。

〔承當〕領悟會得なと〜同意なり。

示二簡入禪人一

四大もと主なし、五蘊本來空。縱ひ父母の緣を借りて一旦生するに似たりと云ふとも、實に生ずる物なし。又人間の緣つき暫時滅するに似たりと云ふとも、實に滅する物なし。之を水中の月、鏡裏の像に喩へたり、其の相あるに似たりと云へとも、只た是れ光影のみなり、誠の主なし。是れを覺る人は、生死をも恐れず、涅槃をも愛せず、煩惱をも斷せず、菩提をも求めず、出生入死、遊戯自在、逆行順行、妙用無碍、千生萬劫を歴れとも、終に轉變の理なし、只た是れ性に任せ緣に隨ふのみなり。迷倒の衆生は、かくの如きの道理を知らず、只た目前の相に迷はされて、色に耽け聲に着し、香を愛し味を好み、諸の相において執着の心深くして、頓に離るゝ事能はず、是れを生死のきづなと云へり。縱ひ又加樣の世間の相、諸の欲念を恐るる人も、生死なきに實に生死ありと思ひ、諸相なきに諸相ありと思ふによりて、いよ〳〵迷に迷を重ねて、直下に心念のやむ事能はず。是故に諸佛祖師もろ〳〵の善知識出世して、教導して、直に見、直に聞き、直に行じ直に悟らしむ。上根の人は直に肯ひて、又重ねて生死の念を繼かず、一切の疑心當下に即ちやむ、是れを立地に成佛する底の人と云ふなり。中下の人は、かくの如くなる事能はず、動もすれは道

理に於て執心たえず。是故に暫く念をとゞめ心をやめ、一切不思量にして坐禪工夫せよと教も。此の教に隨つて又重ねて疑はず、諸の道理思量を絶して、大死人の如く何の心もなくして直に用心せは、本來の面目、脫躰現成せん。此の一念の信心堅固にして、第二念なくんは、只た是れ今生のみにあらず、生々世々、惡道におちず、大解脫大安樂の人と成るべし。たとひ又命終の時如何なる病苦死苦强く侵し、乃至無量の善惡の境界現すとも、一念動せず、諸の相を目にかけず、何とも思はずして終らば、即ち是れ生死截斷の時節なり疑ふ事なかれ。

示二道漸居士一

我が身本來實なし、只た父母の緣によりて、四大假りに合成するのみなり。四大とは地水火風なり。地大と云ふは、髮毛爪齒皮肉筋骨垢色也。水大と云ふは、唾涕膿血津液痰淚大小便利なり。火大と云ふは、煖氣なり。風大と云ふは、動する相なり。此の四大和合して、中に緣する氣あるを感知の心と名づけたり。此の四大分離する時、水はもとの水に皈りて、五躰かはきて濕ひなし。火はもとの火に歸りて、偏身冷へて煖かなる氣なし。風はもとの風に歸りて、全身躰みて働かず。然しでのち或は燒き、或は埋めは、本の土に歸へる。緣

氣の心は、四大分離する時、ともに散滅に歸す。迷へる凡夫は、此の四大假りに合するを實に生ずと思ひ、此の四大をもとに皈べるを實に滅すと思へり。是の故に生死なきに生死を見、身心なきに身心有りと思ふて、我見偏執の心深し。この故に輪廻の業報たえず。是れを悟る人は、四大の相は、空裏の花の如し。有に似たりと云へども實なし。生死去來も亦復かくの如し。一切の諸相は、夢幻の如くなりと悟りて、萬事に於て執着の心なし。執着の心なければ、生死頓に絶えて、輪廻永くやむ。先つ加樣の道理を能く〳〵思ひ知りて、坐禪工夫すべし。坐禪工夫の時、又別の用心あるへからず、只だ何とも擬ひ計る心なくして直に行ずべし。此の時取り付處もなく、方所もなく、路絶えて進み難しと思ふて退屈するゝことなかれ。若し方所あり取つく處あらば、これすなはち生死の根本なり。もろ〳〵の道理を離れて、何とも角とも擬ひ計るべき事なき處、即ち生死を離る時節なり。かくの如く直に信じて、生涯疑はず工夫用心せば、生死到來のとき、必ず力を得て、正念に安住して終るべし。是れを思へ。

示二豫州大守一

即心是佛、外に向つて佛を尋ぬべからず。即心是法、別に更に何の法をか求めん。一句流れを觀つて高機發前すべし。智の人は、言下に即ち悟りぬ。一切の疑心頓にやむ。鈍根の者は、加樣の事を聞けども直ちに信ぜず、只だ是れ難行苦行、久しく功を積みて後に佛と成るべしと思ふて、朝夕佛を念じ經を讀み、燒香禮拜、散花行道、或は布施、持戒、忍辱、精進の行を成し、或は一向長坐不臥觀念觀法す。愚痴甚しき者は、食を斷じ鹽を絶ち、骨を粉ち指を切り、無言裸形等の一切の苦行を成す、是れ只だ平生にて直に覺るべき事をば思ひもよらず、偏に後世の成佛を希望する而已なり。此の如く佛法を遠く思ひ成す心あらば、縱ひ如何なる身命財を捨つる苦行を成すと云へども、皆是れ有相執着の邪僧なるに依りて、終に正道を成すべからず。たとひ一旦果報力を得て、位貴く德勝れて、福樂必ず任すと云へども、善力盡きぬれば、又却りて惡道に墮ちぬべし。古人是れを住相布施生二天福一。猶如二仰箭射一虛空一。勢力盡箭還墜。招得來生不如意。爭似二無爲實相門一。一超直入如來地と云へり。先つ加樣の道理を思ひ分きて、有相の佛を望むべからず。縱ひ又即心是佛を信ずる人も、根機遲鈍なるに依りて、直に透脫する事能はず、只だ外に佛を求むべからず、我が心即ち佛なりと信ずるばかりなり。或は即心是佛と云ふは、只だ是れ別の道理なし、色を見、聲を聞き、乃至一切の事を成す處、只だ其の僅にして三度念を繼がざる即ち是なりと

〔獅子一滴乳云々〕悟り了れば煩惱即ち菩提となるの意なり。

思へり。此の如きの人は、只だ是れ推量の信にして、實に覺らされは、只た口に即心是佛と云ひ、心に即心是佛と觀するばかりにて、底に透りて休歇する事なし。是の故に動もすれは疑心起りて、是れぱかりにてはよもあらじ、此の上に猶ほ樣を有らんと思へり。此の思にさへられて、本心を晦ます事を知らず。或は誠の道心はなくして。悲わに小智惠ありて利根の人は、高禪の伎倆を好んで、即心是佛と云ふ法門は、只た是れ小兒の嘘をやむる分劑なり。一向に述へる在家等の人の爲には、樣樣の法門を以て勸め導く方便もあるへし、佛祖向上那邊の一着を以て、之を見れは淺くして淺し。これ等の法門を悟て至極と思ふてやむ人は、誠に佛祖の骨髓を知るへからすと思へり。是れ增上慢心にて實悟なければかくのごときの人は、終に外道天魔の眷族と成るへし。むかし大梅和尙問二馬祖大師一如何是佛。馬祖答曰。即心即佛。大梅言下に大悟して疑心頓に止む。獅子一滴乳、迸二散十刹盧乳一。或る時、僧來り語つて曰く、近日馬大師法門別なり、人に示めすに多くは非心非佛と云ふ。大梅答へて曰く、此の老漢、人を惑亂して猶ほ未た止まさる事あり。さもあらはあれ非心非佛。我れは只た是れ即心即佛と。實悟の人はかくの如く脚實地を蹈みて、終に頭をめぐらさす。又水潦問二馬祖一、如何是西來的々意、祖曰く、禮拜着せよ。水潦わつかに禮拜す。祖乃ち當胸に蹈倒す。水潦忽然として大悟す。起き來つて、掌を拍ちて呵々大笑して云はく、也大奇、也大奇。百千三昧、無量妙義、只向二一毫頭上一識二得根源一去、行到二水窮處一、坐看雲起時と。それより復凡そ所聞あれは、只呵々大笑するのみなり。かくの如く底を盡くして打翻せは、何の佛法の勝劣、公案の淺深、遐邊那邊、向上向下をか論せん。上士は一決一切了。中下は多聞多不信と云へり。只た是れ猛烈の志ある底の人は、そこばくの功行を勞せす、一言一句の下に於て、直下に截斷して、又重ねて疑心なし。若し又志弱く機鈍なる人は、此の如く頴脫する事能はすんは、只た念々志を勸めて、時々に聞かす心とも、佛とも、何とも角とも、擬ひ計らすして、只た志を命とし、願を力とし、路なき處に向つて歩を進めて看よ、必らす覺えす知るうちに、十方虛空、身に和して一時に打破する時節あるへし。此の時初めて知らん、即心即佛、非心非佛、乃至一千七百の公案および百千の法門、皆是れ門を扣く瓦子なりけることを。是の故に骨を粉にし身を摧きても、未た報もるに足らす、一句了然として、百億を超えたりと云へり。實に是れ佛祖の方便敎導に依らすんは、何の刧にか生死苦患を免れて、大解脫大安樂の田地に到るへき。此の恩德何を以てか報し盡くさん。針芥相投する喩實に疑ひなし。此の如く我か身の大願

成就して一切滿足せりと思ふへからす。猶は無緣の衆生を度し盡くして、同しく佛道を成せしめんと思ふ大願を起して、在家出家一切の人を憐み惠み救ひ導く大慈悲心を起すへし。是れ眞の佛祖の弟子、末世再來の菩薩なるへし。努力努力。

示二明眞道人一

我が此の身心全体本より迷はさる者なり、この故に是れを名けて佛と云ふ。夫れ佛と云ふは、相好嚴しくして光明赫々、飛行自在、神通變化あるを云ふにはあらす。加樣の佛は、只た暫時愚痴なる凡夫の爲めに殊勝の相を現して、信を生せしめて、眞實の道に入れんが爲めの方便なり。實の佛と云ふは、有相の形にあらす、諸の着心なくして、念々精進なる是れ也。又我が此の身も誠に相有りと思ふへからす、四緣假りに和合せり。四緣と云ふは地水火風なり。此の地水火風、相有るには似たれとも、實には相なし。夢幻泡影の如し。此の四緣假りに合して人となれは、我れにあらさるものを、實に我れなりと思ふて我執深し。是の故に我れに勝ふ者をは愛し悅ひ、我れに背く者をは惡み妬む。此の心惡道の業となりて、生々世々輪廻の苦絕えす、是れも亦別のものにあらす。直に佛なりと云へとも、愚痴なる人は、總へて信せす用もへからす。是の故に釋尊、韋提希夫人の爲めに西方極樂

世界阿彌陀佛を信して、念佛稱名し觀想をこらさは、臨終の時、必す引接せられて、決定往生すへしと說けり。是れを信して、偏に他力を頼み念佛せは、如何なる極重惡の人も、佛法の緣絕えす、後には必す極樂往生して、十二大切はちすのはらにはらまれて、其の後觀音、勢至等の菩薩の大乘法を說くを聞きて、初めて菩提心を發すへしと云へり。我か心即ち佛なる事を信んせさる人の爲めに、機をもをさへる方便にてかやうに說くことは、最も肝要なるへし。少しも靈性ある人は、十二大切の後に初めて道心を發すへき事を、遠々と待つへきにもあらす。只た藹直に道心を發して、頓に佛法を明らむへし。此の如くならは、釋尊彌陀の敎の本意に叶ふへし。抑も佛法を頓に明らめんと思はゝ、只た一切發る處の心念、萬の行跡、是れ皆佛なり。此の如く直に示めせとも、猶は疑ありて思ひ隔つる心あらは、先つ一切の心念をやめて、何とも角とも知らさる處に向つて坐禪工夫すへし。心を靜めて坐禪すれは、何ともなき思ひ隙なく起り、偖ては眠むるばかりなり。念の起るも眠の來るも、皆是れ佛の心なり。都て別の物にあらすと深く信して、きらひいとふ心あるへからす。こゝに於て、又何とも知されは、茫々やみ〳〵として、取りつく處なく、進むへき路もなく思ひ煩屈する事なかれ。若し少しも取り付く處あらは、生死の繼なり。何

とも知らざる所、即ち生死を出る路なりと、深く信じて又疑はず、夢の覺むるが如くにして、一切の疑忽ち止む時節あるべし。此の時初めて我れ此の身心何ともあらざりける事を悟りて大に笑ふべし。又縱ひ今生にてかくの如く明らむる事遲くとも、此の信力強くは、業に曳かされて惡道に落つべからず。又人身を受け幼きより佛法に入りて、すみやかに覺る人と成るべし。疑ふべからざれ。

又示

我が心本より佛なり。佛と云ふは、迷はざる心を云ふなり。迷はざる處を悟りぬれば、一切の佛菩薩、皆一心に具足して、別の体なし。然りと云へども、其の德によりて暫らく名をつけ替へて、種々の名字替れり。阿彌陀と云ふは、天竺の言葉には無量壽と云ふ。無量壽と云ふは、量りなきいのちなり。はかりなきいのちと云ふは、生するに似たりと云へども全く生せず、死するに似たりと云へども全く死せず、生死なき處、即ち人々の自性を云ふ。是れを阿彌陀と云ふ。藥師と云ふは、本より生死なき處を示めすを、法の藥を以て差別の病を治すと云ふ。是の故に生死なき處を覺りぬれば、諸の病悉く除かる、この故に藥師と名く。寶生佛と云ふは、万法本より差別なし、一切の有情無情平等にして、更に去來前後の道理なきを云ふなり。釋迦と云ふは、萬法本より不生不滅なり、是れを諸法從本來、常自寂滅相と云へり。寂滅の相と云ふは、有にもあらず無にもあらず、善にもあらず惡にもあらず、生にもあらず死にもあらず、迷にもあらず悟にもあらず、諸の妙相道理を離れたり。此の眞体を示めすを釋迦と云ふなり。是れを四佛と云ふ。此の外に眞言宗には、大日如來を立せり。大日如來と云ふは、萬法の正体、一切の根本なり。譬へは大日輪の虛空に出つる時、遍ねく一切の境界を照らして、其の跡なきが如し。觀音と云ふは、慈悲を体として、音聲を用とす。勢至と云ふは、正理に叶ふて其の力を施すを云ふ。文殊と云ふは、大智を云ふ。大智と云ふは、諸の料揀分別を離れたる無智の智を云ふ普賢と云ふは、一切の萬行をすゝめて、僧となり俗となり、男となり女となり、親となり子となり、主となり從者となり、よろづの人を助くる行跡をなすを普賢と云ふ。地藏と云ふは、人々具足、各々圓成せる心地を云ふ也。心地より一切の諸法を出生す。縱へは大地の万物を出生するが如し。虛空藏といふは、我が心も身も外の境界も皆實の体なし、猶は虛空の如し。虛空の如くなる處より一切の諸法化現す。この故に虛空藏と云へり。加樣の佛菩薩、皆一心の德なり。迷へは是れを知らずして凡夫と思へり、悟れは別の佛なきこと

を知る。もめ〳〵外に佛ありと思ふへからす。又別の佛を頼ひへからす。只一心正なれは、念々に佛菩薩現前するなり。然りといへとも、かやうの法門は、暫らく愚痴にして迷へる人の爲めに名をつけ、理を說きて眞實の處を悟らしめんか爲めの方便門なり。眞實の處に至つては、佛もなく菩薩もなく、心もなく法もなく、迷もなく悟もなく、諸の約束を離れたり。此の處を直に信じて坐禪工夫せは、火の燎もる中に雪の積らさるかことし、いかなる道理なりといへとも、懐にかくへからす。縱ひ思ひつけたる習氣おこると云へとも、直に截つて捨て、二度繼くことなかれ。三世の諸佛菩薩、歷代の祖師出世利生の本意、かくの如し。疑ふ事なかれ。

示二在家人一

唯た此の一段の大因緣、天に先ち地に先ち、古に過き今に越も。凡聖の中の境界にあらす思量分別も及ふへからす。是れを名けて不思議の法と云ふ。此の法、人々に具足すれとも みつから悟らさるによりて、日々に用ゐて知らす。盲人の終日に大道を行きて、みつから見さるか如し。みづから見さるか故に、是れを信せす、又貴ひす。歩々に惡處に赴くことを覺えす、只た今生一世の身命を助けんと思ふかばりにて、種々無盡の事を成して、日々夜々に惡業を增長するのみなり。今生一世の事は、縱ひ百年の齡を保つとも、暫時の夢の中の樂なり。久しくあるへからす。古人の曰く、遠き慮なけれは、必ず近き憂ありと云へり。只た暫時の妻子眷屬愛執、纔かの五欲快樂にはだされて、一生空しく過きて、永劫惡道に落ちんこと、憐れむへき者なり。在家の人は、如何にも賢しといへとも、加樣の事を思ひ知らす、まして修行用心、坐禪工夫して、今生にて一大事を悟らんと思ふ人、百千人の中に一人も亦稀れなり。佛力業力に勝されは、縱ひ佛菩薩の慈悲方便深くとも、我か造れる罪の惡業重からん人をは、總て〳〵助くへからす。只みつから進み勵ますんは、爭てか生死を截斷すへき。抑も如何なる方便を以て、生死を截斷せんとならは、先つ大願力大信力を起して、十二時中、萬緣萬境、一切の事をなす處につきて、如何なる物か主人と成りて、加樣の事を成すそと窮め看よ。譬へは百萬の軍陣中へたた獨り懸入りて、直に大將首を取りて出てんと思ふか如く、猛く志を勵まして、直に進んで用心せは、必ず無量億劫の生死の朝敵を亡して、天地に先つ底の我か本來淸淨圓滿大覺の法王急に現前して、世間出世間の事を成就し、大自在三昧を得て、生々世々大安樂なるへし。疑ふへからす。

示二病者一

我か此の身心、本來生死を離れたり、生死を離れたるか故に、更に又一切の道理なし。縱ひ一旦父母の緣によりて、地水火風假りに合するに似たれとも、不生の生なれは、實に生ありと思ふへからす。又時節到來して、四大分離するに似たれとも、不死の死なれは、實に死すると思ふへからす。只た生死去來、是非善惡、一切萬法、夢幻の如し。この故に金剛經に云はく、一切有爲法。如二夢幻泡影一。如レ露亦如レ電。應レ作二如是觀一と。たたかくの如き理を信して疑ふへからす。縱ひ病苦死苦有りといへとも、此の如く正信を守りて一念を動せす、病に任せ苦痛に任せて、何とも擬ひ計る事なくして終るへし。もめ〳〵今生にて佛法を明らめされは、後の世何とや成らんすらんと疑ひ恐るへからず、只た何とも思はぬ心、即ち佛法なり。信せされは、輪廻の業となる。直に信すれは、即ち生死截斷の處なり。疑ふ事なかれ。

示二在家人一

一切の道理は、己れを存する時起り、己れを忘るれは、更に何の道理かあらん。たた是れ物に任せ緣に隨ふのみなり。是れ凡にあらす聖にあらす、又是もなく又非もなし。天眞自在の受用、何の善惡をか撰はん。是の故に智者は物に任せ己れに任す。愚人は己れに任せ物に任す。又逆行順行、天も計る事なしと云へり。若し道箇の道理を信せは、見聞覺知、蹤跡を停めす、去來生滅、畢竟不可得なり。信心薄きに依りて人に惑せられ、境に轉せられて、主と成り得ること能はす。動もすれは無量の分別を起す、實に是れ愚人迷倒の妄見なり。持論するに堪えす。須らく身命を惜まず、猛く精彩をつくへし。忽然として一笑せは、天廻り地轉せん。疑ふ事なかれ。

答二宰相中將殿問一

問ふ、紛飛の念おこる處に於て、如何か工夫を成すへきや。答ふ、夫れ紛飛の念と云ふは起る物もおこすものもなし、只た眼病の者の空裏の花を見るか如し。此の花は眼よりも出てす、空裡よりも生せす、只た眼に病あるによりて、妄りに空花の相を見るなり。紛飛の念も亦復たかくの如し。是の故に是れを妄見と云ひ、又は妄想と云ふ。眼病なけれは妄見なし、分別なけれは妄想おこらす。たた一切迷倒の見は、妄心の分別によれり。妄心起らされは、一切の心境、皆是れ正眞の大道なり。此に於て直下に徹し去らは、許多般なし。若し又然らすんは、只た紛飛の處につきて、直下に是れを窮め見よ、必す透脫の時節あるへし。

假名法語 終

一休假名法語

解題

この假名法語は、一休禪師が婦女子などのために垂示せられしものにして、その文平易を旨とし、かつ話頭公案の示しやうをも云るされたり。なほ此書の外にも、禪師の作といひ傳ふる假名書の垂示などあれど、後人の鑽入などのあるにや、あながちにうけかひがたきふし多きをもて、みな捨てゝ取らず、たゞこの法語と骸骨としのみをさめつ。

高僧傳に據るに、禪師、名は宗純、一休その號なり。また別に狂雲子、夢閑、瞎驢などの號あり。母は藤原氏にして南朝管纓の女なり。後小松天皇のために幸せられて娠みけるが、もゝあゝりて宮をいで、禪師を民間に生みき。禪師わづかに六歲にして、安國の像外鑑禪師に投して童子となり、具戒をうけてのち、風騷を東山の惟哲樊にまなび、敎乘を壬生の清叟仁に聞きしかど、すてゝ西金寺の謙翁に參す。謙翁の世をすつるにおよんで、江州堅田にゆき、華叟曇和尙にまたがひ、洞山三頓棒の因緣を究めて大悟し、遂にその印記をうけぬ。文明十三年十一月二十一日、座につきて、

須彌南畔。誰會二我禪一。虛堂來也。不レ直二半錢一。

の十六字を書し、從容として蟬蛻す。壽八十又八。法臘八十又二。法弟故舊ら、全身を昇いで慈楊の塔にうづむ。

禪師は、跡を混して威儀にかゝつらはす、つねに朱函の木大刀を佩いて街にいづ。人その名を問へは、今の世の智識と稱する者、外眞にして內僞なり、恰もこの木刀に似たりと答ふ。また好んで尺八を吹き、和歌を詠み、頗るその言を恋にしたるものゝ如し。されど寺のすたれたるを興し、緇素をさとし誘ひ、その功はなはた多かりき。

假名法語

一休禪師

〔親彼久遠云々〕久遠は久遠の過去世を謂ふ、二句は古今一時の意なり。

先づ御こゝろもちと申すは、朝夕佛法に御油斷なきことにて候。古へ今にいたり、浮世のあり樣、御夢のごとくにさへ思召され候へは、なに事も御こゝろのとまる事御座候まじく候。爰を佛御觀念ありて、法花の文に親彼久遠。猶如今日と御のべ候。此の文の心は、かの久しく、遠き事を見給ふに、同じくけふの如く見給へとの御事にて候。天地ひらけはじまりしより以來かはる事なしと、よろずの事をさとり給ふとの御事にて候。然らばさのみふかく御不審有るまじく候。佛法と申すは、執着をいましめ給ふ、さらに心をとゞめても、その甲斐なきことにわざと見まゐらせ候を、まづ禪家にもちゐ申し候。かゝ樣に申候事、せうこなく候へば、いかゝと存じて、むかしの事を大かたひき申し入れ候。都に夢窓國師とて日本にかくれなき御僧ましく〳〵ける、其の頃は尊氏將軍の御代也。かの夢窓國師さとりのうたに、

夢の世に夢のごとくに生れきて露と消ねなん身こそやすけれ

夫れ人間あり様、萬事とじまる事なし。もとより生のはじめをしらざれば、死の終をわきまへず、やみ〳〵ばう〳〵として苦の海にしづむ也。こゝを佛のあはれと思召て、色々の御方便にて衆生をすくひ給ふ。されども人間のこゝろふだうにして、惡道へあゆみをすゝめ、よきかたへは心すゝみかたく、いたづらに光陰を送り、六道あはれみの業果たえず。たま〳〵をしへにしたがふといへども、名利の善をなす事ばかり也。名利と申すは、其の身の名をあげ、人にほめられんとおもふ心をたねとして、堂塔を建立し、ときの富貴におごれり。かくのごとくの人を、佛はふかくきらはせ給ふ。まことの道は、萬事法度をろむかず、世にしたがひて、けんばうなる人を、佛道にじやうじもの大と申す也。御としもはやくれすぎさせたまへば、なにの御望御座候はんや、殊更地獄の話頭をもしるしめされ候へは、もく水のごとくに御こゝろもたせ給ひて、御ひねのうち何ごとも御座なく候べば、世尊御一体の御身にて御座あるべく候。こゝを佛、三部經に己心の彌陀、唯心の淨土とのべ給へり。此の文字の心は、おのれがこゝろ彌陀、たゝ心の淨土と申す也。然れば十萬億土とは御ねがひあるまじく候。

佛とは何をいはまのこけ莚たゝしひしんにしくものはなし

この歌のごとく御じやう候へば、何事も佛心と見まゐらせべく候。古へ舟田の御はうじやうにて、程なく宗建をはじめまゐらせ、人々すぎやかせ給ひて、夢とはおはし召れず候や。申してもつくしがたきは、かやうに御けなげに御入候て、わたくしもながらへ、佛法の御事ども申しあげまゐらせ候事、他生の緣ふかしと存候。因果經に自身誰ならんと佛も御のべ候。又母にて候ものは、七十六にして去年相はてられ候。心昌辭世のうた、

世々ことに見えつかくれつすむ月の替はらぬ色をたれかしらまし

この歌を口すさみて、其の後はそれさまへ參りて、御菩提の心をすゝめ申し候へとくりかへし申され候ひつる。かの御めいをそむきがたく存候て、たび〳〵まゐり候ひつる。母にて候ものゝ事、おもひ出し參らせ候へば、一しほそなたへまゐりたくこそ候へ。はやそれさまの御覺悟も、大安樂の道に御心づき候へば、めでたく滿足いたし候。御なくさみなどには御看經もしかるべく候。御心つくしては、努め努め御さた候まじく候。大般若の文に一切不行を佛の行とすと御座候。爰をもつて、むかしさる知識の歌に、

あち樂や虛空を家と住なして心にかゝるぞうさくもなし

いづるとも入るとも月を思はねば心にかゝる山の端もなし

〔一切不行〕 不行は無爲といふほどの義にて事物に執着せざるの行を云ふ。

是れは生死にとりあはぬところの歌にて候。よく〳〵御工夫あるべく候。又弘法大師の御辭世に、

今ははや後世の勤もせざりけりあうんの二字のあるにまかせて

いづれもさとりの人は、かやうにひまあきしやうに申しおかれ候。又慈鎮和尚のうたに

かりの世にまた旅ねして草枕もめの世にまた夢をみる哉

ひきよせてむすべば草の庵にてとくればもとの野はら成けり

是れは色相のうへをかろく思召候べとの心にて候。いつの日いつのとき、御大事きたりまかりぜ候とも、御心の内に何事も思し召候まじく候、病難もしいたくせめ來るとも、そのくるしみにまかせて相はて候へと、大唐の黃檗禪師の傳心法要と申すにもかきおかれ候。日本にては聖德太子、病難のとき、此の歌あそばされ候。

浮雲はいくへもかゝれ空に消え月はくまなきひかりなりけり

この歌の心は、何事もとりあひ候はで、無念無想の所をもちゐ候へとの御事にて候。又由良の開山のうたに、

何ごとも夢まぼろしとさとりては現なき世のすまひなりけり

〔由良の開山〕法燈國師のことなり。名は覺心、心地と號す。永仁六年十月十三日、壽九十三にて示寂す。

〔見理受用〕見理は解、受用は行なり。

〔檀林皇后〕御諱を嘉智子と申奉る。諱要を義空禪師に奉れ玉ふ。

〔千代野〕泉涌寺

この歌の心は、如何なる大王皇后の外上下の人々かなもみ給ふは、死の道にて候。こハをさ〳〵御覺悟候へば、すなはちあんようのしやうぜ九はんの蓮華にまぬはれて、大安樂の御身となりぜたまふべし。大世尊の御說法にも、女人成佛のかたき事をかくとき給ふ。かやうの事を聞しめして、御道心すてさせ給ふまじく候。そのことわりをあら〳〵申上げ候。男子に生をうけ申し候て、めでたく成佛すべきにあらず、ことに龍女は八歲にして三國に名を殘し申し候、御經にもほめ給ふ。しかれば女人こそ猶ほも御たのもしきことにて候へば、成佛とてべちにたつときひかりもはなち、奇特をも見せ申し候事は有るまじく候。御悟にて、御心中にこれぞ御不審候はぬと思召候事御坐候を大悟と申す事に候、佛御入滅の後、祖師先德のさたし給ふ御法にも、見理受用の二つにて御入候。さんがくをも御大儀に思召まじく候。其の故は祖師のいろ〳〵苦勞し、朝夕のさやう跡をなし、五戒五百戒を立てられ候事も、たゞ一身のさたにて御いり候。御女房衆の御さとりありしは、嵯峨天皇の后檀林皇后也。其の外人の數をしらず。美濃國は興性寺の千代野と申す女さとりて候、このうたに、

とやかくとたくみし桶の底ぬけて水たまらねば月もやどらず

の開題如大羅尼なり。

かやうの事をきこしめして、けふよりは禪宗のさんがくに御心をつくし給ふべし。がいふん御てをひき申すべし。まづ御くたし心を思召立、後の世を御たすかり候はんと、御覺悟候へとすゝめ申す者は、なにものぞや。又かやうに不審をかけ申す者候は、なに者ぞや。目に見えずしてさまゝ〳〵なり行く故に、六道輪廻のたねとなる事を、佛の三毒と說き給ふ。一にけんどん、二に怒りはらたつ事、三に愚痴の心、此の三つをたもたれ候へと、古へ今に至るまでしめす也。是れをしらざれば、愛執の心ふかき故に、人をねたみそしりめりはうどんして、たかひにくるしみの涙をなかし、袖をしぼる也。これみな一心のわざ也。久しくとをき事を觀じ、物をわすれざるも一心也、四百四病をうけ大苦をうるも一心也、雪霜のさびき事をいとひ、大らんのくとなるも心也。されば此の心一つを取り留めかたければ、六道のでうたえず、生に生をかさね、死に死をつぎ、ちきしづむのみ也。此の心といふものは、いかにとはん七申すに、かげかたちもなきもの也。かたちなきものに、きえうせず、然れば生もなく死もなし。てゝを佛とも金剛の正躰とも、のべ給ふ。無相にして有なるが故に、てらいもきとかまる事なし。住所更になし。色相の生滅にあづかるにより、無常とのべき、又は大死とのべて、是れをおはれみかなしみ、

定離と申す也。かやうに申し入候は、御心かたちなき所を御覽せられ候へと申す事にて候。なに物か色相をさつて、佛神とも鬼神ともなり申すべく候や。淨土祿土の事、愛をもつて御分別あるべく候。御不審晴れ申し候は、一さよひの雲千里萬里の外にはらひ、一つとして御心とゞまる事あるまじく候。愛を大正覺と申す也。てゝをいたりて色もなく、相もなく、聲もなく、一念もなし。是れによりて心經にも、色即是空。空即是色と說き給ふ。一心の外にべちの物なし。本より經もなし。心は無始無終にして住所なし。愛を開いて、天地草木の畢竟してみる法はあさく候。見ざる法はふかし。はやく生死のきづなをはなれて、大解脫の御身とならせたまふべし。

○御工夫にも、古則話頭、御不審はなれ候よし仰せられ候、尤に候。むかしの御僧たちあつめ給ふなぞへを、わら〳〵かなにて御なぐさみにしるしまゐらせ候。

○本來の面目のしめしやう、不思善不思惡、未生以前、いづれの所より來る。まづは如何なるか是れ本來の面目とばかりもぞひ申し候。此のことばをうけとりて、三十日五十日、乃至一年二年、工夫をとげてあれと申す樣は、わが身のしやうの所は、佛もかづれの祖師もしられざる所候。佛祖不思議の所是れにて候と申し候へば、此のうへにもものとも

て、いろ〳〵大事あるよし長老申され候間、又これを工夫して申すやうは、天地開闢より此のかたいしられまじきことともようず、爰にて長老尤のよし申され候。かゝるやのちにをしへに出つて、其の語をするなり。大かた此の分に候。

○栢樹子の話頭とて、如何是祖師西來意といふ、爰にて祖師のいはく、庭前の栢樹子とたふ心を參せよと申すに、しかうしてがくしやのいはく、祖師の西來、庭前の栢樹子もおなじ心にて候、たいてんねんの理にて候、前後しらぬ心にて候とて、ぢやくごに極はなはく、おぢろはまかれりと申す。又色相分離してのち、いかにと問ふ。極なはからず、おぢろまからずと申す。三度四度申しかへして、是れを至極の道理と申す。是れは柳はみどり、花はくれなゐの心也。此の極意はといふ。こんぽん無相なる所をしらんため也。次かた此の分に候。

○萬法不侶といふ古則、よろづに侶たらざる人、これ何人ぞやと問ふ。かくしや耳をそばだて、是れをきゝ、とし月へて申すやうは、わが一心は萬法の外にて候、躰も色もなく候、ものにくゝまれぬ物にて候、しかも天におほひ、地にみてり。然れば左右もなく、脚の下ぢんゝとして有なる故に、法界一心とくはんして、大こくの龐居士、名をのこす。

是れは目に見ぬ物のある所を見出して、かくのごとく申すなり。地獄此のときやぶれ申じ候。心御入候也。

○本有圓成の事、本來の佛、なんのえんをもつて、めいたらの衆生となりたるぞや。學者工夫して申すやうは、こんぽんは無念無想の佛なるを、衆生の色縁にひかれて、かやうに寒うん苦樂を得る身となり來て候。爰にねんをとゞめ、此の界に輪廻なくは、本有の佛性になるとて、此のとき種々さまりやうとなし、さまゝことばをつくし、せんぐんしようと見る也。

○誰ぞの話の事、釋迦彌勒はかれが奴、彼はこれたぞ、このさとりをかけてとし月へて、老僧の前へ出で、坐上に和尚なく眼前に我なしと申して、一味平等のところ何か差別わらんや。然らは奴婢なし、我もなし、上下元來佛も衆生も一躰ならずや。おはかた此の分のこゝろにて候。

○いかなるかこれ地獄としめされて、とし月をへて工夫して申すやうは、がんせんこれ地獄と申す。又とふ、何事に地獄ぞ、色相是れ地獄なり、色相分離してはいかに、眼光落地すゝこと見えず、ちるに因て、種々の語をかけ、大りやく無に落ち候、あさましく候。

○孤帆未ㇾ挂時はいかん、かくじやのいはく、小魚大魚を呑む、又かけて後いかん、大魚小魚を呑む。この心は船の帆かゝりてあるときは、大なる魚かちいさき魚をのむといふ也。帆のかゝらざるときは、ちいさき魚が大なる魚をのむといふ心也。此の心は諸宗に少しもじらず、禪家の大事也。有ると申さんとては、よに有事るを吐く語をかくし。又無なる事を申さんとては、世になき事を吐いて心をかくして、生死思推の處をなつかしく申さんため也。御理御座候、ちきに申すべく候也。

○臨済の三要三玄と申す事の候。かやうの事は申しつくしがたく候。天地の間に三つもとむ、三つくろしと申す事何そや。是れをしかも三寶と申す事あり。古德の心は、父と母とわれと、これ三つの寶也。一つもかけては物ならず候。三玄と申すは、みなもとの無性は、くろきかたち也。出生して萬の事をおこなひ候、爰に大秘密の事あり、ようの字これすなはち大事なり。

○大こくの南泉和尚、此の猫見をきる事は、大衆こたへざるもろ也。趙州爰にきたりて、草鞋(わらじ)をとつてかしらへあげ、ころもをかはにあて、和尚のまへに出る。和尚此のとき猫をきつて後悔す、趙州はなはだもつてめんぼくなるか、第一に色相の逆意をきる也。

迷の衆生色心共にきる事をえず、たまたまきるといへども、鈍刀なれば、ばなるゝ所なし。文殊の利劍は、ふたいひつがすと申す心にて候。

○臨済の四喝(かつ)とて、人の死しなる所にいたりて喝す。此の心たしかに心得たる僧まれなり。たゞじやうじものそうと申すは、ほんぶんにおとして、これをしごくす、古人の見理此の所におらす、すでに臨済は、命根本不絶といへり。しかれば當時の僧たち、大なるおやまちなりとは、みがくにして衣をかへ、人のまなこをつぶして、布施物をとり、おのれが生々世々のほのほをまねく、あはれむべきもの也。

○百丈野狐の話の事、大修行底の人、かへつて因果あるやまたなしやと問ふ。こたへていはく、因果におちずとなり。此の報によりて、五百生野狐身に墮して候。因果は歴然あるものと申すひねに存じ候。未だ悟らずして、聲聞の見解にて、因果はなしとこたへたる事にて候。いづれもべちにふかき事御座候はんとおぼしめし候まゝしく候。此の不昧因果と申すは、因果にくらからずとの事也。不落因果とは、おちずといふ心にて候。此の話頭のまなこは、生々世々の事を狐によせてとかれたる所、大智なるもろに、大智禪師と申す也。一佔大國にてひろくく佛道修行の事、れんくに申上げまるらせ候。又申す

太まよふときは、火をもつて火をけさんとし、水をもつて水をかく、大海をいさごとも つてうめんとし、土を負つて山をかこはんとす、斯樣のおろかなる事は、人々佛道に心の遠さかる事萬里をへだて、手には百八煩惱のきづなを斷かんしやうりやうしりやうのたゝりを見いだし、石塔率塔婆に奇特のありと思ひ、あつさをかけて、死人どこと葉をかはすことをいひて袖をしぼり、もろ〳〵のきやう、もろ〳〵のろくの道理をうしなひ、佛菩薩にまうこをかけ、きりをそむき、いよ〳〵いもうぢもくのごとく、竹のうちより天をはかる者は、生々世々うかふ事有るべからず。西方非レ西。東方非レ東。無三極樂。無三地獄。淨土非三淨土。けんどんをきらずして、しかも又じかも外の大空三昧にして、大蓮華のうちにあり、たゞ正直慈悲きやう無さん也。念をきつてしかもまたきらずい是れを通方自在の僧と申すなり。唐國我朝にいたり、上下萬民佛道をねがふ事、何宗が宗といろ〳〵たてはありといへども、其のみなもとは、いづれも極樂淨土にいたり、地獄におつまじきとの方便也。此の淨土といふは、いづくなれば、我が心のうちにあり、又地獄はいづれぞなれば、だいし我心の内にあり。ある人、遠磨太師にとふ、地獄とはいづれの所ぞや。こたへていはく、汝が心中に貪嗔痴の三ぞ

くこれ也。貪嗔痴とは、貪欲とてよろづの愛念執着の欲を申す也、嗔とは、はらをたつる念を申す也、痴とは、愚痴とて、なに事も心のまゝになき事をなげきかなしみ、我とわがこゝろをなやます事を申す也。此の三ぞく、かくのごとく善惡のはうを造りし出し、地獄におつるなり。地獄とてべつに餘の世界にある事にてあらず。又とふ、極樂とはいづれの所ぞや。こたへていはく、極樂淨土とてはかにあるべからず、汝が心中の三毒をはらふ所、すなはち淨土なりとこたへ給ふ。佛と衆生とへだてある事なし、まよひの衆生此の貪嗔痴我が本心にてなき事をしらず、此の一念愛し憎むによりて、地獄におつる也。此の三ぞくをなをといして、八萬四千の煩惱おこる也。これすなはち地獄なり。佛といふも、さとるといふも、名はかはれども、おなじみち也、我が本心をさとる人を、すなはち佛となづくる也。然れば我が心の外にべつに佛なき事をよく心得て、このうへをつねに心にかけ御工夫あらば、みちに御あたり候はん事、うたがひあるべからず候。現在の果を見て、過去未來をしると御經にとかれ候。此のこゝろは、いまこゝに惡心惡逆を心にわすれずして、いまそのこゝろを取出だしおこなふ事也。今此の生にて、その心を忘れずは、來いまそのこゝろを未來へひきて、人にむまれいづべきその事也。佛は

よろずに自在を得たりといへども、見あたらざる事あり。一には無縁の衆生は度する事あたはず。二には衆生かひをつくる事あたはず。三にはさらでうてんする事あたはず。前世の業因によりかんをくしたる善惡のごつはうなり。かやうのけつでうの業報をは佛菩薩の身にても、てんずる事かなはず。かたちの善惡、福德の小大、壽命の長短、しもしやうのかうゐの事、是等皆前生の業因にたへたるでうごう也。慈悲は、福德の家にびまれ、けんどんは貧苦の身にいたる、柔和忍辱の心は、すがたをよくびまれ、禮拜はかけにびまるゝ、殺生をしたる者は、短命にびまるゝ、かくのごとくいづれもみな前世の惡因により、惡果を得たる人、此の理をしりぬと、世にも惡行をつくらずは、來世は

假名法語 終

骸骨

一休禪師

うすすみに書く玉章のうちにこそ、万法ともに見もるなるへし。それ初心の時坐禪を專らになすべし。もろ〳〵國土に生れくるもの、一度ひなしくならすと云ふことなし。それ我が身もいまたなり。天地國土本來の面目もいまたなり。みなこれ虛空より來るなりけり。かたちなき故にすなはち、これを佛とはいふなり。佛心とも、心佛とも、法心とも、佛道とも神とも、もろ〳〵の名はみな是れこなたより名くるなり。かやうのことを知らずんは、たちまち地獄には入るなり。またよき人の云めしによりて、二度かへらざるは、冥土さやくさやうのわかれ、またしさうはきも流轉三界は、いよ〳〵ものうく心さして、故郷を足にまかせてうかれいて、いづくをさすともなく行く程に、知らぬ野寺にいりかゝり、稲むさぼるふしてるも、日も夕暮になりぬれは、暫しかりねの草枕、結ぶたよりもなきまゝに、あなたこなたを見まはせは、みちよりはるかにひき入りて、山もと近く三昧原とおぼしくて、墓とも其の數あまたある中に、ことのはかにあはれなる骸骨堂のうしろより、立ち

（流轉）輪廻と同し。

〔五十年の説法〕釋尊三十成道の時より八十入滅の夕に至るまで中間五十年の説法を云ふ。

出で日く。[illegible]

世の中に秋風たちぬ花すゝきまねかはもかん野べも山べも

[illegible]いかにせん身をすみそめの袖ならん空しくすこす人の心を

一切のものの一度むなしくならずといふ事あるべからず。むなしくなるを本分のところへかへるとはいふなり。壁にむかひて坐するとき、縁によりて起る念は、みな實にあらず。それ五十餘年の説法もみな實にあらず。人の心を知らん故なり。かやうな苦を知る人やあるとて、佛堂にたちよりて、一夜をおくるに、常よりも心細くして、うちぬるこゝろなかりける。あか月かたに、すこしまどろみたる夢のうちに、堂のうしろへ立出づれば。骸骨多く群れ居て、この擧動おのゝ〳〵おなじ[illegible]からず。たゞ世にある人の如し。あなふしぎの事やと思ひ見る程に、或る骸骨近く歩みよりて曰く。[illegible]

思ひ出のおろかにもあらずすき心けは夢とぞなれおちきなの身やゝ[illegible]

佛法をかみやはとけとわかちなはまことのみちにいかゝいるべき

法はしけにいきの一すちかやふはと野へのかはねもよそに見えける

さゝ親しみよりてなれ遊ぶに、日比我人へだてける心もうせはて、去かも常にあひともなひける骸骨、世すて法を求むる心ありて、あまたのわかちを尋ね、淺きはりふかきに入りて、我が心のみなもとをあきらむるに、耳にみてる物のは秋風のおとゝまなこにさへぎるものは、けゝ月のまくらにのこる。それ〳〵いつれの時か夢のうちにあらざる、いつれの人か骸骨にあらざるべし。それを五色の皮につゝみてもてあらかふは愛をと男女の色もわれ。いきたる身の皮破れぬれはその色もなし、上下のすかたもわかす。たゝ今かしつきもてあそぶ皮の下に、そのかいてつをつゝみて、うちたつをおもひて、此の念をよく〳〵こうえんすへし。貴きも賤しきも、老ひたるもわかきも、更にかはりなし。たゝ一大事因緣を悟るとき、不生不滅の理を知るなり。

なきあとのかたみに石かなるならは五りんのだいにちやうすきれかしなに事にあらおそろしの人のけしきや。

くもりなきひとつの月をもちなからうきはのやみにまかひねるかな

まことをさておはしめし候らん、いきたる身の皮破れぬれは、人ことにかやうなる、御身もいかはとゝもなかちへさせ玉ふべきは、かなかなく候。

君か代の久しかるへきためしにはかねてそうるし住よしのまつ

〔一大事因緣〕生死の原由を云ふ。

我ありと思ふ心をすてよ、たゞ身のうき雲の風にまかせて、こなたへよらせ玉へ、いつまでもおなしとしまて、なからへたく候へ、さてとにさて思し召し候はん、是れも同じ心にてこそ候へ。

世の中はさもとろまてみる夢なれはみてやおとろく人のはかなき

定却はいのるかひなき事にてこそ候へ。一大事より外は何事も心にかけさせ候まじく候。人間はさためなきことにて候へは、今はじめておとろくへきにも候はす。いとふへきたよりなちは、世の中のうきは中〳〵うれしかりけり。

何とたゝかりなる色をかさるらんかゝるべしとはかねてしらすや

つゝもとの身はもとの處へかへるべしいらぬところを尋ねはしすな

なれもみな生死も知らすすみかなしかへらはもとのつちになるへし

人間わけのぼるふもとの道はおほけれとおなしたかねのつきをこそみれ

行末にやせをそこともさだめねはふみまよふへきみちもこそなき

たゝ夫はしめなくおはりもなきに我かこゝろうまれ死すると思ふへからす

ゆゝしきはかすれはおもひもたらぬこゝろかなをさへて世をはすつへかりけり

雨あられ雪やそはりとへたつれとときくれはおなし谷川の水

ときおける心のみちはかはるとも同し雲居ののりをこそみれ

ちつめたゝみちをは極のおち葉にて人すむやとをしらぬはかりに

はかなしやとりへのやまの山おくりおつる人とてとまるへきかは

世をうしと思ひとりへの夕けふりよそのあはれといつまてかみん

はかなしやけさみし人のおもかけはたつはけふりの夕くれのそら

あはれみよとりへの山の夕けふりそらさへ風にをくれさきたつ

やけはいうつゆはつちとなるものを何かのこりてつみとなるらん

みとせまてつくりしつみもろともにつゐには我れもきえはてにけり

世の中のさためことなるへし。けふこのころしも、かやうのあへなきことのあるべしと、かねて知らすして、驚く人のはかなさよと思ひて、我か身のあるへきを問はれけれは、或る人申されけるは、このころはむかしにかはりて寺をいて、ひにしへは道心をおこす人は寺に入りしか、今はみな寺をいつるなり。見れはぼうすにちしきもなく、坐禪をものうく思ひ、工夫をなさすして、道具をたしなみ、坐敷をかざり、我慢多くして、たゝころも

をきたるを名聞にして、ところもはきたるとも、たゝとりかへたる在家なるべし。けさころもはきたりとも、ころもは縄となりて身をしばりふけさはくろかねのしもくとなりたい身をうちさいなむと見えたり。つら〳〵生死りんゑのいはれをたつねるに。ものゝ心のちを殺しては地獄に入り。ものをおしみては餓鬼となり。ものをしらすしては畜生となり、はらをたてゝは修羅道におつ。五戒をたもちては人に生れ、十善をしやうしては天人にむまる。此のうへに四聖ありこれを加へて十界といふ。その一念を見るに、かたちもなし、ちうけんも住所なく、きらいすゝへき所もなし。大そら雲の如し、水の上の泡に似たり。たゝ起るところの念もなきが故にい爲すところの萬法もなし。念と法と一つにしてむなしきなり。人々のふしんをしらぬなり。たゝへは人の父母は火うちの如し、かねは父、石は母、火は子なり。これをはくそにたてゝ、薪あるうちの縁つくるときはきもるなり。父母あいあそぶとき火のいつるが如し。父母もはしめなきが故に、遂には火のきもる心にうするなり。空しく虚空より一切めものをはぐくみ、一切の色をいだす。一切の色をはなれては本分の田地とはいふなり。一切草木國土の色は、みな虚空よりいつるもゑに、かりのたとへにはんぶんの田地とはいふなり。

（四聖）聖聞、緣覺、菩薩、佛これを四聖と云ふ。

さくら木をくたきて見れは花もなし花をは春のそらぞもちくる
はしなくて雲のうへまてあかるともくゝんのきやうをたのみはしすな

瞿曇五十餘年の説法をきゝて、この教のまゝに修行せんとすれは、瞿曇最後にのたまふやう、はしめよりおはりにいたるまて一字も説かすといひて、かへつて手づから花をさしあけさせ玉ふを、迦葉かすかに咲ひしとき、瞿曇のたまふやう、我にまさしき法のたゝなる心ありとて、花をもるしけるを、いかなるいはれそやと問ひけれは、瞿曇の玉ふやう、我五十餘年のせつ法は、例へはおさあいものを抱かんとするとき、手の内にものある事をいひていたくか如し。我五十餘年の説法は、この迦葉をまねくか如し。此の故につたへ玉ひし所の法、かのおさあいものをいだきとりたるところなり。然るにこの花は身をもてなして知るべきにあらす。心にもあらす。口にいひても知るへからす。此の身心をよく心えへし。もの知りたる人とはいはるとも、佛法者とはいふへからす。此の花は三世の諸佛の世に出て一乘の法とは、この花のことなり。天竺の二十八祖、唐土の六祖より、このかた本分の田地よりはかによのものはなし。一切のものはしめなきもゑに、大といふ。空虚より一切の八識をいだすなり。たゝ春の花の夏秋冬、草木の色も虚空よりなすなり。また四大

（瞿曇）梵語、此には純淑又は地最勝と云ふ、人類の中に於て此の族最勝なるの謂なり、今は釋尊のことを云ふ。

（八識）一に眼識、二に耳識、三に鼻識、四に舌識、五に身識、六に意識

七に末那識、八に阿賴耶識これなり、末那は梵語、此に意と云ふ亦相續識とも名く。阿賴耶は梵語、此に藏識と云ふ。

といふは土水火風の事なり、人ごとにこれをしらず、いきは風、あたゝかなるは火、身のうるほひて血氣のあるは水、これをやきもうつみもすれは土になり、それもはじめなきか故に、とゝまるものひとつもなし。

なに事もみないつはりの世なりけり死ぬるといふもまことならねは

みなゝゝまよひのせなをよりは、身は死ねともたましひはしなぬは大なるあやまりなり。悟る人のことばには、身もたねもひとつにしぬるといふなり。佛といふも虛空の事なり。天地國土一切の本分の田地にかへるべし。

一切經八万法をうちすてゝ、此の一まきにて御心得候へし。大安樂の人に御成候へし。

かきおくも夢のうちなるしるしかなさめてはさらにとふ人もなし

康正三年四月八日　　虛堂七世東海前大德寺一休子宗純

骸骨

終

不動智神妙錄

解題

不動智神妙錄は、東海の澤庵禪師が柳生但馬守宗矩のために垂示せられたるものなり。按するに禪師、その名を宗彭といひ、澤庵と號す。但馬國出石の產にして、三浦介義明の遠裔なり。はじめて十歲にして、郡寺に投して淨業をまなび、十五歲におよんで、宗鏡寺の希先和尙を禮して得度す。のち春屋國師に從ひ、いくばくもなく去て一凍和尙に參し、遂にその印記をうけて大德寺に出世しぬ。この時にあたりて、禪師の道譽いと高く世にさわきければ、豐臣秀頼、細川忠興ら、しきりに招きしかども、みな拒みていてず。後水尾天皇ふかくその道行を嘉して召し玉ふ。はじめは辭ひしが、遂にねもころなる敕に應して、宮に入りて心要を說きぬ。當時諸侯の禪師につきて敎をうけたるものいと多きが中に、柳生宗矩の歸崇もとも厚し。また、その薦によりて德川家光のために招かれ、家光の東海寺を剏ひるにおよんで、その開祖となりぬ。けだし禪師の家光および宗矩におけるは、明惠上人の北條泰時に、夢窓國師の足利尊氏兄弟におけるかごとくならむ。正保二年十二月

十一日、悠然として坐化す。壽七十又三。法臘五十又七。門人等、その遺命にしたがひて東海寺の西北にをさむ。

柳生宗矩は、もとより劍道を以て天下に名あるもの、もゝに禪師その譬喩を劍道にとり、句々玄を闡き、洵に智神妙錄の名にそむかず。能くこの垂示のごとく實究せば、智神を啓發し心膽を鍛錬することを得べきか。なほ文の終に、内々存寄候事を諫めよとの宗矩の請によりて、貴殿の弟子を御取立被成にも、か樣の事有之由、苦々敷存候と喝破し、亂舞を好み、また挨拶のよき大名衆をは、御前(家光)に於てつよく取なすを思案せよと諫めたるがごとき、禪師の眼中に權貴なく、善をすゝめて忌まざるを見るべし。

不動智神妙錄

東海澤庵禪師

〔五十二位〕佛道修學の階級の名目にて、即ち十信、十住、十行、十回向、十地、等覺、妙覺これなり

無明住地煩惱

無明とは、明になしと申す文字にて候、迷を申し候、住地とは、止る位と申す文字にて候、佛法修行に五十二位と申す事の候、その五十三位の内に、物毎に心の止る所を住地と申し候、住は止ると申す義理にて候、止ると申すは、何事に付ても其の事に心を止ると申し候。貴殿の兵法にて申し候はゝ、向ふより切太力を一目見て、其のまゝにそこにて合はんと思へは、向ふの太力に其のまゝに心が止りて、手前の働が拔け候て、向ふの人にきられ候、是れを止ると申し候。打太刀を見る事は見れども、そこに心をとめず、向ふの打太刀の拍子に合はせて、打たうとも思はず、思案分別を殘さず、振上ぐる太刀を見ると否や、心を卒度止めず、其のまゝ付入て向ふの太刀にとりつかば、我をきらんとする刀を我が方へもぎとりて、かへつて向ふを切る刀となるべく候。禪宗には、是れを還把二鎗頭一倒二刺人一來と申し候、鎗はほこにて候、人の持たる刀を我が方へもぎ取りて、還て相手を切ると申す

心にて候、貴殿の無刀と被仰候事にて候。向ふから打つとも、吾から討つとも、打人にも打太刀にも、程にも拍子にも、卒度も心を止めば、手前の働は皆抜け候て、人にさられ可申候。敵に我が身を置けば、敵に心をとられ候間、我が身にも心を置くべからず、我が身に心を引きしめて置くも、初心の間習入り候時の事なるべし、太刀に心をとられ候。拍子合に心を置けば、拍子合に心をとられ候。我が太刀に心を置けば、我が太刀に心をとられ候。これ皆心のとまりて手前ぬけ殻になり申し候。貴殿御覺可有候、佛法と引當て申すにて候。佛法には、此の止る心を迷と申し候、故に無明住地煩惱と申すことにて候。

諸佛不動智

と申す事は、不動とは、うごかずといふ文字にて候、智は惠智の智にて候、不動と申し候て、石か水かのやうに無性なる義理にてはなく候、向ふへも、左へも右へも、十方八方へ心は動き度きやうに動きながら、卒度も止まらぬ心を不動智と申し候。不動明王と申して右の手に劍を握り、左の手に縄を取て、齒を喰出し、目をいからかし、佛法を妨げん惡魔を降伏せんとて、つゝ立て居られ候姿もあの樣なるが、何國の世界にもかくれて居られ候にてはなし。容を以佛法守護の形をつくり、體をはこの不動智を體として、衆生に見せたるにて候。一向の凡夫怖れをなし、佛法に仇をなさじと思ひ、悟に近き人は、不動智を表したる所を悟り、一切の迷を晴らし、即ち不動智を明らめは、此の身則ち不動明王程に此の心法をよく執行したる人は、惡魔もいやまさぬなどと知らせん爲めの不動明王にて候。然れば不動明王と申すも、人の一心の動かぬ所を申し候、我が身を動轉せぬことにて候、動轉せぬとは、物毎に留らぬ事にて候、物一目見て其の心を止めぬを不動と申し候。なぜなれば、物に心が止り候へは、いろ〳〵の分別か胸に候間、胸のうちにいろ〳〵に動き候、止れば止る心は動きてもうごかぬにて候。たとへば十人して一太刀つゝ我へ太刀を入るゝも、一太刀をうけ流して、跡に心を止めず、跡を捨て跡を拾ひ候はゝ、十人ながらへ働を缺かぬにて候。十人十度心は働け共、一人にも心を止めずば、次第に取合ひて働は缺け申す間敷候。若し又一人の前に心が止り候はゝ、一人の打太刀をば打流すべけれども、二人めの時は、手前の働抜け可申候。千手觀音として手が千御入候は、弓を取る手に心が止らば、九百九十九の手は皆用に立ち申す間敷候、一所に心を止めぬにより、手か皆用に立つなり。觀音として身一つに千の手か何しに可有候。不動智か開け候へは、一身に手か千有りても皆用に立つと云ふ事を人に示さんが爲めに作りたる容にて候。假令一本の木に向ふて、其の内

の赤き葉一つを見て居れば、殘りの葉は見えぬなり。葉ひとつに目をかけずして、木の木に何心もなく打向ひ候へば、數多の葉殘らず目に見え候。葉一つに心をとられ候はゞ、殘りの葉は見えず、一つに心を止めねば、百千の葉みな見え申し候。是れを得心したる人は、即ち千手千眼の觀音にて候。然るを一向の凡夫は、唯一筋に身一つに千の手千の眼が御座して難有と信じ候。又なまものじりなる人は、身ひとつに千の眼か何しにあるらん、虛言よと破り譏るなり。今少し能く知れば、凡夫の信ずるにてもなし、破るにてもなく、道理の上にて尊信し、佛法はよく一物にして其の理を顯はす事にて候。諸道ともに斯樣の物にて候。神道は別して其の道と見及び候。有の儘に思ふも凡夫、又打破れは猶惡し、其の內に道理有る事にて候。此の道彼の道さま〳〵に候へとも、極所は落着候。扨て初心の住地より修行して、不動智の位に過ぐれは、立歸て住地の初心の位へ落つべき子細御入り候。貴殿の兵法にて可申候、初心は身持太刀の構も何も知らぬものなれば、身に心の止まる事もなし、人が打ち候へは、つひ取合ふたばかり何の心もなし。然る處にさま〳〵の事を習ひ身持太刀の取樣、心の置所、いろ〳〵の事を敎へぬれば、色々の處に心が止り、人を打たんとすれば、兎や角して殊の外不自由なる事、日を重ね年月をかさぬ稽古すれば、後は

身の構も、太刀の取樣も、皆心になくなりて、唯た最初の何も知らぬ何もなき時の樣なり。是れ初と終と同じやうになる心持にて、一から十までかぞへまはせば、一と十と隣になり申し候。調子なぞも一のはじめのひくき一をかぞへて、上無と申す高き調子に行き候へは、一の下と二の上と隣になり申し候。

一壹越。二斷金。三平調。四勝絕。五下無。六雙調。七鳥鍾。八つくせき。九盤(打けい)。十盤涉。十一神仙。十二上無。

づゝと高きと、づゝと低きは似たるものになり申し候。佛法もづゝとたけ候へは、佛とも法とも知らぬ人のやうに人の見なす程に飾りも何もなくなるものにて候。故に初め住地の無明煩惱と、後の不動智とが一つに成りて、智惠働の分は失せて、無心無念の位に落着申し候。愚痴の凡夫は、一向に智惠がなき程に出ぬや。またづゝとたけ至りたる智惠は、早ちかへ處入によりて一切出ぬなり。なま物知りなるによつて、智惠が頭へ出申し候てをかしく候。今時分の出家の作法ども、囃をかしく可二思召一候。御弟かしく候。一理の修行、業の修行と申す事の候。理とは右に申上げ候如く、至りては何も取合はず、唯一心の捨てやうにて候、段々右に書付候如くにて候。然れども事の修行を不仕候得は、道理ばかり胸

に有りて身も手も不働候。事の修行と申し候は、貴殿の兵法にてなれば、身構の五箇に一字のさま〳〵の習事にて候、理を知りても事の自由に働かねはならず候。身持太刀の取まはし能く候ても、理の極り候所の聞く候ては相成間敷候。事理の二つは、車の輪の如くなるへく候。

間不容髪

と申す事の候、貴殿の兵法にたとへて可申候。間とは物を二つかさね合ふたる間へは、髪筋も入らぬと申す義にて候。たとへば手をパタと打つに、其の響パッシと聲が出候。打つ手の聲の間へ髪筋の入る程の間もなく聲が出候。手を打つて後に、聲が思案して間を置いて出申すものにては無く候。打つと其の響聲が出候、人の打ち申したる太刀に心が止り候へば間が出來候、其の間に手前の働抜け候。向ふの打太刀と我が働との間へは、髪筋も不入候程ならば、人の太刀は我か太刀たるべく候。禪の問答に此の心ある事にて候。佛法には、此の止りて物に心の殘ることを嫌ひ申し候。故に止るを煩惱と申し候。たてきつたる早川へも玉を流す樣に乘つてトット流れて少しも止る心なきを尊ひ候。

石火之機

と申す事の候、是れも前の心持にて候。石をパタと打つといなや光が出で、打つと其のまゝ出る火なれば、間も透間もなき事にて候。是れも心の止るべき間のなき事を申し候。早き事とばかり心得候へは惡敷候。心を物に止め間敷と云ふが詮にて候。早きにも心の止まらぬ所を詮に申し候。心が止まれば、我か心を人にとられ申し候。早くせんと思ひ儲て早くせば、思ひ儲る心に又心を奪はれ候。西行の歌に、「世をいとふ人とし聞けは假りの宿に心止めなと思ふばかりそ」と申す歌は、江口の遊女の讀みし歌なり。歌を我と心得られ候て可然候半か、心止めなと思ふはかりぞ、心得所と可存候、又是れにて御合點可有候。禪宗にて如何是佛と問ひ候はゝ、拳をさしあぐべし。如何か佛法の極意と問はゝ、其の聲未だ絶たざるに、一枝の梅花となりとも、庭前の柏樹子となりとも云ふべし、云ふ事の吉凶を撰ぶにてはなし、止らぬ心を尊ぶなり。止まちぬ心は、色にも香にも移らぬなり。此移らぬ心の體を神とも祝ひ、佛とも尊び、禪心とも極意とも申し候へど、思案して後に云ひ出し候へば、金言妙句にても、住地煩惱にて候。石火の機と申すも、ピカリとする稲光のはやきを申し候。たとへば右衛門とよびかくると、アッと答ふるを不動智と申し候。右衛門と呼びかけられて、何の用にてか有る可きなど、思案して、跡に何の用か杯いふ心は、

住地煩惱にて候。止りて物に動かされ迷はさるゝ心を、所住煩惱とて凡夫にて候。又右衛門と呼ばれて、オッと答ふるは諸佛智なり。佛と衆生と二つ無く、神と人と二つ無く候。此の心の如くなるを、神とも佛とも申し候。神道、歌道、儒道とて道多く候へども、皆この一心の明なる所を申し候。言葉にて心を講釋したぶんにては、この一心人と我が身にあたりて、晝夜善事惡事とも業により家をはなれ國を亡し、其の身の程々にしたがひ、善し惡しとも心の業にて候へども、此の心を如何やうなるものぞと悟り明らむる人なく候ゆ、皆心に惑され候。世の中に心を知らぬ人は可レ有候、能く明らめ候人は稀に有がたく見及び候。適ま明らめ知る事も、又行ひ候事成り難く、此の一心を能く說くとて、心を明めたるにてはあるまじく候。水の事を講釋致し候とても、口はぬれ不申候。火を能く說くとも、口は熱からず。臧の水、寒の火に觸れてならでは知れぬもの也。書を講釋したるまでにては知れ不レ申候。食物をよく說くとても、ひだるき事は直り不申候。說く人の分にては知れ申間敷候。世の中に佛道も心を說き候得共、其の說く如く其の人の身持なく候心は明かに知らぬ物にて候。人々我が身にある一心本來を篤と極め悟り候はねは不明候。又參學をしたる人の心が明かならぬは、參學する人も多く候へども、それにもよらず候。參學

したる人心持皆々惡敷候。此の一心の明らめやうは、深く工夫の上より出で可申候。

心の置所

心を何處に置かうぞ。敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるゝなり。敵の太刀に心を置けば、敵の太刀に心を取らるゝなり。敵を切らんと思ふ所に心を置けば、敵を切らんと思ふ所に心を取らるゝなり。我が太刀に心を置けば、我が太刀に心を取らるゝなり。われ切られじと思ふ所に心を置けば、切られじと思ふ所に心を取らるゝなり。人の構に心を置けば、人の構に心を取らるゝなり。兎角心の置所はないと言ふ。或人問ふ、我が心を兎角餘所へやれば、心の行所に心を取止めて敵に負るはぞに、我が心を臍の下に押込めて餘所にやらずして、敵の働により轉化せよと云ふ。尤も左もあるべき事なり。然れども佛法の向上の段より見れば、臍の下に押込めて餘所へやらぬと云ふは、段が卑くし、向上にあらず、修行稽古が時の位なり、敬の字の位なり。又は孟子の放心を求めよと云ひたる位なり。上りたる向上の段にてはなし、敬の字の心持なり。放心の事は、別書に記し進ぜ可レ有二御覽一候。臍の下に押込んで餘所へやるまじきとすれば、やるまじと思ふ心に心を取られて先の用かけ、殊の外不自由になるなり。或人問ふて云ふは、心を臍の下に押込

めて働かぬも不自由にして用か缺ければ、我か身の内にて何處にか心を可置ぞや。答曰く、右の手に置けば、右の手に取られて身の用缺るなり。心を眼に置けば、眼に取られて、身の用缺け申し候。右の足に心を置けば、右の足に心を取られて身の用缺るなり。何處なりとも一所に心を置けば、餘の方の用は皆缺るなり。然らば則ち心を何所に置くべきぞ。我答曰く、何處にも置かねば、我が身に一ハイに行きわたりて、全體に延ひひろごりてある程に、手の入る時は手の用を叶へ、足の入る時は足の用を叶へ、目に入る時は目の用を叶へ、其の入る所々に行きわたりてある程に、其の入る所々の用を叶ふるなり。萬一もし一所に定めて心を置くならば、一所に取られて用は缺くべきなり。思案すれば思案に取られる程に、思案をも分別をも殘さず、心をば總身に捨て置き、所々に止めずして其の所々に在て用を外さず叶ふべし。心を一所に置けば偏に落ると云ふなり。偏とは一方に片付きたる事を云ふなり。正とは何所へも行き渡つたる事なり、正心とは總身へ心を伸へて一方へ付かぬを言ふなり。心の一處に片付きて一方は缺るを偏心と申す也。偏を嫌ひ申し候。萬事に堅まつたるは、偏に落るとて道に嫌ひ申す事なり。何處に置かうとて思なければ、心は全體に伸ひひろごりて行き渡りて有るものなり。心をば何處にも置かずして、敵の働

にまかせて當位々々心を其の所々にて可用心歟。總身に渡つてあれば、手の入る時には手にある心を遣ふべし、足の入る時には足にある心を遣ふべし、一所に定めて置きたらば、其の置きたる所より引出し遣らんとする程に、其の處に止て用が拔け申し候。心を繋き猫のやうにして餘處にやるまいとて、我が身に引止めて置けば、我が身に心を取られ、なり。身の内に捨て置けば、餘處へは行かぬものなり。唯た一所に止めぬ工夫是れ皆修行なり。心をばどつこにも止めぬが、眼なり肝要なり。どつこにも置かねば、どつこにもあるぞ。心を外へやりたる時も、心を一方に置けば、九方は缺くるなり。心を一方に置かざれば十方にあるぞ。

本心妄心

本心と申す事の候、本心と申すは、一所に留らず、全身全體に延ひ廣ごりたる心にて候。妄心は、何ぞ思ひつめて一所に固まり候心にて、本心が一所に固まり集りて妄心と申すものに成り申し候。本心は失ひ候と所々の用か缺ける程に、失はぬ樣にするが本心なり。たとへば本心は水の如く一所に留らず、妄心は氷の如くにて、氷にては手も頭も洗はれ不申候。氷を解かして水とし何所へも流れるやうにして、手足をも何をも洗ふべし。心一所に固まり一事に留まり候へば、氷かたまりて自由に使はれ申さず。氷にて手足の洗はれぬ如く

にて候。心を溶かして總身へ水の延ひるやうに用ゐ、其の所に遣りたきまゝに遣りて使ひ候。是れを本心と申し候。

有心之心無心之心

と申す事の候。有心の心と申すは、妄心と同事にて、有心とは、アルコトロと讀む文字にて、何事にでも一方へ思ひ詰まる所あり。心に思ふ事ありて分別思案が生ずる程に、有心の心と申し候。無心の心と申すは、右の本心と同じ事にて、固より定まりたる事なく、分別も思案も何も無き時の心、總身に廣ごりて全體に行渡る心を無心と申す也。どッこにも置かぬ心なり。石か木かのやうにてはなし、留る所なきを無心と申す也。留れば心に物かあり、留る所なければ心に何も無し、心に何もなきを無心の心と申し、又は無心無念とも申し候。此の無心が心に能くなりぬれば、一事に止らず一事に缺かず、道に水の湛へたるやうにして、此の身に在りて用の向ふ時出て叶ふ也。一所に定まり留まりたる心は、自由に働かぬなり。車の輪も堅からぬにより廻るなり、一所につまりたらば廻るまじきなり。心も一所に定れば働かぬものなり。心中に何ぞ思ふ事あらば、人の云ふ事をも聞きながら聞えざるなり、思ふ事に心が止まるもゑなり。心が其の思ふ事に在りて一方へかたより、一方へかたよれば、物を聞けども聞えず見れども見えざるなり。是れ心に物ある故なり。あるとは思ふ事があるなり。此の有る物を去りぬれば、心無心にして唯た用の時ばかり働て其の用に當る。此の心にある物を去らんと思ふ心が、又心中の有る物になる、思はざれば獨り去て自ら無心となるなり。常にかくすれば、何時となく後は獨り其の位へ行くなり、急にやらんとすれば行かぬものなり。古歌に、『思はしと思ふも物を思ふなり思はじとだに思はしやきみ』。

水上打二胡盧子一捺着即轉

胡盧子を捺着するとは、手を以て押すなり。瓢を水へ投げて押せば、ヒョット脇へ退き、何としても一所に止まらぬものなり。至りたる人の心は、卒度も物に止まらぬ事なり。水の上の瓢を押すが如くなり。

聰無所住而生其心

此の文を讀み候得ば、オウムショウザウシンショウゴシンと讀み候。禽の業をするに、せうと思ふ心が生すれば、其のする事に心が止るなり。然る間、止る所なくして心を生すべしとなり。心の生する所に生せざれば手も行かず、行けばソコに止まる、心を生じて其の事を

しながら止まる事なきを、諸道の名人と申すなり。此の止まる心から執着の心起り、輪廻も是れより起り、此の止まる心生死のきづなと成り申し候。花紅葉を見て、花紅葉を見る心は生じながら、其の所に止らぬを詮と致し候。慈圓の歌に、『柴の戸に匂はん花もさもあらばあれなかめにけりな恨めしの世や』。花は無心に匂ひぬるを、我は心を花にとゞめてなかめけるよと、身の是れにそみたる心が恨めしと也。見るとも聞くとも、一所に心を止めぬを至極とする事にて候。敬の字をは主一無適と致す程も、心を一所に定めて餘所へ心をやらず、後に拔て切るとも切る方へ心をやらぬが肝要の事にて候。殊に主君抔に御意を承る事、敬の字の心眼たるべし。佛法にも敬の字の心有り、敬白鐘を鳴らすとて、鐘を三つ鳴して、手を合せ敬白す、先つ佛と唱へ上る此の敬白の心、主一無適、一心不亂、同義にて候。然れども佛法にては敬の字の心は、至極の所にては無く候。我が心を捉えて亂さぬやうにとて習ひ入る修行稽古の法にて候。此の稽古年月つもりぬれば、心を何所へ追放しやりても、自由なる位に行事にて候。右の應無所住の位は、向上至極の位にて候。敬の字の心は、心の餘所へ行くを引留めて遣るまい、遣れば亂るゝと思ひ、卒度も油斷なく心を引つめて置く位にて候。是れは當座心を散らさぬ一旦の事なり。常に如是ありては、不自

〔無學禪師〕名は祖元、字を子元といひ、無學と號す、宋の人なり、弘安中、北條時宗の請によりて來朝し、鎌倉の瑞鹿山を建しぬ。宋の亂に元兵に迫られ斬られんとせしに、一偈を打す、いはく、乾坤無地卓三孤筇。喜得入空法亦空。珍重大元三尺劍。電光影裡斬二春風。

由なる義なり。縱へば雀の子を捕へられ候て、猫の繩を常に引つめて居ては、馴れぬ位にて我が心を猫をつれたるやうにして、不自由にしては、用が心のまゝに成る間敷候。猫によく仕付をして置いて、繩を追放して行度方へ遣り候て、雀と一つ居ても捕らぬやうにするが、應無所住而生其心の文の心にて候。我が心を放し捨て猫のやうに打捨て、行度方へ行きても心の止らぬやうに心を用ひ候。貴殿の兵法に當て申し候はゞ、太刀を打つ手に心を止めず、一切打つ手を忘れて打て人を切れ、人に心を置くな。人も空、我も空、打つ手も打つ太刀も空と心得、空に心を取られまいぞ。鎌倉の無學禪師、大唐の亂に捕へられて切らるゝ時に、電光影裏斬二春風一といふ偈を作りたれは、太刀をは捨てゝ走りたると也。無學の心は、太刀をひらりと振上げたるは、稻光の如く、電光のピカリとする間、何の念もないぞ。打つ刀も心はなし、切る人も心はなし、切らるゝ我も心はなし、切る人も空、太刀も空、打たるゝ我も空なれば、打つ人も人にあらず、打つ太刀も太刀にあらず、打たるゝ我も稻光のピカリとする內に、春の空を吹く風を切る如くなり。一切止まらぬ心なり。風を切たのは太刀に覺もあるまいぞ、かやうに心を忘れ切て、萬の事をするが上手の位なり。舞を舞へは、手に扇を取り足踏む、其の手足を能くせむ、舞を能く舞はむと思

馬。元兵乃ち懺謝して去りしといふ。

〔邵康節〕宋代の名儒なり。

ひて、忘れきらねば、上手とは申されず候。未だ手足に心止まらば、業は面白かるまじ。悪皆心を捨きらずしてする所作は、皆悪敷候。

不見放心

と申すは、孟子が申したるにて候。離れたる心を尋ね求めて、我が身へ返せと申す心にて候。縦へば犬猫鶏など放れて餘所へ行けば、尋ね求めて我が家に返す如くに、心は身の主なるを、悪敷道へ行く心が逃るを、何とて求めて返さぬぞと也。尤も斯くあるべき義なり。然るに又邵康節と云ひしは、心要レ放と申し候、ハラリと替り申し候。斯く申したる心持は、心を執らへつめて置いては勞れ、猫のやうにて身か働かれねば、物に心が止らず染まぬやうに能く使ひなして、捨置いて何所へなりとも追放せと云ふ義なり。物に心が染み止るによつて、染まずな止まらずな、我か身へ求め返せと云ふは、初心稽古の位なり。蓮の泥に染まぬが如くなれ、泥にありても苦しからず、よく磨きたる水晶の玉は、泥の内に入れても染まぬやうに心をなして、行き度き所にやれ、心を引きつめては不自由なるぞ、心を引きしめて置くも、初心の時の事よ。一期其の分では、上段は終に取られずして下段にて果るなり。稽古の時は、孟子が謂ふ不見放心と申す心持能く候。至極の時は邵康節が心要放と申すにて候。中峯和尚の語に見放心とあり、此の意は即ち邵康節が心を放さんことを要せよと云ひたると一つにて、放心を求めよ引とゞめて一所に置くなと申す義にて候。又具不退轉と云ふ、是れも中峯和尚の言葉なり。退轉せずに替はらぬ心を持てと云ふ義なり。人たゞ一度二度は能く行けども、又つなかれて常に無い程に退轉せぬやうなる心を持てと申す事にて候。

急水上打二毬子一念々不停留

と申す事候。急にたきつて流るゝ水の上へ手毬を投せば、浪にのつてぱつぱと止らぬ事を申す義なり。

前後際斷

と申す事候。前の心をすてず、また今の心を跡へ殘すか悪敷候なり。前と今との間をば、きつてのけよと云ふ心なり。是れを前後の際を切て放せと云ふ義なり、心をとゞめぬ義なり。

内々存寄候事、御諫可申入候由。愚案如何に存候得共、折節幸と存し、及見候處あちまち書付進申し候。

貴殿事、兵法に於て今古無覺の達人故、當時官位俸祿世の聞えも美々敷候。此の大厚恩を寐ても覺めても忘るゝことなく、且夕恩を報し忠を盡くさんことをのみ思ひ玉ふべし。忠を盡くすといふは、先づ我が心を正くし身を治め、毛頭君に二心なく、人を恨み咎めず、日々に出仕怠らず、一家に於ては父母に能く孝を盡くし、夫婦の間少しも猥になく、禮義正しく、妾婦を愛せず、色の道をたち、父母の間おごそかに道を以てし、下を使ふに私のへだてなく、善人を用ゐ近付け、我が足らざる所を諫め、御國の政を正敷、不善人をは遠ざくる樣にするときは、善人は日々に進み、不善人はおのづから主人の善を好む所に化せられ、惡を去り、善に遷るなり。如此君臣上下善人にして、欲薄く奢を止むる時は、國に實滿ちて、民も豊かに治り、子の親をしたしみ、手足の上を救ふが如くならば、國は自ら平に成るべし、是れ忠の初なり。この金鐵の二心なき兵を、以上樣々の御時御用に立てたらば、千万人を遣ふとも心のまゝなるべし。則ち先きに云ふ所の千手觀音の一心正しければ、千の手皆用に立つが如く、貴殿の兵術の心正しければ、一心の働自在にして、數千人の敵をも一劒に隨ゆるが如し、是れ大忠にあらずや。其の心正しき時は、外より人の知る事もあらず、一念發る所に善と惡との二つあり、其の善惡二つの本を考へて、善をなし惡

をせざれば、心自ら正直なり。惡と知り止めざるは、我が好所の痛あるもゆゑなり。或は色を好むが、奢氣隨にするか、いかさま心に好所の働きある故に、善人ありども我が氣に合はざれは善事を用ひず、無智なれとも、一旦我が氣に合へは登し用ひ好むもゆゑに、善人はありても、用ゐざれば無きが如し。然れば幾千人ありても、自然の時、主人の用に立つ物は一人も不レ可レ有レ之。彼の一旦氣に入たる無智若輩の惡人は、元より心正しからざる者故、事に臨んで一命を捨てんと思ふ事、努々不レ可レ有。心正しからざるものゝ主の用に立たる事は、往昔より不二承及一ところなり。貴殿の弟子を御取立被成にも、ケ樣の事有之由、苦々敷存候。是れ皆一片の數奇好所より其の病にひかれ、惡に落入るを知らざるなり。人の知らぬと思へども、微より明かなるなしとて、我が心に知れは、天地鬼神萬民知るなり。如是じて國を保つ、誠に危き事にあらずや、然らば大不忠なりとこそ存候へ。たとへは我一人いかに矢猛に主人に忠を盡くさんと思ふとも、一家の人和せず、柳生谷一鄕の民背きなば、何事も皆相違仕るべし。總て人の善し惡しきを知らんと思はゝ、其の愛し用ゐらるゝ臣下、又は親み交る友達を以て知ると云へり。主人善なれば、其の近臣皆善人なり。主人正しからざれば、臣下友達皆正しからず。然らば諸人みな無みし、隣國是れを侮るなり。

〔柳生谷〕 即ち但馬守の采邑大和國柳生をいふなり。

善なるときは諸人親むはとは、此等の事なり。國は善人を以て寶とすと云へり。よく〳〵御體認なされ、人の知る所に於て私の不義を去り、小人を遠け賢を好び事を急に成され候はゝ、彌々國の政正しく、御忠臣第一たるべく候。就中御實息御行狀の事、親の身正しからずして、子の惡しきを責むること逆なり。先づ貴殿の御身を正しく成され、其の上に御異見も成され候はゝ、自ら正しく御舍弟内膳殿も兄の行跡にならひ正しかるべければ、父子ともに善人となり、目出度かるべし。

取と捨とは義を以てすると云へり。唯今寵臣たるにより、諸大名より賄を厚くし、欲に義を忘れ候事、努々不ㇾ可ㇾ有候。

貴殿、亂舞を好み、自身の能に奢り、諸大名衆へ押て參られ、能を勸められ候事、偏に病と存し候なり。上の唱は猿樂の樣に申し候由。また挨拶のよき大名衆をば、御前に於てもつよく御取なし成さるゝ由。重ねて能く〳〵御思案可然歟。歌に、「心こそ心迷はす心なれ心に心をもるすな」。

〔心こそ〕の歌は、最明寺時賴の詠みしものなり。

不動智神妙錄 終

盲安杖

解題

盲安杖は、石平の鈴木正三老人の著はすところなり。當時その門人らの記するところに據るに、老人その名を正三といひ、一に昌三或は聖三につくり、通稱を九太夫と稱し、三河の人なり。その先は紀州熊野にいで、穗積を姓となせしが、三河に來りてのち、鈴木とは改めて、老人にいたるまで世々德川氏に仕へぬ。老人わかきより武勇の譽れ高く、家康に從ふて諸處にたゝかひ、關が原および大阪の役には、著るき功をあらはしき。老人つとに心を禪要に寄せ、軍國の暇には、濟洞の耆宿に參しけるが、德川の威風四海を靡みし、世もしづかになりしかは、にわかに思ひたちて髮をそりこぼち、いづちともなくいで去りぬ時に元和六年にして、その年四十二歲なりしといふ。これより十餘年の間あまねく諸國にあそび、つゐに三河にかへりて石平山恩眞寺に住みき。寺は俗弟鈴木三郎九郎なるもの、君恩を報するためにとて搆めたるところなり。晚年にいたりて江戸にくだり、了心庵に老も。その道友には雲居、物外の二禪師ともとも親し。明曆元年六月二十五日、泊然として

化す。世壽七十又七なり。老人わかきより矢石の間に往來したるほとありて、その手段亦自ら辛辣を極めぬ。されど俗人に教を示するには、譬喩を和歌あるは俗謠にとり、その言頗る親切なり。この書のごときも、すなはちその一なるべし。けだしこの書は、俗にてありしとき、ある儒士の佛法は世法に乖くといひけるに垂示せしものなりと云ふ。

盲安杖序

世の數ある品異りといへとも、皆苦をぬき樂を與ふるの外なし、其善はちかく身の執着にあり。されどその身の忘れかたきにあらす、欲にはかならす身を忘る、我が惡のあきらめかたきにあらす、人の惡はよく知る故に、明師道をたゝし、あまねく遺訓にめをひらかん事を願ひて、心をつくして書あつめけることの葉繁からす、緣ある心の目やみを助けて、安きに導んとて、盲安杖とはいふにやあらむ。

安永七戌のとし初秋、堵庵

盲安杖

石平　鈴木正三老人

一　生死を知りて業あること

生死を知りて業あることを、たしかに知るべし。夫れ生者必滅のことわり、口に知りて必に知らず、少年はやく過去て、かしらに霜をいたゞき、ひたひになみをたゝみ、五体日々におとろへ、露命あさもふにせまるといへども、更に驚く心なし。こゝはことしに移り、春過き秋來れとも、飛花落葉のことわりをわきまへず。石火電光、日のまへなれども、無常幻化(げんけ)なることをしらず。誠に衣鉢を首にかけ、出離の道に入りて、諸法空なることわりを修行する人も、つゐに常住の機はなれかたし。されはこの身をまつたく思ふが故に、日夜の苦やひとさなし。誠に身をおもふ人ならば、すみやかに身をわすれよ。苦患いづれのところより出るや、唯だこれ身を愛する心にあり。とりわけ武士の生涯は、生死をしらすは有るべからす、生死をしる時は、おのつから道有り。しらさるときは、仁義禮智もなし。武士の二字といふこと、生死の二つを知るをもつていふとの說有り。さるほどに晝夜此の

〔太田道灌〕 道灌ふかく心を禪要に寄せ、龍穆の恭叟和尚および濟家の耆宿に參して契悟したることは、詳に洞上聯燈錄に見えたり。

理を守りて、生死を見とゝけて徳にいたるべし。唐の梓臼、程嬰、一人は死をやすくし、一人は命をまつとうして、終に敵をほろぼし、二たび太子を世にたて、弓箭の本意を達することも、生死をしるもろなり。されは主君の恩をかふむり、妻子をはぐくみ、身命を助かりなから、此の身をわかものとなし、心をもるかせにするは、餓鬼なり。主君の恩にて身命を助かることをよく知りて、此の身を主君のものになしてつかへよ、すなはち我か身の安閑なるところにいたるべし。扨て身命主君のものなれば、なにをかわかものとせんや、かやうのあさき所よりも心ふかく入りて、間斷なく守ちんには、本來無一物にして、まつたく生死なきことをみるべし、武藏國太田道灌といふ人ふかく道に入て、歌道も達者の人なり。最後に敵鎗つけて、つねの達者ならは歌よめといふ時、ことばのしたより、「かゝるときさこそ命のをしからめかねてなき身と思ひしらずは」。又蘆川新右衛門の辭世なりといふ歌に、「生れけるそのあかつきに死しぬればけふのもふへは松風そふく」。また一休和尚のうたといふて、「過去よりもみらいへとはる一休み風ふかばふけ雨ふらばふれ」。此の人々の樂はかりかたし。かやうの人もはじめはまよひの人なれとも、一たび道に入りて、つとめ行せしゆゑなり。扨ていかやうにつとめんとならは、唯たおのれにはなる事をつとむべし。

はかなきがなや、したしきにつきうときにつき、先立て死有る事をしめせども、これをよそにみて空しくすてす。いつれの人かのてりとゝまるや、何事かしばしも住するや、夢幻の世の中、さなこにさへをり耳にみつゝ知るゝ、元來無常の世なる事を。もしあきらかに無常をしらば、何のさはりあらんや。夢中の境界に着して、わがものかはにたのしひ、ここの身何物そや、地水火風のかりのあんがつしてかたちをむすぶ、さらに我が物にあらず、四大に着するとき四大我をまゝはす、かへす〳〵四大にまとはさるゝ事なく、きはめてみよ、一箇のわれ有り、是れまたわれにあらす、四大をはなれて四大に屬し、四大につれて四大をもちひたり。古人のいはく、有物先天地。無形本寂寥。能爲萬像主。不逐四時凋。

二　己れを顧みて己れをしるべき事

己れを顧みて己れをしれ。縱へ學文廣くして、いかはせ物をしりたりとも、己れをしらすは、物知りたるにあらす。されば己れをしらずして餘所を知ることと有るべからす、己れを更にしらさる人は、愚なる己れか心を本として、他を謾り、心にあふをよみし、すなはにしてしたかはさるをにくみ、萬事にいきゝはりふかく、自ら己れをくるしめて、心をなや

まことは、ひとへに己れが僻事なるもゑなり。萬人我にかなはざるをしらは、われまた萬人の心にかなふまじきことしれ。われにひかことなき人は萬人をすてず、萬人を捨ざれは、萬事にまことありて、なさけふかきもゑなり。もゑひかにといふに、まことの人は心すなはにたゝしく、己れ僻事なるときは、くるしみ絶にず。されはひかことはおのれかあだなることをたしかに知りて、二六時中うちおくことなく、かへりみてつゝしむべし。世に人多しといへとも、おのれをしる人まれなるべし。人々身のうへしりたりとは思へども、かならず死する身をもちて、死有ることをわすれて、萬年の思ひをなす故に、年月をゝしむ人なし。しかる間、貪瞋邪僞の心をもつはらとして、忠孝の道にそむき、仁義をわきまへずして、諂誑諂曲の心を用ひ、家職を餘所にして、無益のことをこのみ、身の僻事をしらずして、他人の是非をそき、我執つよくして、人をあはれむ心なく、ことのひかたに貪着し、きらふかたにうとく、一たひはよろこひ、一たひはうれひ、分別みたりにして、物にさからひ、たまくゝみちを聞きては、人をはかるちやうきとなし、身のうへをわすれては、餘所をはかるもいかでかたんちや、誠に理をそしらずとも、おのれか僻事をわきまへずば有るべからず、か

やうの理を聞きて、身のうへしらぬにはあらねども、年來しなれしわざなれば、今更あらためがたしといふ人あり。誠に己れの僻事なりとしらば、あらためがたしといふべからず。やしわが力におよばぬはどならば、佛神に祈誓して心をきよひべし。清淨無碍の心をいのらば、人をゝなじか佛神納受したまはざらんやいよのつね人の祈るごとは、欲によくをかさねゝ愚痴にくちをかさぬる祈なり。佛神は此の理をいましめ、諸經をときおき玉へは、結句此の經をよみ、欲心愚痴を祈るゝいかにして佛神これをうけたまはんや。却て罰をかふむるべし。佛神は廣大の慈悲をもつて、貪瞋痴の三毒に酔ひて苦海にしづむ衆生をあはれみ給ひ、諸のをしへをもつて救ひ取り、無比安樂のところにいたらしめんがための御誓なり。あはれなるかな、此の理をわきまへずゝみづから好で貪欲にせめられ、瞋恚にやかれ愚痴にくらまされて、さらに己れをしらずして、聞きよりくらきに入りて、苦患を受くること、おさまじきにあらずや。万事はみな非なり。心をしつかで己れをしれ。いたる人は物にまかせて己れにまかせず。愚人はおのれにまかせて物にまかせず。されば己れにまかする時は、苦樂順逆共に苦なり。ものに任するときは、苦樂順逆共に樂なり。古人の曰く、さとりのまへの是非は、是非とともに是なり。さとりのまゝの是非は、是非共に非なりといへり。

〔古語〕石頭遷禪師、僧肇法師の雜論を讀み、會萬物爲己者、其唯聖人乎と云ふに至りて、几を拍て曰く、聖人無己、即所不己、法身無象、誰云自他。

此の語に眼をつけて、かへすがへすおのれをつくすべし。古語にいはく、聖人におのれなし、己れなちざるところなし。

三、物ごとに他の心にいたるべき事

物ごとに他の心にいたれ、人をわするゝことなかれ。まづ上四恩をしるべし。一には天地の恩、二には師の恩、三には國王の恩、四には父母の恩なり。天地の恩といふは、四大を天地よりかり、大地に身をおき、衣服食物、水火、家財雜具等、皆もつて天地の恩なり。かへりみすば有るべからず。師の恩といふは、ものゝ凡夫、三途の苦患をはなれ、輪廻の業をまぬかれ、佛果にいたるべき諸のをしへの恩いふにはかなし。國王の恩といふは、亂世にして人民身のおき所なし、盗賊狼藉の惡業、國にみちて近里の道路自由ならず、晝夜心の油斷なくたゝかふ心ばかりにて、さなからち鬼畜に異ならず。然るに國王國をたいらげ給ひ、政道正しき御代となり、仁義五常も行はれ、諸民の心正路にて、安なはすして道にちかしい身の置きどころひろくして、渡世のいとなみしなく、自由なり、此の恩德をしらさらむや。父母の恩といふは、母の胎内にやどり、十月の苦患をかけ、むまれいでしよりか、晝夜乳哺養育に心をつくし、人となせし恩、つゝさに父母恩重經に見えたり。また衆生の恩有り、農人の恩、諸職人の恩、衣類紡績の恩、商人の恩、一切の所作たがひに相たすけらるゝ恩、たしかにこれを知りて、人をべたつることと有べからず。總じて他の心を能く受くべし。されば主人にむかふたるときは、主人の心にいたつて我が行のいたらざるをしれ。下人にむかふたるときは、下人の心にいたつて萬事苦をしれ。日夜心の油斷なく、極熱飢寒のうれひ、身のつかれ心のなやみ、ときゝに思ひしるべし。土民百姓等、晝夜のいとなみに身心をくるしめ、五穀を作りいたし、國土の人民をやしなふ、一粒の米に百手のかずあたるといへり。かくのごとくの苦惱忘るべからず。そのうへ一人のかせぎをもつて、數多の眷屬を養ひ、わずかの身命をたすくるといへども、食物とぼしくしてうれひつよし。年貢借物不足にして、妻子をうり、いきなからわかれ、遠國におもむき、かなしひ思ひやるべし。又世におちぶれたる人、妻子をはぐくみかねて、望みふかく、へつらふをみて、いやしむことと有るべからず、その人に成りてみよ。また非人乞食飢寒のうれひにくるしみ、野山にふし、一生を送る有樣、不便なるにわらずや。又世間なきもの、科なき心をよく受くべし、かれをおとしいたむること有るべからず、かなしむ心すなはち身心おのづからやすひとなるといへり。おとなしきもの、病なし、七情よりおこるとなり。されば

〔原註〕他の心にいたるべきとは、他人の心に成りかはることをいふなり。

〔七情〕喜、怒、哀、樂、愛、惡、慾これなり。

鳥獸を籠にいれ、つなぎくるしめて、目をよろこぶこと、かれが心をしらざる故なり。野山を思ふ心切なるべし。心有る人これをあはれまざらんや。また殺生を好むこと、仁の心なきもの多なり。短命は殺生より來るといへり。我が命のをしきごとくしらば、小さ虫にいたるまで心をとめてみよ。子を思ひ、夫婦をねたみ、命を惜むこと、ひとへに愚痴なれば、人よりもまさりてはなはだしかるべし。賢聖のをしへをうけ、道理をしり、常に修し行ずる人間、我執つよく命ををしむことかぎりなし。況や愚痴一遍の畜類においてをや。かへりみずば有るべからず。總して人の愛をしれ、萬物へたゝるといへども、本來の心は一なり、いづれを自他といはんや。愚人のまへにては、人我の隔て有り。いたれる人のまへには、自他の差別なし。さるほどに、まことの人はなさけを先として憐みふかし、釋尊は三界の衆生を一子のごとくあはれみたまふなり、かたしけなきにあらずや。一如の水、なかれて萬波をわかる。たとへば天上の一月、萬水に移るかごとし。人々の性、又これに異ならず。されはいやしむべきものなく、へたつべきものもなし。一切衆生、悉有佛性の理をさとるべし。うたに、「庭に生るちりゝ草の露までも影をはとめてやどる月かな」。

四、信有りて忠孝を勤ひべき事

信有りて忠孝をつとめよ。名利につかはるゝときはまことなし。縱令主人の心にかなひて、したしくつかはる人なりとも、諂ひるはまれなるべし。唯た我が身よからしめんためのこゝろざしにて、貪るこゝろにつかはるゝなるべし。餘所に恥ることなく、心にこゝろをはなて、まことと有る事をしれ。いかなるを諂といふとならば、譬へは我が子は愛するとはなけれども、我にまことあれば、みどり子もまたしむ。人の子をば愛すれども、われにまことなければ、去たしむることなし、はづべし〳〵。忠孝の道、まこと有るはかたかるべし、忽ち一陣にすゝみ出て、死をいたすともがらも、名利をおもふためなるべし。さるはまことにはまれをもとめて、所領をむさぼり、祿のすくなきことをうらみ、或は人と好惡をあらそひて、人の志をうばはんことを專とす、これ偏に義をまもらずして、欲心にまかせて、はぢを勤むるものなり。信有りて忠をつくさは、なんぞ我が身をかへりみん。義を知りて武勇をなさば、なんぞ人とあらそはんや。一命を國土にかへて死する人はまれなるべし。かはゝ大切なる命なれども、義理のためには即時に命をすつるは、人々のことなり。されは義理はとも重きことあらんや。此の理をわすれて、つねに我が身に執着し、まことの心なきものに、終にとくゝるこゝをしらず、苦にくるしみをかさねて、むなしく三途の古郷にとゝまる事、

あさましきにあらずや。人と生れたらむ思ひ出に、義をおもくして二命をかろんじ、己れには離れて、まことの道に入るべし。おろかなるかな、當世の人の有様をみるに、たはふれの物がたりにも、主人をそしり、身のうきことをいふたぐひ多し。此の言葉のみなもとをみれば、欲心むねにみち、愚痴心身にあまりて、みたりに我とはちをひひあらはすのみなり。信有るところまでこそかなはずとも、なんぞはぢをもちざらんや。縱令惡しき主人につかへて、のがるゝところなくとも、更に主人の科にあらず、先世の我が業因を觀せよ、却てはちにあらずや。或は一生病人となり、また盲目非人と成りて、朝夕くるしむ人多し、かやうのものは、誰か咎なりとうらむや。ひとへに我が咎なり、かへすがへすあやまる事なく、萬事を放下(はうげ)して、忠孝のみちに入るべし。まよひの心にまかせて、妻子を思ふには、あはれみてもあはれみてもあきたらず、忠を盡くし、親を思ふことは、まなひてもまなひてもあさし。されば、まよひはまことよりいづるにや、はらへどもはらへどもつきず、仁義を行ふことは、いましめてもいましめてもまことなし。是れ皆六根にさへられ、己に迷ふて、まことをくらます也。なり。十二時中つとめて己れにはなれ、まことの道に入るべし。まことはさらに邪なし、まことの人は唯だ無事の人なり。うたに、「たゝありの人はそのまゝ佛なりはとけをみれはたゝありの人」。

五　分限を見分けて其の性々を知るべき事

分限を見わけて、其の性々を知れ。まつよき友といふは、いかにも心けだかく、みつからをわすれて、他のためを思ひ、なさけをさきとしてあはれみふかく、是非分明にして、心やはらかに、忠孝の行たゞしく、萬人にまこと有りて、あしき人をも捨てず、高位に有りてまさる心なく、へりくだりて驕る心なし。世のつねの人は、義理を知りて世にそむかず、人のあさけりをかへりみて身をつゝしみ、愚痴心をいましめ、かりにも道をまなひ賢なるをうやまひ、知有るにまたしく、忠孝の行そむかず、仁義を心にかけ、家職をまもつて命をかろんじ、名を萬代にのこさんことを本意とす。愚の人は、忠孝をつめむるに似て志さだまらず、仁義をまなひてまことなし、名利を專として、一たひはほをしり、一たひはわすれ、一方へは義理をたゝし、一方へはそむき、ものをあはれむ心あれとも、また人の憂をかへりみず。またじき中もそむきやすく、機にまたかふをよしとして、たゝまくしてまたがはざるをにくみ、我がさいかくをあらはして、人にまさらんことを思ひ、理非を知りても分明ならず、好むかたへはひかれ、きらふかたへうとくまて、やはらく心すくなく、

無欲なれどもむやしく、たのもしけれども、其のかひなく、あさき心にまかせて、人のうへをはかれども、身のほどをたしかにさらず、分別おろかにしてたゝしからざるゆゑに、みたりに心うごきて、世にそむく事多し。下愚の人は、かりそめにも心やはらかなるよき人をあさけり、賢なるをにくみ。いやしきにさたしくさで、人のあしきをよろこび、秀つる人をそねみ、利根だてをおもてにし、人をはあさくみなし、身のうへにじまんさで、恩をばすみやかにわすれ、すこしのあたになかき怨をむすび、わづかのことにいかりをなし、それを却て利口にし、はぢをもさらで欲ふかく、是非をも更にわきまへず、物いふたびに非をあらはし、なさけさらぬをみめしてハ人をあやまち、身をそこなひ、咎なき人にうらみをなし、異見をすればはらをたてハおもてはげんを現はして人の爲めを思はず、總じて其の性々一やうにあらず。かやうの見分かなはずして、下々の人をも上々の人にくらべて批判し、或は人の僻事に我が心をみたしてまどふこと、更に分限を見わけざるもゝなり。たとへは莽將軍の上手下手、其の位さたまりたり、人々の分別もなんぞこれに異ならむや。人の僻事をにくまんならは、莽將軍の下手おしき手つかひするも僻事なりとにくまんや。されをもつて去るべし。いつれの人も行あしくせんとはあらねども、こゝろたらずして、

我か身をもはゝはずなり。たとへは貧しき人の過分のふるまひかなはざるがごとし。されはおのれが分限よりうへのはたらきなるべからず、とかく心のいたらざるもゝと心得て、結句あはれむ心有るべし。おのれすなはなるときは、うき世にあしき人なし、おのれ僻事なるときは、あしき人世に多し。うたに『わがよきに人のわるきかあらばこそ人のわるきはわが身なりけり』。此の歌、心の鏡なるへし。かくいふとて、とかをもるせとにはあらず、慈悲をもつて法をたゝし、科をあらためよとなり。畜類のうへにもみよ、馬は馬、牛は牛、鳥は鳥、それ〳〵のはたらきあり。非情草木もまた同じ。麻はおのつからすぐ、蓬はおのつからまがれり。藥となる草もあり、毒となる草もあり。是れいつれの所よりわかれたるにや、天地のめぐみはかはらねども、それ〳〵の差別あり、いつれを是とし、いつれを非となさんや。まことに萬物一体なることをしるべし。歌にいはく、『春雨はわきてそれとはそゝかねどちくさの草木はおのがいろ〳〵』柳は緑、花は紅。

六、一どゝまる所をはなれて徳有る事

どゝまるとてろをはれて徳有る事をしれ。みなそこ〳〵にどゝまりて、前後聞くして徳なし。渡世のいとなみも人のうへをみる時は、小利大損なることのみ多し。おかれとも身の

うへをしる人なし、小をすて大につかんことを思はゞ、とゝまるところに心をつけてはなれよ、かならず德を受くべし。たとへば碁の上手、盤中に目をくばり前後を分別して、十の石を捨て十一につくをみよ。下手は更に目見えずして、一目ををしみ、盤中の死ぬるをしらず、餘所へ心をくはることかなはず。されば愚人の行またこれに異ならず、まづ盲は心までくらくして、盲の間をはなれず、盲にまさらん事はかりをねがつて、なかく黑闇に落入る。女は又女の間にまかせて我執ふかく、うらみそねむ有りさま、愚痴なりとはみれども、いづれの人もかくのごとし。大は大につき、小は小につき、そのほとゝをはなれず、土民百姓はわづか一村二村の間に心をとゞめて、身上くらべ、分別を諍ひではなれず。武士はまた侍の間にすむて、わづか已れが友五十人百人の間をはなれずして、そのおもはく肝要として身上くらべ、分別諍ひて、うらやみそねむ心あり。出家はまた出家の間にとゝまつて、智惠をあらそひ、住持をのぞむて、つゐに出離をしらず。其の外人間のありさま、其の品異なりといへども、まよふ心は一なり。色を見て着し、聲を聞きて愛執の思ひをなす、いろよくあふらつきたる人、其の肉くさりて蛆となる、そのほねおそろしきかたちなり、其の心鬼畜のごとし、いづれの所に執心せんや。もとより女の性はひがめり、貪欲甚しくして、人我の相ふかく、迷ひの方へひかれて是非をしらず、たゞ利根にして心あさし。かれにしたがふときは、輪廻の業となり、そむく時は、怨敵となる。とにもかくにもつたなきものと知りて、おそれつゝしみてまとふことなかれ。かくいふとて女を捨てよとにはあらず、色に着してはちをあらはすことなかれとなり。女人は是れ諸佛の母、全くそしるべからず、我か僻事を改むべし。夫れ愚人の心は、更に人道にすむ事かなはず、多くは唯だ餓鬼畜生をすみかとして、緣に逢ふときは、修羅地獄に入りて、片時もやすきことなしとみえたり。然らといへとも、是れをよろこひてはなるゝ事をわきまへず。かりにもまことの理を聞きては、れそれ嘲りてのゝしる、あさましきにあらずや。明にこの理を知りて、うこ〳〵をはなれて立ちあかり、自由なる身となるへし、片時もとゝまることなかれ。うたに、『いつくにも心とまらはすみかへよながらへはまたもとの古さと』、こゝにもとゝまらず、かしこにもとゝまらず、はなれ〳〵て、落つるところをしれ。古語に云ふ、千峰勢到二岳邊一盡。萬波聲飯二海上一消。

七　己れを忘れて己れを守るべき事

己れをわすれて己れをわすれざれ。まづ生をひさぼり利を思ふときは、親子兄弟を忘れて、

（古語）聯頌集下　洞山麻三斤頌。

我が身を專とすゝ又好むところに隨ふては、己れを忘れてはぢをも顧みず、前後のことをもわきまへず、身命のはろびんことをもしらず、あさましき有りさま多し、かへす〳〵己れを忘るゝことなかれ。仁のをしへにいはく、自を忘れ他を惠み、あやうきを救ひ、窮まるをたすけ、なさけをさきとして、憐れむ心有るを仁とすといへり。しかるに愚者は己れを樂みて、人を忘るゝも名に、貪嗔邪見の心を專として、惡業煩惱をはなれず、日夜苦患休む時なし、心をつけて守るべし、一心の中に佛有り、二心の中に鬼あり、二心の中に地獄、餓鬼、畜生、修羅、人天あり。經に云ふ、三界唯一心。心外無別法。心佛及衆生。是三無差別と說きたまへり。されば此の心を戒め、善根を勤むるときは、佛果に至るなり。又心を恣にするときは、三毒の增長して、三途地獄に落入るなり。たゞ心に隨ふべからず、つゝしめて心をしたがへし。必ず心の師となるべし、心を師とすることなかれ。心の鬼惡に引て入る、戒めて猶はいましむべきは心なり、おそれても猶は恐るべし。或る物語にいはく、人のあまた大船にうちのりて大海を渡るとき、海上に赤面の鬼、額に眼二つ日輪のごとくひかりかゞやき、口は耳のねまできれ、角三つ生ひて、牙かみちかへて、其の形ひろべやうなきものゝ、波のうへをあゆみ來りて、汝等、我よりおそろしき物みたりや〳〵

（經に云ふ）華嚴經に出つ。

といふ。是れをみて船中の者共皆肝をけし、船底にたをれふす。其の中に一人道心者有り、すゝみ出て云はく、汝はおろかなるものかな、汝等百千合せたるよりもおそろしき八大地獄に、我を引てもかんとする我が心の鬼有り、汝是れをしるや〳〵といへば、彼の化物きえ〳〵と成りて失せにけりといへり。まことに身を思ふ心の中に惡業の鬼有り、一切の苦患有り、八萬四千の煩惱有り、つたなきかなや、愚闇の我等が心のかたちを造り出さんには、いかやうのかたちなるべきや、はや〳〵萬事を打捨て、身を思はぬ身となるべし。歌に、『身を思ふ心ぞ身をばくるしむる身を思はぬは身こそやすけれ』。また、『燃え出る嗔患のほむら消えやらで我と引きけん火のくるまかな』。

八　立ちあがりて獨りつゝしむべき事

立ちあがりてひとりつゝしめ。萬事を愼む人も、うき世のおもはくばかりにはぢて、外をかざり、內心のあやまりをかくすなるべし。かたのごとく世にそむかぬほどの人も、內心には科有るべし、心を敵にして、ひとりつゝしめ。心中のあやまり、人はしらねども、我れ慢に是れをしる、心をすまして是れを思へ、餘所の人は我にしられんことをはづ。されば我れなほぞ我れに恥ぢざらんや。此の理を忘れて、我れはまたはその人にしられんこと

をはづ。餘所の心と我が心更に別にあらず、己れに心もるるすな。歌に『なきなぞと人にはいひてありぬべし心のとはゞなにとこたへん』。

九、心をはろばして心をそだてよ。明々たる心を蒙々たる心に掩はれくるしむことなかれ。と

心をはろばして心をそだつべき事

〔原註〕明々たる心は、分別なくしてよく分別するなり。

〔原註〕蒙々たる心は、わたくしの妄分別なり。

〔原註〕殺とはおのれわたくしに克ちぬくをいふなり。

〔原註〕此文疑ふべからずといへども、念佛を期にして惡つくる者は、必ず彌陀の誓願にもるゝことを知るべし。一の譬あり、ある男、ふぐ汁を好て、毒と知りながら喰ふ。燕の藏ふくの毒消に妙なり、故につれに印置重々に入れて、身につけてはなさず、これを期にして、ふぐを喰ひけるが、ふと大毒にあたり、かの藏置をのまんとするに其の間なくして死しけり。これを見て考へ玉へ。念佛は燕藏毒消の如くふぐの毒は惡の如し。

きゝくにはろばせ。古語に云はく、殺生せよ殺生せよ、刹那も殺生せざれば、地獄に入ること矢のごとし。又歌に『さしいづるはてさきをれよものごとにおのが心を金槌にして』。さていかやうにして金槌を用ゐべきとならば、人間一生萬事皆夢なり、一念の妄心、永劫の苦因なりと眼をつけて南無阿彌陀佛と唱ふべし、是れ則ち金槌なり。一念彌陀佛、即滅無量罪と說き給へり。されば唯心の淨土、己心の彌陀といへり。我に有る彌陀佛念じ出すこと、難かるべきにあらずや。若し又信心つよくして、勇猛精進の心發つて、晝夜間斷なく念佛せむ人は、時節到來して、終に己身の彌陀に相見し奉り、則ち唯心の淨土に安住すべし。極重惡人。無他方便。唯稱彌陀。得生極樂。此の文うたがふべからず。

十、小利を捨て大利にいたるべき事

小利を捨て大利にいたれ。人間一生の行、皆我が身を思はぬはなし。いづれの古人も身をすてたるにあらず、身のためを思ふがゆゑに、行住坐臥、勤めてつゝしみ、德に至りて悅ふ。是れをしらずして名利にむさぼり苦むを愚人と名付く。されば身のためを思ふことは、何れも同じなれども、德の見やうにかはり有り、至れる人はまことのために身命を拋て、名利にとゞまらず、己を捨て大利に至る。愚人は欲の爲めに一命ををしまずして、一生の間、心をなやまし、身をくるしめて貪れども、一人として此の思ひみてるはなし、かなはざれども是れを捨る人むなしく、一生愁ひて、なか〳〵三途の業因を結ひて、苦海に浮沈する事は、夢中の身に心を住むる故なり。佛語に云ふ、一切有爲法。如夢幻泡影。如露亦如電。應作如是觀。誠に幻化の此の身なることをしらず、闇々として心をつくし、名聞利養を思ふこと、小利大損あさましき次第なり。佛出世まし〳〵て、是れをすくひ玉へり。佛祖の敎にしたがふ時は、大利を得ずといふことなし、心をしづめて是れを知るべし。夫れ三千世界といへり、此のうち大國の主となりたりとて、大なるにあらず、況や小國にさへみてざるをや。古語に云ふ、渺々滄海一粟。識二我生須臾。かくのごとく敎へおかれたり、眼をつけて此の理にいたるべし。さていかなるを大利といふとならば、三界出離して、四維上下、南北東西を我が物となし、竪に三際を窮め横に十方にわたるを大利といふ

なり。

盲安杖 終

鐵眼假名法語

解題

道聽和尚の物せる鐵眼和尚行實に據るに、禪師、名は道光、鐵眼その號なり。寛永庚午の正月朔日をもて肥後の益城郡に生る。父を佐伯淨信といひ、母某氏また淑德の譽れあり。禪師はじめて十三にして、郡の海雲法師に投して緇を披きぬ。のち京にのぼりて、偈く講肆にあそび、兼ねて外典に通す。明暦乙未の秋、たま〳〵隱元禪師の長崎東明寺に來りしを聞き、直に西に下り、衣をあらためて從ふ。また木庵、即非二大老に參し、臨濟三十三世の法燈をかゝげて、大に道俗を化し、その名天下に轟きぬ。禪師つゝにわか國に大藏の版なきをうらみ、二三子と共に刻藏のことをはかり、さま〳〵の苦辛をなめ、十八年の長きにわたりて、やうやくその功を成しき。精はしくは伴蒿蹊の近世畸人傳なゝに見えたれば、こゝにはあぶきつ。天和三年二月、衆をあつめて後事を囑し、一偈を打して遷化す。壽五十又三。法臘四十。寺院を掬むるもの八宇、瑞龍、寶藏、金禪、海藏、小梯、三寶、寶泉、延命等これなり。

その假名法語は、簡要にてこゝろさしふかき一女人のためにかいつゞられしものにして、元祿四年の秋、はじめて梓にありて世に出しぬ。その說くところは、心經の五蘊を明にするにあり、故に心經大意などゝ稱するものあれども、此處にはその書の名に從ひ、鐵眼假名法語とは名けつ。

假名法語

瑞龍　鐵眼禪師

心經にいはく、五蘊みな空なり、照見すれば一切の苦厄を度すと。この意は、五蘊本より空にして、なきものなることをさとりて、その理をあきらかにてらし見れば、一切もろ〳〵の生死の苦患厄難を度脫して、法身般若の躰にかなふといふ意なり。五蘊といふは、色受想行識の五なり、五のしなことなりといへども、唯身と心との事なり。はじめに色といふは身なり。のちの四は心なり。一切衆生は、本より涅槃常樂の躰にして、法身般若の智身なれども、此の五蘊の色心のまよひもるに、凡夫となりて、三界に流浪するなり。五蘊といひ、色心の二といへども、すべてはたゞひとつのまよひの事なり。

第一に色といふは、我がこの身なり。また世界の天地草木にいたるまで、形のあり、色のある物は、みな此の色のうちなり。楞嚴に一切衆生無始よりこのかた、己れにまよひて、物をして本心を失ひて、物のためには轉せらるといへり。此の意は、一切万法は、みな法身眞如の躰なる事をしらずして、かへつて天地の中の眞物とおもひて、その眞物の境界に

〔涅槃常樂〕涅槃は梵語、此に滅度と云ふ、不生不滅の義、常樂は常住、安樂の謂なり。〔法身般若〕法身、般若。解脫、これを三德といふ。法身は迷悟に由て增減せず生滅せず般若は梵語、此に智慧と云ふ、此の不增減不生滅の理

を覺了するを般若と云ふ。解脫は永く業累の繫縛を離れて自在なる云ふ。

さまよひぞ。物のためにわが心を轉せられて、さま〳〵の妄想をおこすといふ事なり。又古人、法身は形殼のうちにかくるといへり。形殼とは此の身なり。此の身は本より法身の躰なれども、法身なることを知らずして我が身と思へるは、法身を見がくして我が身と思ひ我が身にまよひて貪嗔煩惱をつくり、ふかく惡道にしづむなり。本より法身の如來なるを、まよひて萬物とおもひ、または我が身とおもふには、二重のまよひあり。まづ一重のまよひは、此の身は地水火風の四大をかりにあつめていつくり立てたるものなり。身の內の皮肉筋骨のたゝひは土なり。涙よだれ血などは水なり。あたゝかなるは火なり。出入の息と、うごきはたらくは風なり。此の地水火風をはれては、我が身といふべきものなし。たゝ今なりとも命をはりて、地水火風本にかへりぬれば、たゝ白骨となりていのちはとも我が身とたのむべものなし。かゝるあさましき白骨をわが身とおもひて、千生萬劫此のされかうべにつかはれて、地獄の業をのみつくりて、三途(さんづ)にしづみはつるはいおろかにあさましき事にあらずや。かゝる地水火風のかりなる身なる事をしらずして、我が身とおもひて、千萬年も死すまじきやうにおもひ、我が身をとかたく執著す、これ一重の凡夫のまよひなり。さてまた二乘は、凡夫よりも智惠かしこきゆゑに、此の身は地水火風のかりものぞと、よく見あきらめて、此の身をまことの白骨のやうに見なし、身においてちり程も執著の心なし。かつて此の身のために我執我慢をもおこさず、貪慾瞋恚をもおこさず、いつはりへつらひもなく、ねたみそしりもなし。かくのごとくのさとりはひらけぬれども、いまだ此の身の法身如來なる事をしらず、これによりて世尊、小乘をて大にきらひたまへり。かの法身の當躰をさとらざる故に、二乘の智惠にては、佛の內證、菩薩の境界は、未だ夢にも見ず、これまた二乘の二重のまよひなり。さきの凡夫のまよひとともには三重なり。二乘は法身にまよふてと二重、凡夫は法身にもまよひ、また二乘のさとりし處にもまよふ故に二重のまよひなり。菩薩は凡夫と二乘との二重のまよひをてにて、此の身をすなはち法身如來と見たまふ。これを心經には色即是空、空即是色と說きたまへり。色といふは此の身なり、空といふは眞空、眞空は法身、法身は如來の事なり。さては此の身すなはち法身、法身すなはち此の身といふ意なり。二乘は地水火風、本より法身の躰なる事をしらずして、地水火風は、非情の物なりとおもへり。菩薩の眼にて見たまふ時は、地水火風みな法身の眞躰なり。此の故に楞嚴には、性色眞空眞空性色と說きたまへり。色といふは地の事なり、性といふは、此の地は本より法性の躰なる故に性色といふ。性色なるゆゑにすなはち眞空

なり。また同經に水を性水眞空、眞空性水とときゝ、火を性火眞空、眞空性火とときゝ、風を性風眞空、眞空性風と說きたまへり。これもはじめの地のごとく、水すなはち法身、法身すなはち水、火すなはち法身、法身すなはち火、風すなはち法身、法身すなはち風といふ意なり。かくのごとくなれば、地水火風は、もとより地水火風にあらず、法身眞如の妙脉なるを、二乘と凡夫とは、まよひて地水火風とおもへり。もし地水火風、本よりほとけなる事をさとりぬれは、我が此の身はじめより法身なるのみにあらず、天地虛空、森羅萬象にいたるまで、みなことゝく法身の妙脉なり。此のさとりのひらけし時を、諸法實相ともいひ、草木國土悉皆成佛ともいへり。草木國土のみにあらず、虛空にいたるまで法身の脉なるを、まよひて虛空とおもへり。此のさとりのひらくる時、虛空とおもひしもさえて萬法一如のさとりとなる。このゆゑに楞嚴には、一人眞を發して源に歸すれは、十方の虛空一時に消殞すとゝき。圓覺經には、無邊の虛空、覺に顯發せらるとゝいへり。禪家には、大地平沉し虛空分碎すといへり。また極樂を黃金の地とゝきたまふも、此の事を凡夫のために名をかへてとかれたり。此のさとりをひらきて見れは、我が身は我が身ながら本より法身の脉にして、生れたるにもあらず。生れざる身なれば、死するといふ事もなし。これを不生不滅といひ、または無量壽佛といふ。生するを見、死すると見るは、これをまよひの夢となづく。我が身すでにそのごとくなれば、人の身もそのごとし。人間そのごとくなれば、鳥類、畜類、草木、土石までも、みなしからすといふことなし。水鳥樹林、念佛、念法、念僧の聲を出すと彌陀經にとき、また十方の諸佛、廣長の舌相を三千大千世界に出して、法をときたまふとのたまひしも、此の時の事なり。法華經の中に、諸法は本よりこのかた、つねにおのづから寂滅の相といひ、または法は法位に住して、世間の相は常住なりとゝかれたるも、みな此のさとりのひらけたるをのべられし處なり。よく〳〵坐禪工夫して、かゝるさとりにかなひ、色蘊のまよひをこえて、法身實相の脉にかなふべし。

第二に受といふは、納領を義とすとて、ものをうけをさむる事なり。これは眼耳鼻舌身の五根に、外の六塵の境界をうけをさむるをいふ。眼には色をうけ、耳には聲を受け、鼻には香をうけ、舌には味をうけ、身には觸をうけをさむるなり。此の受といふには、苦樂捨の三受といふ事あり。まづ苦受といふは、眼耳鼻舌身の上に、このまさるくるしき事をうけるをいふ。樂受とは、眼耳鼻舌身において、こゝろよくたのしみなる事をうけるをいふ。捨受とは苦にもあらず、樂にもあらさる事をうけるをいふ。たとへば道を行くに手をふり

て行くやうなる事は、苦にても樂にてもなし。そのごとく目に見ても何ともなく、耳にきゝ口にあぢはひても何ともなきやうの事を、みな捨受といふ。衆生はこの苦受樂受にまよひてくるしき事は目にも見ヒ、耳にもきかヒとおもひ、たゞ樂なる事を目にも見、耳にもきゝ、鼻にもかぎ、口にもあぢはひ、身にもふれんとはかりねがふが故に、人をなやまし、我が身をくるしめ、ぬすみもし、僞をもいひて、物をむさぼり、魚鳥の命をもたち、世界のさまたけともなる事をたくみて、日夜に地獄の業をつくるなり。これは樂をうけんとおもふ一念のまよひの意より、無量のくるしみを生ずるなり。世上のぬすみをするもの、酒をのみ、さかなをくひ、婬慾にふけりて遊女などを愛し、衣裳までにきらをつくさんとれもふわづかの樂をむさぼる心より、ぬすみをし、いつはりをいひ、つゐにその惡あらはれて、牢獄にいりせめにあひ、その身命をほろぼすは、すこしの樂をもとむる心よりおこれり。もとめおるはみな苦なりと古人のいへるは、この意なり。たとへば夏の虫の火に入るがごとく、淵の魚の餌をむさぼるに似たり。驚ばかりのむさぼりもとむる心故に、あたち身命をほろぼすなり。一百三十の地獄の苦、三品九類の餓鬼の飢、披毛戴角の畜生のすがた、弓箭刀杖の修羅のありさま、一としてむさぼりもとむる心よりおこらざるくるしみは

（三品九類）三品は無財、少財、多財これなり。炬口、針咽、臭口、針毛、臭毛、大便、得弄、得失、勢力、これを九類と云ふ。炬口、針咽、臭口は無財に屬し、針毛、臭毛、大便は少財に屬し、得弄、得失、勢力は多財に屬す。

なし。一滴のあまき樂をうけんとて、萬切のからき苦をうくるゝ、あさましき迷にあらずやなまた此の苦とおもひ、樂とおもふ事は、本より苦も苦にてはなく、樂も樂にてはなれはもも、まよひでみづから樂とおもへり。そのもろはいかにといふに、畜鳥犬野干などは、牛馬などの死してくさるゝを見るか、また人などの死してたをるゝを見ては、これをたゞひもなきものゝとおもふ故に、まづ眼にこれを見てよろこび、鼻にかぎ、口にあぢはひ、手足につかみてはまず〳〵よろこびて、これを第一の樂とおもへり。人の上よりこれをみれば、むさぐけがらはしき事かぎりなし。もしかふるくさるものを、人にあるべくはじめば、そのくるしき事たゞひなかるべし。人にくはじむれは、かはをにくるしきくさるものを、畜鳥は、かへつて樂とおもひてむさはりくらふ。これ樂にあらざるもゝ、その心おろかにいやしくして、苦を樂とおもへるなり。人間の樂とおもふ事もそのごとし。おろかなる心故に、妻子におぼれ、財寶にまよひ、魚鳥をくふてたのしみとす。佛菩薩よりこれを見れば、人の上より畜鳥を見るよりも、なほあさまし。これをもつておしはかれば、まをへる人の樂とおもふは、苦をもつて樂とおもへるなり。また人の大罪なををなせし故に、おはやけのいましめにて、その罪人の子や妻を、目の前にてころしつゝ、料理でこれをくは

しめは、目に見るも、口にくふも、さてそはくるしかるべき。人の魚鳥をくふもそのごとし。さとりの眼よりてらしみれば、魚鳥も法身の如來にして、もとより諸佛と一躰なり。また一切衆生を、諸佛菩薩は同躰の大悲故に、一子のごとく見たまへり、かゝる一切衆生なるを、まよへる凡夫のあさましさは、よきさかなとて、肉をさき、骨をくだきてのみくふて、大によろこぶわりさまを、佛の眼より見たまへば、さながら鬼にてとならず。わが子のくびをきり肉をさきて、目に見てもよろこび、鼻にかぎ、口にあぢはひ、かべつてこれをよろこびとす、これを顛倒の凡夫といふ。かゝるしわざを樂とおもへるは、まことは樂にはあらず、これ大なるくるしみなり。かくのごとく苦と樂との二の間にまよふをば、第三の受蘊となづけたり。三界流浪の凡夫のならひは、すべてこの苦樂の間をのがるゝ事あたはず。そのもろは、さく花を見て樂とおもへば、ちる時はやがて苦なり。出る月を見てたのしめば、入る山の端はまたかなし。逢ふ事をよろこべば、わかれはかへつてうれひなり。さかえたるをたのしむ人は、おとろふる時またくるしむ、富める人はあるになやまさるゝ、へつらふもくるしみなれば、おごるもげにくるしきわざ、こひしきも苦なれば、うらめしきもまた苦なり。大なるかな苦樂の三受、三界一切の衆生、その中におぼれてつゐに出づる事あたはず。生ずるを生苦となづけ、年よるを老苦といふ。やまひは病苦にして、死するは死苦なり。男子にも苦あれば、女人にも苦おはし。農人も苦なれば、諸職もこれ苦なり。奉公も苦なれば、牢人はなほ苦なり。臣下もくるしければ、君王もまぬかれがたし。在家のみくるしきにあらず、出家もまたくるし。その中にすてしくるしみのかろくしてやすめるを、まよひて樂とおもへるなり。たとへばおもき荷物をになへる人の、おろして樂とおもふがごとし。またつよくゐづらひし人の、いたて樂といふがごとし。別に樂といふべき事はなけれども、苦のやすまりたるを樂とおもへり。また酒をのみ、さかなをくひ、嬉戯などにふけりてこれを樂とおもへるは、たとへばかもきかさをゐづらふ人の、火にてあぶり湯にてあらひて、これを樂とおもふがごとし。かもきはいたきよりはましなれども、かもきをげにはくるしみなり、あぶるかあらふかして、これを樂とおもへるは、苦を樂とおもへるなり。まことはかさをかふむる人の、あぶるあらてこゝろよしと思ふさかさまの樂は、かつてなきてそげには樂なりけれ。此のことわりをよく悟りて苦樂の二をこえぬれば、第三の受蘊の迷をはなれて、涅槃の大樂にいるなり。」第三に想といふは、思想とて人々の心中に日々夜々におこる妄想なり。ひるは妄想となる

り、一夜は夢となる。みな人、夜の夢はがり、實なきいつはりのものにて、畫おもふことは、みなまことなりとおもへるなり。これ大なるあやまりなり。まよへる人のおもふことは、ひるおもふことも、夢に同じくして、すべて跡なき妄想なるをしらずして、實とおもへるなり。妄想といふは、妄は虛妄とて實にはその跡なきものにて、あるに似たるものを妄といふ。たとへばかげぼうしのかたちに似、夢のうつつに似たるがごとし。すべてみなきものなれども、夢のうちにはあるに似たり。かげぼうしはなきものなれども、月日やまたは燈火のひかりにむかへば、やがて形にかげいできて、形もけば、かげもき、かたちとゝまれば、かげとゝまる、鏡や水にうつるかげもそのごとし。本よりきはめてなきものにて、たしかにあるに似たるなり。人の妄想もそのごとく、まことはすべてなきものなれども、おもひいたせるその時は、たしかにあるに似たるなり。にくしとおもひ、かはもしとおもひ、うらめしきも、ねたましきも、てひしきも、もかしきも、みなことゝくく妄想にて、夢見る心にかはる事なし。我が本心のうちには、かゝるさまゝゝの妄想の本よりたねてなき事は、鏡のきよきがごとく、また水のすめるに似たり。此の本心をさとらざるゆゑに、その本心の上にうつる妄想のかげをとゞめて、まことゝおもひてこれをかたく執著

する故に、その妄想いよゝゝさかんになりて、まよひますゝゝふかきなり。にくしとおもふも、かはもしとおもふも、みなみづからがおもひなしなり。此のおもひなしのところを、妄想となづけたり。にくきもかはもきも、おもひなしいふそのいはれは、なくいまにくしかはもしとおもふ人も、いまだしる人にもならざるさきには、にくゝもなくかはもくもなし。はじめてちかづきになりぬれども、かりそめのしる人にて、いまだしたしまぬその間は、猶はいまだそのしななし。次第ゝゝになれしたしめば、我が心にかなへる人には、したしみの心ふかくして、かはもき心ひいてくるなり。事にてそよれ、しなにてそよれ、もし愛執の道などなれば、我が命にもかへぬばかりに、いとはしさのまさるもあり。かやうにいとはしき心になりぬれば、いとはしさが必定にて、何とおもひめぐらせども、いとはしき心にて、にくきところはさらになし。さてはやいとはしきにきはまりて、たとひ百千萬切をふるとも、この心はかはるまじきかとおもへば、さはなくしてそのしたしき中なれども、何事ぞこゝろにたがふ事ありて、あらそひをなして、けんくは口論におよぶか、あるひは愛執の道などにて、よそに心のうつりなどすれば、はじめいとはしかりし心のふかきはど、今のにくみもまたふかし。そのうらみにくみのふかきあまりには、つゐには身命

そうしなはんとれもふまでに、うちみもにくみもふかきなり。かゝる道理をもつておしはかれば、いと淺しかりしも妄想にして、夢のごとくの儚りなるもゑに、にくしとおもふもまた妄想なり。もしいとはしとおもひし必いつはりにあらずは、しばらくの間に引きかへて、にくしとはおもはじ。にくしとおもふかまことならば、はじめにいとはしとはおもはじ。いとはしきもにくきも、まことは妄想なる故に、その必さだめなく、夢のごとくにうつりかはるなり。かゝる妄想の夢にばかされて、むねをこがし、身をなやまし、つまきは命をもうしなふ、あさましきまよひなり。いとはしきもにくきも、かくのごとく妄想なれは、をしきもはしきも妄想なり。あるひはうらみ、あるひはねたみ、あるひはよろこび、あるひはかなしむ、いづれか妄想にあらざるや。この妄想の夢にまよひて、たかきもいやしきも、ものをしれるもしらざるも、老いたるもわかきも、男といひ女といひ地獄のたねをつくらぬはなし。この妄想を夢ごとしらざる故に、無始久遠のいにしへより、今生今日にいたるまで、その輪廻たえずして、地獄におち餓鬼となり、畜生にむまれ修羅となる。されば佛になるも地獄におつるも。その源をたづねれば、此の妄想のあるとなきとなり。よく〳〵眼をつけて、此の妄想のわざはひをなす事をしり、また妄想の夢のごとくにして、

全躰なきものなる事をあきらむべし。世上のおろかなるもの〳〵、ぬすみをして王法のいましめにあひ、今生にてはは苦をさちし、來生はなかく地獄におつるも、物をむさぼる一念の妄想なり。また人むはんなどをたくみて、天下國家をくつがへさんとはからひて、その身もふかき罪にいり、妻子兄弟眷屬までにたえがたきくるしみを見するも、たゞ一念の妄想なり。かゝるむはんなどをたくまんとおもひいたす最初の一念は、たゞこのけがらはしきものごとくにして、きはめてかすかなるたゞ一念の妄想なり。此の一念の妄想をわざはひの本ごとしらずして、ひたとおもひかさねる故に、はては一天にみつる雲のごとくにして、いよ〳〵おもひやめがたし。その最初の一念のとき、やれ妄想よとあきらめしりて、むねの内にてけさん事は、何よりもつてやすき事なり。合抱の木は毫末よりはじまるとて、五抱も十かゝひもまはるほどの大木なれども、その木のはえいづる時は、針の尖のごとくなるすこしばかりの芽なり、そのきざしの出づるときは、もびをもつてかるくぬきすつるもやすきなり。もし大木となれる時は、たとひ千人萬人のちからにてもたやすくはぬきがたし。妄想もまたこれに似たり。最初のとき一念の時、はやくおもひすつべし。又妄想のわざはひをなすものごとく、ひたとおもひかさねて、大に國家のあだともなる時は、その

わつらひおほき故に、大木のごとしといふといへども、大木のごとくにかたちありて、のぞきかたきものにはあらず。たとひおもひかさねたる妄想なりとも、はちさんとおもひておもひすつる時は、日の出て闇のはるゝがごとく、さらに造作はなきものなり。これを千年の闇室に燈火をともすにたとへたり。やみひさしとてともし火をともす時、はれがたきものにはあらず。妄想もそのごとし、一念心をひるがへせば、無始久遠の妄念も、刹那が間にはるゝなり。このことわりをわきまへて、夢の妄想をおもひすて、さとりの心にもとづくべし。この妄念をすてずして、ひたとおもひかさねれば、來生の事はさておきて、今生にて鬼となり、蛇となる事ためしおほし。女をとりわけ罪のふかきといふは、妄想の心をおもひすてかねる故なり。百億の三千大千世界も、衆生の妄想よりおこり、二百三十六の地獄も、人々の妄想より作りいだせり。我れと妄想の火をおこして、百千萬劫その火に身をこがすは、あさましき凡夫のありさまなり。此の妄想をおもひすて、第三の想蘊をこえて、さとりの田地にいたるべし。

第四に行といふは、行は遷流を義とすとて、わが心の生滅してうつりかはるをいふなり。こゝろに妄想のおもひあれば、その心刹那もとゞまる事なくして、頻りにうつりかはるなり。たとへば水のながれとゞまらざるがごとく、燈火の刹那〳〵にきえゆき、まだゝきの間もとゞまらざるに似たり。人々の朝より夕べにいたるまで、もやがてもひつゞけてうつりかはる處を意をつけてよく見るべし。さながら電光石火のごとく刹那〳〵にうつりかはりて、とゞまる事はさらになし。一切有爲のまよひの法は、みな行蘊の遷流なれば、無常にして念々にうつり、生滅時々にをかして、しばらくもとゞまらず。たとひあらき生滅の心はうをろかなる凡夫の心にもしられぬべし、微細の生滅の念々にうつりかはる事は、凡夫二乘の眼には見えず。その心にかくのごとく生滅あるものにて、心より生ずる諸法なれば、萬法もまたうつると見る、圓覺經に、雲はやければ月はとび、船ゆけばきしうつると說きたまへるは此の意なり。雲のゆく事はやければ、月のうつりはとぶが如く、船の行く事すみやかなれば、岸も山もうつるに似たり。これ山のうつりうごくにはあらず、我かのりたる船の行く故なり。我が心の雲はやき故に、眞如の月はとゞまる見る。諸法は本よりの實相にして、常におのづから寂滅の相なれども、三世うつりかはるを見、四時のゆきまろぶるしなを見るは、みな行蘊のまよひなり。涅槃經に、諸行無常是生滅法とときたまふるは此の事なり。諸行とはすなはち行蘊なり。行蘊の生滅遷流故に、一

切万法うつりかはりて、刹那もとゞまる事なきをいふ。此の諸行の有為生滅のまよひ、そ
とゝまく滅じをはらざれば、寂滅無為の涅槃の大楽あらはれず。諸行の生滅滅じをはる時、
寂滅の法現前じて万法一如、諸法實相の涅槃の妙楽現前するを、生滅滅已、寂滅為楽とも
きたまへり。かゞのごとく我が身我が心も、又一切の万法も、常住法身の體にして本より
生滅はなきものなるを、此の行蘊のまよひ故に、眞如の躰を見つけずして、三界生滅の万
法をおもへり。行蘊のまよひをこえぬれば、まう我が心常住にしてうつりかはる事なし。
我が心移りかはらざれば、諸法も又常住なり。されば我が本心のうつりかはらざる事は、
たとへば鏡の本躰に似たり。明かなる鏡の中に終日かげのうつるを見れば、天をうつし、
地をうつし、花をうつし、柳をうつし、人間をうつし、鳥獸をうつし、さまゞの色かは
りゆくなりとなりて、刹那もとゞまらざるに似たれども、その鏡の本體は、鳥獸にもあ
らず、人間にもあらず、柳にもあらず、花にもあらず、地にもあらず、天にもあらず、た
ゞ明々としてくもりなき鏡の全體なり。我が本心の万法をうつしてらしてゐる万法の差
別にもあづからず、生滅にも昏でうつらざる事を、鏡のたとへにて知りぬべし。まよへる
人は、本心中にうつる影のみを見て、本心の鏡を見る事あたはず。圓覺經の中に、六塵の緣

影を自心の相とすゝときたまふは此の事なり。さてまた鏡にうつるもろ〳〵のかげは、全
體虛妄にして、なきものなれば、その影をはらひすてゝ、はじめて鏡を見んとおもふは、又
きはめて愚人のわりさなり。花や柳のかげは、うつらばうつしながら、去來もなく、色
香もなき、明鏡の全體をよく見るべし。これを法身となづけ、眞如といふ。眞はいはく、
眞實にして僞妄にあらざる事をあらはす。如はいはく、如常にして變易なき事を表すと、
唯識論にいへるは、此の眞如の妙體なり。また金剛經には、如來といふは、來るとゝろな
く、また去る所なしとゝきたまふも、此の法身如來の事をのべられたり。我が本心すでに
そのごとくなれば、萬法もまたそのごとし。萬法を天地森羅萬象と見るは、これうつれる
影なり。萬法の全體はこれ明鏡なり。影にまよふを凡夫といひ、鏡を見るを聖人といふ。
たとへをとりてこれをいはば、金にてさまゞの物のかたちをつくりたるがごとし。その
形よりこれを見れば、鬼はおそろしく、佛はたつとく、若いだるはかなしげにみ、わかき
はかほるばし。鶴はほそながく、鴨はあしみじかし。松はなほく、おどろはさかり。柳、
はたをやかに、花はみやびやかなり。金のかたよりこれを見れば、鬼もこがね、佛もこが
ね、男女の差別もなく、君臣の高下もなく、つゞるのながき短金なれば、鶴のみじかきも金

なり。花も柳も樹もおなじかるべし。たゞ一體の金にして、露ばかりも差別はなしがたし。萬法もまたそのごとし。眞如のかたちはかたちなし。たゞ黄金のごとくにして、毛頭も差別なし。萬法の方よりこれを見れば、たゞ黄金のごとくにして、毛頭も差別なし。萬法の方よりこれを見れば、さま〳〵のかたちわかれたり。衆生はそのかたちにまどひ、諸佛はその眞如をさとる。眞如の體の黄金をさとれば、さま〳〵の差別のかたちはあるにまかせて、たゞ平等にして一味なり。きらふべき鬼もなく、たつとびべき佛もなく、したしむべきものもなきものなるに、うとんずべき人もさちになし。何をかきらひ、何をかこのみ、たれをかそしり、誰れをかはめん。恨みもなく、ねたみもなし。一切もろ〳〵の煩惱は、斷ずる事なけれども、おのづからたえてさらになし。たとへば日の出たる時、闇をのぞかんとはせざれども、そのやみおのづからなきがごとし。煩惱をのぞきまよひをさらむとはせざれども、唯一の實相にして、まよひはおのづから不可得なり。そのかみ二祖これを得て安心し、六祖これをさとりて衣をつたへ。金剛經には、三世不可得なる故に、諸法實相なり。法華經には、諸法實相といふ。これ表裏の言葉なり。三世不可得なる故に、諸法實相なる故に、三世不可得なり。妙なるかな如來の金言、心をとゞめて見るべきなり。また本心の生滅去來をはなれて、常住なる處をよくさとりぬれば、心中にうつるかげも

〔二祖〕神光慧可禪師、初めて達磨に參して曰く、我心未だ安からず、願ふは我が爲めに安心せしめよ。達磨曰く心を持ち來れ汝が爲めに之を安ぜん。神光曰く、心を求むるに不可得。達磨曰く、我れ汝が爲めに安心し畢る。

だ常住不滅なり。その故いかんとなれば、森羅萬象の差別、古往今來の生滅のかげは、本よりこれ虛妄なる故に、きたる事なく、また去る事なく、生ずる事なく、滅する事なし。すでに生滅去來なき時は、もろ〳〵の差別もまたある事なし。鏡の影をもつてそのことわりを心得べし。かげのはじめてうつるを見る時、その影鏡の中に入り來るにあらず。はじめすでに入り來らざる影なれば、今また出でさるべきことわりなし。影に本より出入去來なき故に、鏡は本より鏡ばかりにしていつゐにかけになりたる事なし。影にならずしてかげをうつす鏡なれば、森羅萬象歷然としてたゞ事なし。これうつすともいひがたく、またうつさぬともいひがたし。金にてつくれるいろ〳〵のかたちの鬼にもあらず、また佛にもあらずして、また鬼の形ともなり、佛のかたちともなるがごとし。あるともいひがたく、なしともいひがたし。これを如幻の萬法といふ。幻とは術道にてもろ〳〵のいきものなどをつくりいたすをいふ。術道にてつくりいたせるいきものなれば、あるともいひがたく、なしともいひがたし。なきものとひはたをすれば、眼前に鳥けだものとなりてとびはしる。あるものとひはんとすれば、まことの鳥けだものにはあらず。あるひは木のきれ、手巾などを術道にていきものとなしたるなり。いま此の三界の天地万法、ならびに人々の身にも

〔術道〕幻術のこと。天竺にて盛に行はれたることあり。

〔心眞如門〕心眞如門、心生滅門とこれを一心二門と云ひて起信論に出つ。

〔生住異滅〕物の始めて生ずるを生と云ひ、暫くその形にてあるを住と云ひ、その形の異

たるまでをそのごとし。一心の本躰よりこれを見れば、まことに本來無一物にして、一塵をも立せざる實際の理地なる故、諸佛もなく衆生もなく、古もなく今もなく、天にあらず地にあらず、自にあらず他にあらず、法界平等一相なり。金にて造れるものを金のかたより見るがごとし、これを心眞如門といふ。万法のかたよりこれを見れば、天地日月位をわかち、森羅萬象しなことなりて、花はつねに紅、柳はいつもみどり、火はあつく、水はひややかに、風はうごき、土はしづかに。松はなほく、おどろはまがり、鵠はしろく、烏はくろく、天はたかく、地はひろく、佛あり、衆生あり、我といひ、人といひ、春夏秋冬のをり〳〵、青黄赤白のいろ〳〵、ひとつとして亂ることなし、金を見ずしてさまざまのすがたより見るがごとし。これを心生滅門といふ。一切もろ〳〵の衆生は、この萬法の諸相に耶ひて、目にみてはむさぼり、耳にきゝてはあらそひ、鼻にかぎ、舌にあぢはひ、身にふれて、そのものごとに貪着して、さらに此の万法の夢幻泡影のごとく、鏡像水月のごとくにして、幻化虚妄なる事をしらず、胎卵濕化の四生をうけ、生住異滅の四相にうつされ、五欲の境界に着して、六根の罪業をつくり、千生萬劫地獄餓鬼のほのほに身をこがし、生々世々畜生修羅のくるしみにしづみ、あるひは人間に生れども、四大和合の色身を我とお

化するを異と云ひ、遂に壞滅するを滅と云ふ。

〔五欲〕色、聲、香、味、觸または財、色、食、名、睡を云ふ。

もひ、六塵虚妄の影像を心として、生老病死念々にをかし。春夏秋冬時々にうつり、みぢりのかゝみたちまちしろく、花のかんばせつゐにしぼみぬ、朝のつゆときえ、夕のけぶりとのぼる。かゝる無常轉變の浮世は、電光石火の我が身、しばらくもとゞまることあたはず、刹那もしづかなる事なくして、水の時々にながるゝがごとく、ともし火の念々きもるに似たり。これまさしく行雲のすがたなり。しかるに衆生の三界に流轉するは、万法の幻化をしらずして、その夢幻の六塵に貪着しゝ、十惡五逆の幻業をつくる故に、地獄餓鬼の幻果をうく。わが身本より幻なれば、そのこゝろもまた幻なり。そのこゝろ既に幻なれば、その煩惱もまた幻なり。煩惱本より幻なるもるに、その惡業もみな幻なり。惡業をとり〳〵幻なれば、三途の苦果もこれ幻なり。三途すでに幻なれば、人間天上もまた幻なり。三界の生死幻なれば、四生の因果もこと〳〵く幻にして、一大法界のそのうちに幻にあらざるものあることなし。衆生幻業をつくりて、幻苦をうけるもるに、諸佛幻慈をたれて、幻法をとき、幻苦をすくつて、幻樂をあたふ。これを涅槃の大樂といふ。この大樂をうくる事は、その幻法をしる故なり。衆生は幻法にさとふ故に、幻業によりて幻苦をうく。諸佛は幻法をさとる故に、幻苦を脫して幻樂をなす。幻法にまよふ衆生は、夢幻の生滅にはかな

れて、生死無常の行苦を受けて、行蘊の遷流をなす。幻法をさとる諸佛は、夢幻の生死を涅槃となして、行苦を滅して常樂にのぼる。いかんしてか生滅の行苦もつて、涅槃の常樂となすとならば、これ別に造作にあづかるにあらず、唯萬法の遷流、生死の法を徹底夢幻としればなり。このゆゑに圓覺經にいはく、幻としればすなはちはなる、方便をなさず。幻をはなるれば、すなはち覺なり。また漸次なしと。このゆゑいかんとなれば、三界萬法すでにこれ幻なるゆゑに、幻は本より生ずる事なし。すでに生せぬ万法なれば、いづれの時か滅する事あらん。すでに生滅去來にあづからず、あに不生不滅の涅槃にあらずや。すでに不生不滅の躰なれば、何ぞ是非得失の沙汰あらん。本より生死なきゆゑに、涅槃となふもかりの名なり。生死にゆゑあらざれば、煩惱菩提のわかちもなく、衆生諸佛のべつもなし。生死のわづらひは煩惱なり。煩惱なきが故に菩提もなし。煩惱もなく、生死もなければ、何をか衆生となづくべき。衆生のさとりたるを諸佛といふ。本より衆生にあらざる故に、いまさとりて諸佛といふべきこともなし。されば悟といふ事は、かくのごとく人々の本より迷はずして、たゞ本のすがたなる事をたしかに見つくるをいふなり。圓覺經に、始知衆生本來成佛と說かれたるこの意なり。本來成佛とは、本より佛といふ高

なり。本より衆生にあらざる故に、佛といふべきやうもなけれども、本より迷ひの衆生にあらざる事をしめして佛となづけたり。この故に生死もなく、涅槃もなしといへども、凡夫のはかりがたき、奇妙のさとりの躰なしといふ事にはあらず。楞伽經に、たとへば牛にあらざる馬の性のごとく、馬にあらざる牛の性のごとしといへるはこれなり。此の意は、たとへば牛はあらずといへばとて、馬の性なきにはあらず、馬にあらずといへばとて、牛の性躰なきにはあらず。いま生死涅槃にあらず、煩惱菩提にあらず、衆生諸佛にあらずといふもそのごとし。これみな牛にあらずといふがごとし。かやうに生死涅槃等の牛にあらずといへばとて、不思議奇妙のさとりの馬の性躰なしといふ事にはあらず。またたとへば夢みる人にむかひて、汝が見る所の物は、一切みなまことのものにはあらず。天地と見るも、實の天地にあらず、草木國土と見るも、まことの草木國土にあらず、我と見、人と見、苦とおもひ、樂とおもふ、みな實の事にあらずといはん時、かの夢見る人これを聞きて、さては天地もなく、草木國土、我人もなくして、空なる處を、さめたるまことの處といはんかとひふに似たり。それにもあらず、これにもあらずといふは、夢の内に見る事はすべて跡なき妄想にて、眞實の物にはあらざるに、夢の心にはまことの物とおもひて、その物

にとりつきて、苦とおもひ、樂とおもふ。故にその夢をさまして、さめたる時の眞實の天地世界をしらしめんためなり。いまを迷べる人に向ひて、生死涅槃にあらず、衆生諸佛におらずといへば、さては一向斷無にして、空なる處をまことのさとりといふかとおもへるは、夢みる人の我が見るところすべて眞實にあらずといはゞ、天地世界空にしてすべてなき處を、眞實のさめたる境界かといふかといふに似たり。さとりで迷の夢ぼたと一度さめざれば、そのさとりのありさまをたしかにしる事あたはず。法華の中に如是相、如是性、如是躰、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等と說きたまへるは、まよひの夢のさめたる時のすがたなり。是れを法は法位に住して、世間の相常住といふ。また衆生見劫盡、大火所燒時、我此土安穩、天人常充滿といへる土の意は、まよひの衆生の眼には劫末になりて、此の世界のやぶるゝ時、無間地獄より火おこりて、初禪天までやきはらぼすと見る時、釋迦如來の御眼よりは、此の世界安穩にして、天人も人間もみちゝゝて、園林もろゝゝの堂閣、種々のたからの莊嚴ありて、寶樹には華果おほく、衆生その中に遊樂す、諸天天鼓をうちてつねにもろゝゝの伎樂をなし、曼陀羅華をふらして佛をよび、大衆に散じ、その後が無量のたのしみありと見たまふ。同じひとつの水なれど

〔初禪天〕 初禪、二禪、三禪、四禪、これを色界の四禪と云ふ。而して初禪二禪三禪に各三天あり、四禪に九天あり、之を色界の十八天と云ふ。

〔曼陀羅華〕 曼陀羅は梵語、此に適意と云ふ、見る者心悅ぶ故に、又は白華とも云ふ。

も、餓鬼の眼には火と見るに、人は本のごとく水と見る、まよはざれば、三界の火宅にはあらずして、清淨の淨土なれども、まよひて三界六道と見る。餓鬼のみづを火と見るがごとし。問ふていはく、こまかなるさやうのことわりをきけば、大かたはその道理心得られて、我が身も本より佛にして、世界もむかしより淨土ならん事うたがひなし。しかりといへども有爲の世界のうつりかはるを見、我が身も生老病死にあづかる時は、生滅の行苦いまだはなれざるに似たり、いかんしてか此の行苦をばはなれて不生不滅にいたるべきや。答へていはく、さやうの心得はこれ信解とて、分別にておしばかりて、すこしさとりのさまを心得たるに似たれども、いまだまことのさとりひらけざる故に、無明の夢さめやらず、しかる故にそのことわりをあらましは知りながら、夢幻の我が身において、我執我慢もはなれず、憎愛是非も猶はふかし。夢幻の境界にまよひて、やゝもすれば得失利害の心をおこして、三途の業をつくる、みな夢中のすがたなり。圓覺經に、いまだ輪廻をいでずして圓覺を辨ずれば、彼の圓覺もまた輪廻に歸すといへり。此の意はいまだその心さとらずして、その分別の心をもつてかのさとりの圓覺の跡を辨別し、思量すれば、かの圓覺もまた輪廻となるといふ意なり。眞實にさとりの跡にかなはんとおもはゝ、一切の知解情識をすてゝ、

是非邪正に心をとめず、銀山鐵壁にさし向ふがごとくにして、眞實堅固の志をおこし、一則の話頭を提撕して、前後左右をかへりみず、寢食寒暑を忘れて、疑ひ來り疑ひさちぬ時節因緣到來して、忽然として曠劫以來の無明の漆桶を打破せんとき、はじめて長夜の夢さめて、掌を打て呵々大笑して、本來の面目をあらはし、本地の風光をあきらめ、千生萬劫の本意を遂くべし。たゞ大眞實の心をおこさずんば、此の無明をやぶりがたし。むかし長水尊者、楞嚴の清淨本然、云何忽生、山河大地の文を疑ひて、瑯琊の禁覺和尚に問ふていはく、いかなるか是れ清淨本然、云何忽生、山河大地と。瑯琊答へて曰く、清淨本然、云河忽生、山河大地と。長水言下において桶底の脫するがごとく、忽然として大悟したまへり。それまさしく此の行蘊をえられしすがたなり。楞嚴の文の意は、清淨本然とは此の世界は本より清淨本然の淨土なりと、楞嚴會上において世尊說きたまひし時、富樓那尊者問ていはく、如來ののたまふがごとく、此の世界清淨本然の淨土ならば、いかんぞたちまちに山河大地、もろ〳〵の有爲の相を生じて、かくのごとく遷流生滅するやといふ意なり。長水そのまへは、行蘊の夢さめざりし故に、此の文にふかく疑あり、しかる故にそれをあげてとひたまへば、瑯琊和尚の答によりてはじめてかの夢をさまして、清淨本然の處

〔富樓那尊者〕富樓那は梵語、此に滿願と云ふ、釋尊十六弟子の一人にして說法第一と稱せられぬ。

を見られしなり。むかし僧あり、古德に問ていはく、起滅してといらまざる時いかん。古德答へていはく、直にすべからく寒灰枯木にし去るべしと。また自餘の古德に問ていはく、起滅してといまらざる時いかん。德答へていはく、瞎漢何れの處かこれ起滅すと。僧言下において大悟すといへり。これみな行蘊によつて、本分の田地にかなへる人のありさまなり。

第五に識といふは、是れすなはち色受想行の四のもとゐとなりて、三界六道を生じて人々の身より、森羅萬象、天地虛空までを生ずるまよひの根本なり。此の識は全脉本心にしていまだ脉には差別なしといへども、無明のわづらひある故に識といふ。もし無明のわづらひなければ、すなはち本心なり。識は幻夢のごとく、たゞこれ一心と圭峰ものたまへり。識といふ時は、幻とて術道をするもの、木のきれなどを取りて、いろ〳〵の鳥けだものとなすかごとし。まさしくいきものとなりて、とびはしるといへども、木のきれはもとの木のきれにて、鳥獸とはならず、ならずしてなれるやうに見する、これ術道の力なり。識もその如く本心を無明の術道の力にて、しな變るやうに見すれども、本心の脉は變ぜず。又たとへば識は人のねぶりたるがごとし。ねふらざれば夢を見る事なし。ねふる故にさまゞ〳〵の夢を

〔圭峯〕圭峯、諱は宗密、唐の人なり、

見て、いろ〳〵のなき事をあるやうに見するなり。識もまたかくのごとし。本來の本心にて無明のねふりのなき時は、三界の差別もなく、六道のしなもなく、地獄もなく、天堂もなく、娑婆といふ事なき故に、何に對してか極樂ともいはん。生死本よりなき故に、涅槃といふ名もつけがたし。煩惱はじめよりおこらざれば、菩提をもとむべき事もなし。もとより衆生とならざれば、佛となるべきやうもなし。つひにまよはぬ心なれば、何をか今さらさとるべき。一切みなかくのごとくにして、いふにいはれぬめでたき本心の躰なり。この處をしゐてなづけて本分の田地といひ、本來の面目といふ。此の本來の面目に無明のねふり着きたる處を、根本無明といふ。これまよひのはじめなり。此の根本無明のねふり着きし故に、さま〴〵の夢を見る。まづ虛空ありと見る、これすなはち夢の始めなり。楞嚴經に晦昧空をなすともいひ、迷妄に虛空ありともいへるはこれなり。虛空ありと見る故に、虛空の中に天地あり、天地の中に萬物あり、萬物の中に人間あり、人間の中に我あり、人あり、鳥獸あり、畜類あり、月あり、花ありと見るよりして、にくきものあり、かはゆきものあり、このましきものあり、このましからぬものあり、これよりしてはしきものあり、をしきものあり、八萬四千のあらゆる煩惱の夢を見出して、この煩惱によりて殺生をなし、

〔八苦〕一に生苦、二に老苦、三に病苦、四に死苦、五に愛別離苦、六に怨憎會苦、七に求不得、八に五陰盛苦これなり。

ぬすみをなし、婬欲ををかし、妄語をいひ、そのほかあらゆる身になすわしきしわざは、かの煩惱にくるはされてつくりいたす惡業なり。このもろ〳〵の惡業をつくれば、地獄か、餓鬼か、畜生か三の惡道におちて、無量億劫の間さかんなる焰に身をこがされ、紅蓮（くれん）、大紅蓮の氷に骨をとぢられ、あるひは餓鬼道のたえがたきくるしみに身をしづめて、百千萬劫飲食の名をだにもきかず。水にあふてのまんとすれば、水かへつて火となりて喉をやくかごとくのくるしみをうくるも、みなこと〴〵く無明のねぶりの内の夢のありさまなり。もしまた人ありて、その惡業をひるがへし、五戒十善をたもてば、三惡道をのがれて、人間天上の生をうけて、來生めでたき身とむまれ、その善業の高下によりてそれ〴〵の樂をうく。しかりといへども是れみな三界のうちにして、無明のねふりの夢の内の事なれば、樂といふもまことの樂にはあらず、根本は苦なれども、まよひて樂とおもへるなり。まして人間にも八苦あり、天上にも五衰ありて、そのくるしみたえねば、意をとゞむべき處にはあらず、すみやかにいとひすつべき世界なり。もしまた人ありて此のことわりをあきらめて、人間天上の樂は、たのしみには似たれども、六道輪廻のうちにして、有爲無常の樂なれば、これまた無明の夢の中のあたなる樂ぞと心得て、大眞實の信をおこして、坐禪工

〔五蘊〕衣服絡香、自光怨滅、浴洒沽身、本性寶聰、兩日瞬動これなり。

夫をなす時、その心のうちに善、悪、無記の三性のしなおこる。善といふは、よき事をおもふ心、悪といふは、あしき事の心にうかふをいふ。無記といふは、善にもあらず、悪にもあらず、茫然としてうか〳〵としたる心なり。此の三しなの念おこりてやむ事なし。あるひは悪事をおもはざれば、善事をおもふ。善事をおもはざれば、悪事をおもふも、もしすこしの間など善念も悪念もおこらざれば、無記とて何ともなき茫然としたる心にて、うか〳〵としてあるものなり。その悪念は地獄、餓鬼、畜生のたね、善念は人間、天上のたねゝ、無記はいまだ善悪のわかちのなき愚痴、無明のすがたなり。かやうに善悪無記の内をはなれざる間は、いまだ坐禪の熟せざる初心の人のありさまなり。かゝる念のおこるにもかまはず、いよ〳〵こゝろざしをふかくして、退屈の心なく、ひたと坐禪する時は、坐禪の心ちと熟して、時として善念もおこらず、悪念もまたおこらず、うか〳〵としたる無記の心にてもなくして、その心すみわたりてときたてたる鏡のごとく、すみわたれる水のごとくなる心、すこしの間生ずる事あり、これは坐禪の心ちの露はゞあらはれたるしるしなり。かやうの事あらん時は、いよ〳〵すゝみて坐禪すべし。ひたとおこたらず坐禪すれば、はじめはしばらくの間、すめる心になりたるか、漸々にその心すみわたり、坐禪のうち三分か一すむこともあり。あるひは三分か二すむ事もあり、あるひは初めをはりすみわたりて善悪の念もおこらず、無記の心にもならず、はれたる秋の空の如く、とぎたる鏡を臺にのせたるがごとく、心虚空にひとしくして、法界ひねのうちにあるかごとくおぼえて、そのひねのうちのすゝしきこと、たとへていふべきやうもなくおぼゆる事あり。これはは坐禪を過半成就せるすがたなり。これを禪宗にては打成一片といひ、または一色邊といひ、大死底の人ともいひ、普賢の境界ともいふ。かやうの事しばらくもあれば、初心の人はやさとりて、釋迦、達磨にもひとしきかとおもへり、これ大なるあやまりなり。かくのごとくなりたる時を、此の第五の識蘊といふ。楞嚴經に、湛入合澈は識の邊際なりと說きたまへるは、此の事なり。世上につよく坐禪する人ありて、かやうの處を見つけては、はやさとりぞと心得て、臨濟、德山をもあざむき、われ本來の面目を得たり、本分の田地にいたれりとののしり、人にもおはく印可し、棒を行し、喝を下し、祖師のふるまひをなす。これはいまだ佛祖の内證をしらず、一心の根源にいたらざる人なり。いまだ此の處までもいたらずして、もろ〳〵の道理を心得てさとりとおもひ、あるひは一切空なる處をさとりといひ、あるひは目口をうごかし、手足をはたらかすものなどを、さとりぞとて人にもも

〔法塵〕 意根、色聲香味觸の五塵に對して好惡を分別して善惡の諸法を記す、是を法塵と云ふ。
〔辟支佛〕 緣覺のことなり。

るす人あり。これみなはるかに佛祖の心にへだゝりたる人なり。いま此の識にまよひてさとりとおもへる人は、さやうのあさき心得の人には大にかはれり、眞實もあるもろにこの處までは修行しのぼるといへども、此の識をこゝろる事をしらずして、識にまよひて本心とす、いまだ修行のいたらざる處ある故なり。楞嚴經にいはく、かくのごとく分別すべきなき時、色にあらず、空にあらず、拘舍離等がくらまして冥諦とするも、もろ〳〵の法緣をはなれては、分別の性なしと。またいはく、たとひ見聞覺知を滅して、內に幽閑をまもるも、なほこれ法塵分別の影事なりといへり。古德釋してこの內に幽閑をまもるところ、そこはくの賢聖を埋沒しをはる。宋儒の喜怒愛樂のいまだ發せざるときの氣象を見るに、たゞ此のうちにあり。老子の虛極を致し、靜篤をまもるもまたたゞ此のうちにあり。佛敎の中の阿羅漢、辟支佛の入る處の定、さとる處の果もまたたゞこのうちにありといへり。これみな見聞覺知の分別をはなれて、無念無心なる處をさして、佛も祖師もかくのごとくのたまへり。無念無心にして晴れたるそらのごとくなる處は、衆生の第八識にて、三界六道の迷をつくり出せる根本なり。この處よりして天地虛空、その中の有情非情のさま〳〵のしなを思ひ出せり。眠れる故にさま〳〵の夢を見るかごとし。三界唯識と佛の說きたまふ

〔第八識〕 阿賴耶識即ち藏識を云ふ、此の識は五根等の所依なる身、根身の所依なる器界、及び種子等を含藏するをもて藏識と云ふ。

はこの義なり。また第八識は、根身、種子、器界を緣ずと云へるも此の事なり。また楞嚴經に、陀那は微細の識なり、習氣暴流を成ず。眞と非眞と迷はん事をおそれて、我れつねに開演せずと說き給へり。古德釋して佛もし一向に眞と說きたまはゞ、衆生進修せずして增上慢に墮せん。若し一向に不眞と說き給はゞ、衆生自身を撥棄して斷見を生せん。此の故に凡夫二乘に對しては、つねには說きたまはずといへり。此の識まことの本心に似てまた本心にてはなき故に、おろかなるものに向ては、容易には佛も說きたまはず。その故は此の識を即ち眞實ぞと說きたまはゞ、衆生その處にとゞまりて、もはや滿足せりとおもひてすゝんで修行せじ。もし眞にあらずと說きたまはゞ、衆生さては一向空にして、本心といふ事はなきかとおもひて、斷無の見におちて、眞實に本心をさとる事あたはじ。しかる故に此の處大事にて容易には佛も說き給はずといふ意なり。此の識は全躰本心なれども、無明の眠りつきたる故に、すなはち本心とはいひがたし。本心とはいひがたけれども、まったもろ〳〵の妄想は、はやさりてなき處なれば、一向の迷にてもなし。もし修行の人此の處へもきつきなば、いよ〳〵精を出だして修行すべし。やがてまことのさとりのあらはるべき前相なり。たとへば夜のあけて、日のいまだいでざる時のごとし。夜のやみははやは

れぬれども、いかなる子細にてかやうに闇晴れて、世界みなあきらかになりたりといふ事をしらず。もし此のやみのはれたるをみて、はや事は成就したりとてさしおかば、日輪を見る事あたはじ。もし妄想のやみはれて、むねのうちのあきらかにすみわたりたるを見つけて、もはやさとりたりとおもひて、さしおかば、般若の日輪は見る事あたはじ。妄想の闇ははれぬれども、いまだ此の處にてはなきぞと心得てすておきもせず、またよろこびもせず、さとりをまつ心もなく、たゞ無念無心にしてひたとつとめ行かば、忽然として眞實のさとりあらはれて、萬法をてらす事、百千の日輪の一度にいでたまふがごとし。これを見性成佛ともいひ、大悟大徹ともなづけ、寂滅爲樂ともいへり。此の時三世の諸佛に一時に對面し、釋迦達磨の骨髓をしり、一切衆生の本性を見、天地萬物の根源に徹す。そのよろこばしき事たとへていふべきやうなし。此の故に楞嚴の中には淨きはまりてひかり通達す、寂照にして虛空をふくむ、かへり來て世間を觀れば、なほ夢中の事のごとしといへり。此のさとりひらけぬれば、大地虛空ことゝく法性法身の寂照不二の躰にして、森羅萬象一物としてわが本心にあらざるものなし。此の故に楞嚴には見も見緣も、現前の境に似たれども、本よりわが覺明なりといへり。見とはわが六根の中の眼の一をあげて、餘の五根

をしらしむ。見緣とは六塵の境界、一切萬法なり。これわが身も萬法も唯一の本心、妙覺明の躰なる事を說きたまへり。これを大地を變じて黃金となし、長河を攪いて酥酪となすといふ。これ眞實の極樂世界なり。むかし僧あり、雲門に問ふていはく、不起一念の時如何。雲門曰く、須彌山。また僧あり、趙州に問ふ、一物不將來の時如何。趙州いはく、放下着。僧いはく、一物もすでに將ち來らすこの何をか放下せん。趙州いはく、放不下ならば擔取しされと。その僧言下において大悟す。あるひは不起一念といひ、一物不將來といふ、みなかの無念無心の田地にいたれる僧なり。此の處をさとりぞと心得て雲門にとひ、趙州にとふ。これ病なる事をしりて、かくのごとく答へられしなり。此の須彌山、放下着を透得せば、はじめて本分の田地にいたり、雲門趙州に相見すべし。よく〳〵工夫して、此の田地にいたるべし、此の故に古人いはく、懸崖に手を撒してみづからうけがつて承當すべし、絕後にふたゝびよみがへらば、君をあざむく事を得じといひ、また百尺の竿頭に一歩をすゝめ、十方世界に全身を現すといへる、みな此のさとりのあらはるゝ時の事なり。よく〳〵坐禪工夫して此の境界にいたるべし。わやりて野狐の窟に入る事なかれ。

假名法語 終

無難假名法語

解題

無難禪師、その號を至道といふ。まわかきとき愚堂國師にしたがひ、趙州の至道無難の話を提撕して、日夜刻苦し、遂にその神髄を得たり。のち江戸にくだり、東北庵をはじめて、大に道俗を引接せられき。

禪師は、その機險峻にして、聊かも假すことなし、もゝにその門下に飯山正受老人のごとき高德をいたし、また老人の門より勅諡神機獨妙禪師をいだし、東陽の家風大に擧る。これ愚堂國師さきにこれを倡へたるに基くといへども、抑もまた禪師の副貳轉化の功に由らずんばあらず。その績大なりといふべし。

この假名法語は、禪師が晩年に物せしものにして、言近くして旨頗る遠く、人をして親しく慈容に接し示敎を聞くの想あらしむ。もし能くこの法語に通曉するを得ば、その得るところ蓋し少からざるべし。

序

三國の人、かたちは同じくしてことばは別なり。心を一にするは佛の御教によればなり。死をいとふは死をしらぬ故なり。人は直に佛なれども知らず、若し知れば佛意に背く、知らざるはまよひなり。偈を作りていはく、

識得於根元。　離別於萬法。
誰知言句外。　佛祖不傳處。

生死を知る人あらば、心のたねとやならん。いやしき詞をまきおくも、かつは身のとがをかへりみぬなるべし。つくばねの木葉の雫も、みなの川の淵となれば、わらはべのたすけにもやとおもふ故なり。

延寶乙卯孟春書之

至道庵主

假名法語　上の巻

無難禪師

『しれば迷ひしらねば迷ふ法の道
なにかはとけの實なるらん』

此歌の必明なれば大道あらはるべし。

一、佛眼（ぶつげん）ひらきみるに日本の衆生は佛にちかし。惡氣少き故なり。惡氣といふは身を思ふなり、迷ひの根本なり。しかも我身にあらず。それをわがものと思ふは、至りてあさましくかなしきことなり。たれも知ることなれども、死ぬるなり、病むなり、貧苦をうくるなり。これわが物にあらざるしるしなり。かゝるうき世に生をうけて、苦みおはきをわきまへず、命長からんことを願ふ。大方人を見るに齢七十におよぶは稀れなり。

一、ある老人の物がたりを聞くに、あはれの多きを書きといむるものをこがましけれど、むかしの友は先立ち、今の人にまじはらんとすればきたなまれ、若くは去つて座になし。秋の夜ながきに眠ることなく、かへらぬむかしを思ひ、しらぬ行末をねがふ。地獄、餓